通常文法上の時を次の樣に區分して考へてをる。

- 定時
  - (一)過去
  - (二)現在
  - (三)未來
- 不定時

右の表の定時といふのは過去・現在・未來の何れかに屬するものであり、不定時といふのはその何れにも屬しないものをいふのである。

不定時といふのは、前述の文法的範疇と論理的範疇との一致しないことを示す一つの例であつて、時間關係を全く超越してゐるものであるか、或は過去・現在・未來に通じて用ひられるものかである。

塵もつもれば山となる。

大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。

雪は冬に降る。

「降る」といふ動詞は四段にはたらく。

これ等は何れも助動詞を用ひないで動詞そのまゝで表はすのが普通である。これ等は時間に關係なく事實を述べたものであるか、過去・現在・未來に共通の事實を表はしたものか孰れかであつて、これを不定時といふ。

(二)定時

これは前述の通り過去・現在・未來の孰れかに屬するものを言ふのである。單に時といふ點から考へればこれ以外に時はあり樣のない譯であるが、言ひなしの態によつて或は存在態となり、或は進行態となり、或は完了態となるのである。この三態に對して、單なる過去・現在・未來の態を通常態といふ。而してこの通常態に於ける過去・現在・未來の標準或は單位は何であるかといふに、これは決して時間の長短に依つたものではない。卽ち時には一定の單位や標準といふものが無くて、場合に應じて變化し得るのである。たとへば

今書物を讀んで居る。

に於て、この「居る」は勿論現在であるが、時間の長さは極めて短い。又

今日は空が晴れて居る。

の「居る」は現在ではあるが、日が單位になつてをる。更に

今年は雪が度々降る。

と言つた時には、「降る」は同樣現在であるが、年が單位である。かくの如く、時の單位は決して固定的ではなく、全く相對的である。今年を現在とすれば去年は過去であり、明年は未來である。今日を現在とすれば昨日は過去、明日は未來である。

以下定時のそれ〴〵に就いて要點を説明しようと思ふ。

（三）現在

現在時を現はす樣式は動詞そのまゝで別に之に助動詞を添へないのである。文法上の時（Tense）の概念はこの現在が基本となつてゐるのである。現在時は動詞そのまゝで助動詞を添へないと言つたが、之を逆に言つて、動詞に時を表はす助動詞を添へないものがすべて現在時を現はすとは限らないのである。これは前に述べた文法的範疇と論理的範疇との一致しないところから來るものである。

月は地球の周圍を廻轉す。

私は毎夜十時に寢る。

急がば廻れ。

私は明日出發する。

父は一週間後にきつと歸つて來る。

これ等は何れも動詞そのまゝで、これに時を表はす助動詞を添へてゐないが、決して現在を現はしてゐるのではなくて、間斷なく繼續する動作や、日常の習慣的動作や、何れの時、何れの處にも通ずる眞理や格言の如きものや、又ある動作が未來に起る事の確實な場合等を現はしてをるのである。

なほこの外に所謂歴史的現在（Historical present）と稱するものがある。樣式は現在であるけれども實は過去を現はしてゐるのである。これは動作の過去に起つたものを、力强く表現するためにわざと用ひる樣式であつて、その表現はむしろ修辭的の要求から來たものである。

戰は愈々始つた。砲聲がひゞく、彈丸が飛んで來る、突喚の聲が聞える、實に悽愴の極みであつた。

右の如きはその例である。又萬葉集の歌の中などでも、過去の助動詞を加へるべきに、之を加へずに使はれてゐるものがある。これなどは單に形のみから判斷してたゞちに現在ごのみ考へては釋き得まい。文法の說明には歴史的の說明が必要であると同時に、心理的の必要も大いに必要な場合がある。而して人間の心理作用は必ずしも論理的發展に從ふのではないから、文法上にも論理と一致しない多くの點を發見し、又これを肯定しなければならない多くの場合に接するのである。これを强ひて論理的範疇のみに依つて說かうとすれば非常な誤に陷ることになるのである。

（四）過去の助動詞

文語の過去の助動詞には「き」「けり」の二語がある。その活用は次表の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
き	○	○	き	し	しか	○
けり	（けら）	けり	けり	ける	けれ	○

その活用形の用ひられ方は次の例で分らう。

昨日は雨降りき。（終止形）

逝きし年又いつか歸らん。（連體形）

風烈しかりしかば火を失したりき。（已然形）

昔男ありけり。（終止形）

余の住みける時はまだ寒村にすぎざりき。（連體形）

所狹き身こそわびしかりけれ。（已然形）

梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべくなりにけらずや。（萬葉集）（未然形）

「けり」の連用形の用例は殆ど見つからない。

「き」も「けり」も共に動詞の連用形に連續するのであるが、この中「き」だけは一種特別の連續をなすのである。卽ち「き」が佐行變格と加行變格の動詞に連る時には次の如き連續をなすのである。

（一）佐行變格の連用形には「き・し・しか」の中の「き」のみ續き未然形には「き・し・しか」の中の「し・しか」のみ續く。

例

運動せ（未然形）→し（連體形）時
↙已然形　しかども
運動し（連用形）→き（終止形）

運動せ（未然形）　運動し（連用形）　運動し（連用形）
き（終止形）　し（連體形）　しか（已然形）

之は用ひず

（二）加行變格には「き・し・しか」の中の「き」は絶對に續かず、その代り、「き・し・しか」の中の「し・しか」は未然形にも連用形にも續くのである。

之を分りやすい樣に表示すれば次の通りになる。

例

來（未然形）→し（連體形）
↙已然形　しかども
來（連形）→し（連體形）

來（未然形）　來（未然形）
き（終止形）　き（終止形）

之は用ひず

案するに、佐行變格の連用形は便宜のために普通は唯「し」のみとしてあるが、實は「せ」と「し」の兩形があるので、

爲　せ　し　す　する　すれ　せよ

かくの如く記すべきで、助動詞の「き・し・しか」の中「し・しか」は二個の連用形の中の「せ」につゞき、「き」は他の「し」に續くと說明するのがよいのかも知れない。同樣に加行變格の連用形も「こ」と「き」とがあつて、

	語幹	未然形	助動詞	連用形	助動詞
佐行變格	來	こ	＼し しか	き	＼し しか
加行變格	勉强	せ	＼し しか	し	｜き

來	こ	き	く	くる	くれ	こよ

と記すべきで、「き・し・しか」の「し・しか」がその二個の連用形の何れをも受けると說明するのがよいのかも知れない。これは恰も今日の口語の佐行變格の未然形には、「せ」と「し」との二形があつて、打消の助動詞「ん」はその中の「せ」に連續し、「ない」は「せ」又は「し」に續くのと同樣であらう。

この佐行變格の未然形「せ」に「し・しか」の續いて出來た「せし」「せしか」と、佐行下二段活用の連用形「せ」に「し・しか」の續いて出來た「せし」「せしか」とは全く同形であるため、更に佐行四段活用の已然形「せ」より「し・しか」をつゞけて、「暮せし時」「暮せしかば」等いふ樣に類推されて用ひられるに至つた。（正しくは佐行四段の連用形「し」に「し・しか」を連ねて「暮しし時」「暮ししかば」と言ふべきである。）

佐變	爲	せ（正シキ連續）∧しか	し	す	する	すれ	せよ
佐下二	痩	せ（正シキ連續）∧しか	す	する	すれ	せよ
佐四	暮	さ	し（正シキ連續）∧しか	す	す	す（許容サレタル連續）せ∧しか	せ

中古では佐行四段の連用形から續けて正しく用ひたのであるが、鎌倉時代以後已然形から續ける事が多く行はれ、德川時代に於ては全く普通のことになつてしまつたのである。從つて現代文ではこれを許容してゐる。即ち文法上許容に關する事項の八には次の如く定めてある。

佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例　唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五個月ヲ費セシノミ

更に前述の表でも分る樣「き・し・しか」に於て、その終止形は勿論「き」である。併し中古のものに既に連體形の「し」を以て終止とした場合がある。

かの君にかたり聞えければ、うれしくいひたると悅び給ひし。（春曙抄、八）

なでしこの花を取りておこせたりし。（源氏物語）

昔ものがたりめきて覺え侍りし。（同）

これは、終止ではあるけれども所謂連體止めであつて下に「ことよ」とか「ものぞ」とかいふ樣な語を省いた氣持で詠歎の餘意を含んでゐると見るべきものと思ふ。萬葉集などにもこの例が見える樣である。併し後世とくに足利の季世以後に至つては、「十年を暮しゝ」「我正に見し」等の如く本當の終止として連體形を用ひる事が多くなつて來たので、現代文ではこれが許容されてゐる。即ち例の文法上許容に關する事項の三に次の如く定めてある。

過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例　火災ハ二時間ノ長キニ亘リテ鎭火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

次に過去の助動詞「き」と「けり」との二者の間に相違があるかどうかといふ問題を考へてみる。吉澤博士の「中等新國文典別記」には「過去時の通常態を示す『き』と『けり』とは、其の音調に緩急ある樣に、意義にも亦緩急がある。『けり』は緩で『き』は急である。『けり』は『こんな事もあつた』と云ふ位の語氣で云ふのであるし、『き』は『この事實があつた』と緊張した語氣で話すのである。」と書いてある。この兩者を比べてみると「き」は「けり」に比して過去の過去たる所以が純粹の樣に思はれる。「けり」は「き」に比して多少餘情の加はつた心持があるのである。

昨日雨降りき。
昨日雨降りけり。

この兩者を比べてみるとこの事が或る點まで首肯出來るであらう。本居宣長と並んでテニヲハ研究の學者である富士谷成章の著「脚結抄」卷四にはこの「き」と「けり」との區別が次の樣に說明してある。

（來）は過たる事をたしかにさだめていふ詞なり。但またく人にむかひていふことばにて、たま〳〵ひとりごとにいふにも、みづからとひ自こたふるほどの心にのみよむべし。

「けり」は萬葉に來とかきたれど、まことは來有の心なり。すなはち「き」の立井なれど、「き」にのみよめるにくらぶれば例のなりもじそひて心ゆるべり。「き」は人にちかくあひむかへるやうにいへり。「けり」はおなじくいひさだめたる詞ながら、理にかゝはれるかたのおもくて、みづからいへる詞となれり。

この意味は、「き」は純粹の過去であつて、「けり」は多少餘情を含んでゐるといふ前述の意味であらう。和歌や抒情文に「けり」の方が多く用ひられるのはこの點に基いてゐるのであらう。從つて「けり」は過去の意を失つて詠歎の意を表はす助動詞に移るのである。

年の内に春は來にけり一年をこぞとやいはむ今年とやいはむ　（古今集）

はその例である。

更に「けり」は過去の意を表はしてゐながら「き」に比して、過去の動作を存在的に間接に記述するもので、ある場合には繼續體とも見られると說く人がある。

富士の高嶺に雪はふりけり。
今一入の色まさりけり。
山部の赤人といふ人ありけり。

この存在繼續の意味が更に轉じては、時の意を離れて一種の事實に基く眞理をいひ表はす樣にもなる。右の第二例の如きはその趣を持つてゐるのである。

その他これに關する說を一二あげてみると、草野清民（明治三十四年八月「日本文法」の著あり）の說に次の樣なのがある。

「き」は單に過去の動作又は有樣を示すに用ゐることあり。「けり」の過去を示すものと大抵同樣なり。但し「き」は人と直接談話する時、即ち對談する時、又は對談せりと見做すべき時に多く用ゐる古例なり。（但し必ずしも然るに非ず）「けり」は多く單に過去のことを記錄する時に用ゐることとなるを「き」も又同樣に用ゐることあり。故に今日となりては强ひてその區別を設くるに及ばざるべし。「き」の下に名詞の來る時は「し」となる。此場合

は多く「けり」の下に名詞の來る時「ける」となると同樣に非談話的の場合にも多く用ゐたり。（中略）

正しき例どもを揭ぐれば「き」は對談「けり」は記錄的と區別あるが如くなれども相混じ居るもの多し。

又或人は「き」は說話に用ひ、「けり」は地の文に用ひると說く人もあるが、更に又これを反駁して、「叙述的、對話的といふよりも、更に漠然たる語を以て分たなければならない。すなはち傍觀的に動作を述べようとする時は『けり』、直寫的に述べようとする時は『き』を用ひるといつたらよからう」（小林好日氏）と論ずる人もある。

最後に山田孝雄氏はその著「日本文法論」の中の「回想をあらはす複語尾」の條下で次の如く論じて居る。

「けり」は「き」と等しく回想をあらはすに用ひらるゝが故に、往々「き」の代理をなすことあり。然れども、その間に差異は明に存す。即「けり」は啻に回想するのみならず、必現實を基本として、これによりて回想を起すなり。この故にまゝ咏歎の「けり」などと稱せらるゝものあり。かゝる意義を語原的にいはゞ「けり」の「あり」は基本を現實に立てしむるものにして、「き」は回想をあらはす所謂果を見て因を思ふものなり。即過去を回想して斷定を今に下す意あるなり。これを俚言に譯すれば「き」は「た」、「けり」は「たわい」「たことぢや」などにあたるなり。云々

諸說あるが、要するに、最初にあげた「中等新國文典別記」の說あたりにとゞめておいてよからうと思ふ。

（五）未來の助動詞

未來時を現はす文語の助動詞は「む」一語である。その活用は次表の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○

「む」は常に動詞の未然形に連るのが原則である。

明日は雨降らむ。（終止形）

友の來らむ日は何日なるか。（連體形）

雨こそ降らめ。（已然形）

古くは「む」（mu）と發音したのであらうが、早くよりその母音を失つて（ɲ）となり、それより「ん」又は「う」と變じたものらしい。この「う」は口語の未來の助動詞である。

「む」は時の點からいふと勿論未來時であるが、未來の時は概念の上からいふと、推量や決意と相近いので、時の助動詞から轉じてこれ等に用ひられる事がある。

余は明日行かむ。

といふ時には、未來の意味よりも推量及び決意の意味の方が多い樣に思はれる。同樣の關係が逆に行はれる場合もある。即ち推量や決意を表はす助動詞「べし」が未來の意味に用ひられる事があるのである。

明日は雨降るべし。

の例はこれである。

なほ奈良朝時代の語に「まく」といふのがある。

君を見まくは千歳にもがも（萬葉集）

時つ風吹かまく知らに　（同）

この「まく」は「大日本國語辭典」などにも「未來の助動詞む（ん）の延」と説明してある。これは「日はく」「聞かく」「願はくは」「いふならく」等と共に宣長等に依つて所謂延音又は舒言などと稱へられたものである。しかし「む」が加行音の「く」に延びるといふ事は如何なる事であるか甚だ曖昧な説明といはなければならない。これに就いては山田孝雄氏の「奈良朝文法史」に於て述べたる説を參考に引用して置きたいと思ふ。

延言と稱せられたる「く」……こは語原の明ならぬが爲に種々の説明をうけたり。或は延言、延音、舒言などいはれたれども、そは何のいはれもなき説にして明にその添はりたる丈の意義あれば、必こは外より添へしものなること明なり。或は又反切法を逆に應用して説明を下せるもあれど、それも亦謂なきものなり。過ぎし頃岡倉由三郎氏のこの「く」を以て「こと」なりといへる新説出でしが、そは不通の點あることは岡澤鉦次郎氏の論駁せる所なり。かくて岡澤氏は之に解釋を下して形容詞の語尾の「く」と同一なりとし、近頃に至りて金澤庄三郎氏は韓語との比較研究よりして岡澤氏と似たる説を立てたり。しかれども、この形容詞の語尾と同じとするものは頗通ぜざる處あり。先金澤氏の説の如く形容詞動詞が同じ活用なりとするを承認すとせむに、

吾妹（わぎもこ）の念へりしくし面影にみゆ（萬葉四）

玉拾ひしく常忘らえず　（萬葉七）

……

の如き回想の複語尾をうくるは何故なるか。而、こは大方の複語尾に附屬するにあらずや。

かくて「しむ」「す」「む」「つ」「ぬ」に連る例として

秋田苅るまで思はしむらく　（萬葉十）

あがまたなくに　（萬葉十七）

時つ風吹かまくしらに　（萬葉七）

辭（いな）び申しつらく　（三十六詔）

としのへぬらく　（萬葉十五）

等をあげて「これらみな所謂語尾といはるべきか。余は之に贊同すること能はず。」といひ、なほ多くの例（同書四四八頁――四五一頁參照）をあげて次の如く述べてゐる。

今上にいへる形容詞に「く」が添はりたるものを金澤氏の説明にせば、形容詞の語尾に更に語尾の添はりたるものとなるべし。恐らくはこの「く」は語尾にもあらず、又「こと」にあらざるものならむ。

余はこゝに自己の臆説を試みむ。先この「く」は其の意義用法の上に二樣あり。一は體言となすものにして、一は修飾語となすものなり。こは人のいひふるしたる所なれば、今殊更にいはず。さて、余の意見によれば、この「く」は場所をあらはす詞となすなり。この「く」は又「こ」ともいひて「こゝ」「そこ」「いづく」などいへるものなり。しかしてこの「く」又は「こ」は當時の用例に徵して見るに、決して單純に空間をあらはすに止まらずして、

思想上のある點を指示すること頗多きなり。

こゝ念へば胸こそ痛き　（萬葉集九）

そこし恨めし秋山吾は　（萬葉集一）

……

これら、みな「この點」「その點」といふにあたれるなり。今これを以てかの「く」にあて、試みむに、礼言とせるは「その點は」又は「その點を」などいふ意にあたり、修飾語となれるは「その點には」といへるをあつべく、大むねこの意にて通ぜざるものなきなり。なほかくいふ確たる例は

梅の花散らくはいづく　（萬葉集五）

といへるは確に場所をさしたるものにして、次のは「く」と「そこ」と對せり。

きかなくそこは怨みず　（萬葉集十九）

この故に、余は「く」を以て場所を示すものとし、慣用の久しきにつれて種々の意義用法を呈するものとなさんとす。

この說はとにかく傾聽すべき一說であらうと思ふ。な小林好日氏の「國語國文法要義」の中（三九八頁及び四〇七頁參照）にも多少說があるが、氏は「く」を以て一種の活用語尾となす說である。

なほこの外に「む」に關係のある未來のいひ表はし方に、「むとす」といふのがある。動作がまさにこれから起らうとする狀態をいひ表はしたものである。

木の葉さやぎて風吹かむとす。

雨まさに降らむとす。

「と」といふ助詞の下に佐變の「す」がついて出來たものである。この「むとす」は古くは「むず」といつた。

思ひも知らで罷りなんずることの、くちおしう侍りけり。（枕草子）

いま秋風吹かむをりにぞこむずる。（枕草子）

この「むず」の「む」が「う」となつて次の樣にいふ場合もあつた。

うち笑ひおはさうず。（源氏物語帚木）

人はなかりければ、そらみゝ聞きおはさうじて（和泉式部日記）

更にこの「む」が省かれて單獨に「ず」のみ使はれて未來を表はす場合もあつた。

この歌ぬし又まからずといひて立ちぬ。（土佐日記）

この「ず」を打消の助動詞の「ず」と混同しない樣にしなければならぬ。今日長野縣や靜岡縣の一部で「行かう」といふ場合に「行かず」といひ、「行かうか」といふ場合に「行かずか」等いふのはこの「ず」が殘つて未來に使はれてゐるものと思ふ。

（六）完了の助動詞

前述（二）のところで述べた樣に、過去・現在・未來が文法上の時の根本的區分であつて、その他は言ひなしの態によつ

ていろ〳〵に變化し、或は存在的となり或は進行的となり或は完了態になるのである。かうした言ひなし態に變化を與へるのはやはり助動詞の働であつて、これを完了の助動詞（完了といふ名稱は實はこのいひなしの態の中の一部分なのであるが、完了を表はすのが本義であるところからかう呼んでゐる）といふ。文法家によつてはこれを動作態の助動詞といつてゐる人もある。而してこの動作態の助動詞によつて言ひ現はされる形式は、必ずしも嚴重に時間的の關係を表はすものではなくて、時間（過去・現在・未來）にある關係を有してゐる一種のいひなしの形式なのである。小林氏の言をかりていへば「過去・現在・未來の區別は事件の話者に對する關係である。事件が話をなす時と同時なるか、之より以前なるか、之より後に起るべきかの區別である。事件對、話者の相對的關係である。之に對して動作態は動作そのものの狀態すなはち動作の形式である。目の前を人が通つてゐる場合、その繼續してゐる動作は繼續態、その人が歩行をこゞめて立どまるとき、その動作は完了態、立どまつてゐる狀態は存在態である。すなはち過去・現在・未來は主觀の認識の形式であり、動作態は動作の客觀的差別性である。然し兩者は交渉のあるもので、客觀的に見た動作の完了、之を主觀に移せばすなはち過去である所から、完了を現す語法上の形式が過去をあらはす形式となる如きことは、國語史上にも一般言語史上にも絶えず認められる現象である。」（「國語國文法要義」四一〇頁――四一一頁）の　である。通常態と動作態との關係はこれで明瞭であらう。

この完了の助動詞には次の四語がある。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	（たれ）
り	ら	り	り	る	れ	（れ）

（下二段型活用）　（良變型活用）

その活用は右表の通りであるがその連續は次の如くである。

つ
ぬ　動詞の連用形につゞく。（但し「ぬ」は奈變のみには連らない。これ「ぬ」の語原が「去ぬ」であるからである。）
たり

り　四段活用の動詞の已然形
佐行變格活用の動詞の未然形　のみにつゞき他の動詞にはつゞかない。

以下各語に就いて說明を加へる。

1、「つ」と「ぬ」

この二語は完了態として、過去・現在・未來の三時に應じて次の三樣の態を生ずるのである。

(1)完了現在態

つ　手紙はすでに書きをへつ。

ぬ　櫻の花も散りぬ。

(2)完了過去態

てき　夢てふものはたのみそめてき。（古今集）

てけり　鬼はや女をば一口にくひてけり。（伊勢）

にき　昔より心は君によりにしものを。（伊勢）

にけり　心地まどひにけり。（伊勢）

(3)完了未來態

てむ　秋の菊匂ふ限りはかざしてむ。（古今集）

なむ　散りなむ後ぞこひしかるべき。（古今集）

花の散りなむ後のかたみに。（古今集）

なほこの外に不定時に用ひられた「つ」と「ぬ」とがある。これを強ひて時にむすびつけて解かうとすれば本義を得ないのであつて、これは時に關係なく考へなければならない場合である。（「國語國文法要義」四一一頁――四一七頁參照）

御大事今日に極り候ひぬ。

明けすぎぬ。あな見ぐるし。

冬ごもり春去り來ればなかざりし鳥も來鳴きぬ。（萬葉）

ほとけもなか〳〵心きたなしと見給ひつべし。（源氏）

袖ふらば見もかはしつべく近けれど渡るすべなし秋にしあらねば（萬葉）

右に示すごとく「つ」と「ぬ」とは完了態を形成する根本の語で、若し現代の口語に譯するならば「テシマフ」に當るのが本體である。これが過去の意味に用ひられるに至つたのは鎌倉時代以後のことである。

この「つ」及び「ぬ」は進行態及び存在態は表はさない。

さて次にこの「つ」と「ぬ」とに就いては如何なる區別が存在するであらうか。吉岡郷甫氏はその著「文語口語對照語法」に於てかう言つてをられる。

古來種々の說がありますが「ぬ」は自動を受け、「つ」は他動を受けると云ふ說が最も勢力を得て居ります。併しこれも一概には申せませんで、實例にあたつて見ますと、其の例外も少くありませぬ。元來「つ」と云ふ音は鋭くて强くて、殊更にするやうな意味があり、「ぬ」と云ふ音は緩くて、弱くて自然になるやうな意味がありますが、他動・自動にも大凡之に似た區別がありますので、他動には自然に「つ」が多く附き、自動には自然に「ぬ」が多く附くのでありませう。併し他動・自動は動詞固有の性質で、自由に動かすことが出來ませんから、之に依つて別ちますと、自然多くの例外も出て參ります。それで必ずや其の言ひ方に依つて區別しなければなりませぬ。即ち話す人が事實を主觀的に直寫するが如き强い表彰法には「つ」を用ゐ、客觀的に說明するが如き弱い表彰法には「ぬ」を用ゐると、かう云つたならば大抵は外れはあるまいと思ふのであります。例へば

かの方にはや漕ぎ寄せよ時鳥道に鳴きつと人に語らむ

山里に知る人もがな時鳥鳴きぬと聞かば告げに來るがに

「鳴く」は自動でありますが、斯の如く「つ」も附けば「ぬ」も附く。併し前のは動作を主觀的に表し、次のは客觀的に表したのであらうと思ひます。（同書二一〇頁——二一一頁參照）

即ち「つ」や「ぬ」の續く動詞を標準にして區別し、「つ」は多く他動に、「ぬ」は多く自動に連ねて用ひられた等いふ區別は、多くの例外を持つてゐて區別の標準にはならないのである。「ありつる事」（自動）「鳴きつる方」（自動）「旅寢しぬる」（他動）「憂き目見えぬる」（他動）「暮しぬ」（他動）等多くの例外があるのである。又ある人は有意的動作を表はす場合には「つ」を用ひ、自然的動作を表はす場合には「ぬ」を用ひると說く人もある。しかしこれも畢竟强弱の差が考へさせる類推かと思はれる。更に小林好日氏はこの兩者の區別を「動作の完了のみが觀ぜられるのが『ぬ』、動作の完了と共に動作の惹起す結果の觀念をもつてゐるものが『つ』である」としてをられる。（「國語國文法要義」四二〇頁——四三〇頁參照）。併し斷定的にこれ等の說を保證するためにはまだ研究も必要であらうと思ふのでこゝでは、むしろ外形的のみに觀察して、語勢の强弱を以て「つ」と「ぬ」との區別とする程度に止めて置きたいと思ふ。

2、たり

「たり」の活用と連續とは既に示した通りである。而して、この「たり」は動作態として、過去・現在・未來の三時に應じて、次の三樣の態（時と組合はせて九種の態）を成立せしめる。

態＼時	現在時	過去時	未來時
完了態	たり	たりき たりけり	たらむ
進行態	たり	たりき たりけり	たらむ
存在態	たり	たりき たりけり	たらむ

以下一々に就いて用例を示してみよう。

(1)完了現在態

たり　月出でたり。（月が出た。）

(2)完了過去態

たりき　風止みたりき。（風が止んでしまつた。）

たりけり　月出でたりけり。（月が出てしまつた。）

(3)完了未來態

たらむ　風止みたらむ（風が止んでしまはう。）

(4)進行現在態

たり　川は晝夜流れたり。（川は晝夜流れてゐる。）
（川は晝夜流れてをる。）

(5)進行過去態

たりき　風止みたりき。（風が止んで居つた。）
たりけり　花散りたりけり。（花が散つてゐた。）

(6)進行未來態

たらむ　雪降りたらむ。（雪が降つてをらう。）
（雪が降つてゐよう。）

(7)存在現在態

たり　川には橋を架したり。（川には橋が架けてある。）
離々として春草生ひたり。（春の草が茂つてをる。）
（春の草が茂つてゐる。）

(8)存在過去態

たりき　看板を掲げたりき。（看板が掲げてあつた。）
たりけり　鐵橋落ちたりけり。（鐵橋が落ちてをつた。）
（鐵橋が落ちてゐた。）

(9)存在未來態

たらむ　新鐵橋架せられたらむ。（新しい鐵橋がかけられてあらう。）
（新鐵橋がかけられてをらう。）
（新鐵橋がかけられてゐよう。）

以上示した諸例は、多少强ひて作つた嫌も多いもので、文語に於てはさまで嚴重に、時に應ずる三態を區別しては使つてゐないやうであり、從つて助動詞の用法の上にも混雜があるやうであるが、こゝには大體の標準を示して置いたのである。

元來「たり」といふ語は「てあり」の約とも見られる語で、口語に譯すれば、「てある」「てゐる」「てをる」等に當るので、動作は終つてその結果や影響が殘つて存在し、又それが繼續してゐる事を示す語なのである。この點は、單に動作が完了したといふ事のみを示す「つ」「ぬ」と、「たり」との違ふ點である。

(3)り

「り」の成立に就いてはいろ〳〵說がある樣である。「つ」の連用形「て」に「あり」の加はつて出來た「てあり」の約であるといふ說、（かうなれば「たり」の成立と同樣になる。）又、四段活用及び佐行變格活用の連用形に「あり」がむすびついて出來たものであるといふ說もある。この點にはなほ議論の餘地もあるが假りに後說に從つて置く。且つこの「り」はその連續上に於て一種特別な方法によるので、前述の如く、四段活用の已然形、佐行變格の未然形

にのみ連つて他には續かないのである。

四段及佐變の連用形はi音である。

四段及佐變の已然形はe音である。

「あり」の「あ」は　a音である。

この三者の母音の關係はやがて「り」の成立に聲音學上の解決を與へるであらう。既にこの點に着眼した人もある樣である。

この「り」も「たり」と同樣、動作態として時の三時に應じて次の三樣(九種)の態を成立せしめる。

態＼時	現在時	過去時	未來時
完了態	り	りき りけり	らむ
進行態	り	りき りけり	らむ
存在態	り	りき りけり	らむ

以下各々の例をあげてみよう。

(1)完了現在態

り　戰爭起れり。

(2)完了過去態

りき　文を書き給へりき。

りけり　戰爭には勝てりけり。

(3)完了未來態

らむ　雪も降れらむ。

花も散れらむ。

(4)進行現在態

り　雪降れり。(雪が降つてゐる。)

(5)進行過去態

りき　雪降れりき。(雪が降つてをつた。)

りけり　文書けりけり。(手紙を書いてゐた。)

(6)進行未來態

らむ　花も咲けらむ。(花も咲いてゐよう。)

(7)存在現在態

り　會場には十分の設備せり。（設備がしてある。）

(8)存在過去態

りき　書き給へりき。（書いてをられた。）

りけり　梅の花の咲けりけるをよめる。（咲いてゐるのを。）

(9)存在未來態

らむ　花咲けらむ。（花も咲いてをらう。）

「たり」に就いて言つたと同じことがこの「り」に就いても言へる。完了の外に進行・存在の意味に用ひられる。この場合「たり」と同樣動作の結果影響が繼續し存在してゐる事を表はすのは勿論、又動作そのものゝ進行繼續してゐることをも表はすのである。即ち

雪降れり。

は「雪降りたり」と同樣にも用ひられるが更に、現在止まずに雪が降りつゝある事をも表はすのである。

「り」は「たり」は現代文では多く完了態として用ひるのであるが、古くは存在にも進行にも多く用ひられてゐる。小林氏の統計によると、「日本紀古事記の用例を歸納して見ると、『たり』は全く無く、『り』は用例總數三十五中、繼續態五、存在態二十九、完了態はわづかに一個、そのうち一個は紀に『かめる、おほきみ』とあるものであつて、同じ歌が古事記では『かみしおほきみ』となつてゐるのである。」といふ事である。その他「り」の意義について の先人の說等に就いては同氏の「國語國文法要義」（四四〇頁——四四八頁）を參照すれば得る所多からう。

「たり」と「り」の嚴格なる用法は漸次くづれて、進行現在などを表はすためには「つゝあり」といふ語を復活させて（これは上代では「つゝをり」と共に多く用ひられたのである）使用することになつた。

勉強しつゝあり。

職を求めつゝあり。

古い用例では

かくのみや戀ひつゝあらむ。（萬葉）

御几帳たてつゝあるに。

等多い。（「つゝ」に就いては助詞の條參照）

(七)時の助動詞に關する補說

以上時の助動詞全體に亘つての概說を述べたのであるが、その他說きもらした點や、補ふべき注意事項をこゝにまとめてしるして置く。一定の順序を追ふのではなく雜然と並べたまでである。

1、三種の「なむ」の區別

(1)花咲きなむ。　連用形＋完了助動詞「ぬ」ノ未然形＋未來ノ助動詞「む」ノ終止形

(2)花咲かなむ。　未然形＋助詞、希望ヲハ表モスノ、

(3)それは花になむ。　係ヲ表ハス助詞

第一の「なむ」は一つの語ではなくて完了の助動詞「ぬ」の未然形(何故に未然形が出てゐるかといへば下の「む」は未然形に連續する語であるからである。)に、未來の助動詞「む」の連續したものである。完了の「ぬ」は動詞の連用形に連るから、「咲き」は加行四段の動詞「咲く」の連用形が出てゐるのである。意味は「花が咲いてしまはう」である。

第二の「なむ」は一語であつて希望の意を表はす助詞である。この助詞は動詞の未然形に連續するから、その點で第一の「なむ」とは明瞭に區別が出來るのである。意味は「花が咲いてほしいものだ。」である。

第三の「なむ」も一語であつてこれも助詞である。これは係に使はれた助詞であつて、下に「ある」といふ樣な語の省畧されてゐる形である。この語は係に使はれるといふ意味や、その連續に一定の規則がないといふ點からすぐ區別が出來る。(後章係助詞の條下參照)意味は「それは花である。」である。

2、二種の「らむ」の區別

(1) 花咲け　已然形
　　らむ。　完了ノ助動詞「り」ノ未然形
　　　　　　未來ノ助動詞「む」ノ終止形
(2) 花咲く　連體形
　　らむ。　推量ノ助動詞「らむ」ノ終止形

第一の「らむ」は二語であつて、完了の助動詞「り」の未然形「ら」に、未來の助動詞「む」の終止形がついたのである。完了の「り」は四段活用の動詞の已然形か佐變の未然形にしか連續しないのであるから、これに注意すればすぐ見分けがつかう。意味は「花が咲いてゐよう」である。

第二の「らむ」は之に反して一語で、これは後項に述べる推量の助動詞であつて、動詞の連體形に連續するのがきまりであるから、この點で前者との區別が出來よう。意味は「花が咲くだらう」である。

3、完了の助動詞相互の連續

完了の助動詞は大體意味が似てゐるから、御互に連續することは稀なのであるが、次の樣に使はれることがある。

に|たり(「ぬ」の連用形+「たり」の終止形)

に|て|侍り(「ぬ」の連用形+「つ」の連用形)

冷え入りに|たれば(「ぬ」の連用形+「たり」の已然形)

ふせごのうちにこめたり|つるものを(「たり」の連用形+「つ」の連體形)

第一の意味は「てしまつてゐる」、第二の意味は「てしまつてをります」、第三の意味は「冷たくなつてしまつたので」、最後は「籠の中に入れてあつたものを」の意である。

4、所謂波行延言なるもの

「遣る」を「遣らふ」といひ、「散る」を「散らふ」といひ、「住む」を「住まふ」といふが如きもので、從來は延言、伸言、舒言などと稱せられてをつたものである。山田孝雄氏は「奈良朝文法史」(一六六頁—一七四頁)に於て繼續作用を表はす複語尾(助動詞)として說いてをられる。この語は

原形	未然形	連用形	連體形	已然形
ふ	は	ひ	ふ	へ

と活用する。而してこの複語尾は多く四段活用につく。氏は複語尾と本來の動詞との間には聲音上の一種の調節のあることを指摘し、更にその意義に就いては鹿持雅澄の說に贊意を表し、次の如く言つてをられる。

「其の意義は一の作用の長時繼續せることをあらはせるものにして、決して本原の詞のそのまゝの意義にあらざるは明なり。この故に余はこれを以て繼續的作用をあらはすものとせり。意義に於いては鹿持氏の說まことによし。されど、之を以て伸言又は舒言といへるはなほ不可なり。元來かの「延ばす」又は「伸びたる」といふ語の眞義すでに明ならず。「かたらふ」にありて、「らふ」の反が「る」なる故「らふ」は「る」の伸びたるなりといふが如きは、今日の學問界に存在の權利なき本末轉倒の謬見なり。これらは伸ばりたるにあらで、かへりて添はりたるものなるは、形體上明なることにして、又意義の上より見ても原義を含めれば、添はりたるものなることは爭ふべからざるなり。これ吾人が之を複語尾となしたる理由なり。」且つこの語は萬葉集以前に隆盛を極めた時代があつて、萬葉時代はこの語の瀕死時期だとしてをられる。即ちこれは萬葉以前では各種の動詞について自由に使はれたものと思はれる。

とにかくこれは一種の繼續を表はす助動詞として見てゐる人のある事に注意を要する。

5、時限關係以外を表はす時の助動詞

時の助動詞が時限關係以外の意味を表はすといふことは前述した通りであるが、今一度このことについて言ひ加へて置きたい。元來過去の助動詞は動詞の表はす動作を確定的に言ひ表はすつとめをも持つてゐるものである。物を搜してゐて發見した時に、口語では「あつた、あつた。」といふ。この「た」は決して過去に存在したことを表はしてゐるのではなくて、現在を確定的に言はうとするのである。「り」「たり」「き」にはかうした時以外に使はれる事が稀な樣であるが、「つ」「ぬ」「けり」にはこの事が多い樣である。

「つ」と「ぬ」は「きつと」「必ず」といふ確定の意味に用ひられる事がある。

空晴れぬべし（空がきつと晴れるだらう）

其の儀ならば北面の者どもの中に、矢をも一つ射出す者もありぬと覺ゆるぞ。

折らば折りつべき枝（折つたらきつと折れさうな枝）

此の後も讒奏する者あらば當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。

「けり」は「にちがひない」といふ樣な意味を表はすことがある。

早苗とる山田のかけひもりに　けりひくしめなはに露ぞこぼるゝ　（新古今集）

岩間には氷のくさびうちて　けり玉るし水も今はもりこず　（後拾遺集）

前者は「山田のかけひがもつたにちがひない」といふ意味であり、後者は「氷の楔をうつたにちがひない」といふ意味である。

「む」も未來以外に使はれる。その場合は丁度過去の助動詞の反對で、非確實又は假定を表はすのである。

遠からむ者は音もに聞け。

我と思はむ者は來れ。

思はむ子を法師になしたらむこそは悲しかるべけれ。（徒然草）

この「む」はいづれも「假りにさういふものがあるならばその者は」の意であつて、將來さういふ事があるとか無いとかといふ未來の事を言つてゐるのではない。又

いかでさる事あらむ。彼が病氣にかゝりたりこは必ず訛傳なるべし。

の如きも決して未來ではなくて、「べし」に通ずる意味を持つてゐるのである。かういふ「む」の使はれ方を「思想法」と呼ぶ人もある。

「り」にも單に動作を勢強くいふにすぎないといふ用法がある。

たとひ廣くつくれりとも誰をかやどし誰をかすゑん。（この項佐々政一博士講「日本文法概論」一二八頁—一三四頁參照）

6、過去の助動詞「き」の未然形

「き」といふ助動詞は「き・し・しか」と活用するのであるが、この外に未然形に「せ」を加へる人がある。

歸る雁西へ行きせば玉章に思ふことをば書きつけてまし

世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

この「せ」は下に接續助詞の「ば」を加へて事實に正反對な假定を表はすのみに用ひる。口語の「だつたら」に似た意味である。この場合には、下を「まし」といふ語を以て受けるのが通である。しかしこれを「き」の活用言とするに就いてはなほ研究の餘地がある。それは上の活用言とこの「せ」との間に助詞、たとへば「も」の如き語を挿入する事の出來る點である。「行きせば」は「行きもせば」といへるし、「なかりせば」は「なかりもせば」と言へるではないか。動詞と助動詞が連續する場合に、その間に助詞の介在するといふ事があるであらうか。こゝに疑問の餘地があると思ふ。

山田孝雄氏はその著「奈良朝文法史」（二一一頁—二二二頁）に於て「しりせば」「吹きせば」「なりせば」「降りにせば」「ありせば」の例をあげ、「この『せ』を形式動詞の『せ』なりと思へる人もあれど、確定をあらはす複語尾『ぬ』の連用形をうけたるを以て見れば、疑なく、この複語尾（き）の未然形なることを證せり。いかにとなれば、かの複語尾『ぬ』の連用言は決して用言に連る力なきものなればなり。」と論じてをられる。尤もと思はれる點もあるが、「ぬ」の連用形「に」に「せ」のつゞく場合は極めて稀で、間に助詞を介在せしめ得る例の方が多いのではあるまいか。さうすれば、まづ多い方が解けなければこの問題はとけたとはいへまい。疑を存する所以である。

7、「り」に關する注意

完了の「り」は四段活用の已然形と、佐行變格活用の未然形とのみに連續するのであるから、それ以外の動詞につければ當然誤りである。

雨漸く晴れり。

仕事を始めり。

これは四段の已然、佐變の未然と同じ「エ」列から「リ」に連つてはゐるが、「晴る」「始む」は下二段活用であるから誤謬である。從つて形容動詞「異なり」(良行變格と同じ活用をする)に完了の助動詞「リ」を連ねて「異なれり」と言ふのは嚴格に言へば誤りである。併しこの慣用は多く行はれてゐるので文法上許容に關する事項の四で次の如く定められてゐる。

「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

なほ序であるから「ことなりて」「ことなりたり」といふ使方の許されてゐる理由を說明して置く。

前にもいへるが如く「たり」「り」は動詞「あり」の或る種の變形であつて、萬葉集では「たり」「り」に多く「有」「在」の字を用ひてゐる。故にその「あり」の別種の變形である「異なり」に「たり」を連ねることは、同じものを二つ重ねるので不當である。しかしこれも德川時代頃からの慣用で右の許容案では許されてゐるのである。「異りたり」と慣用されるのは「異なり」を「あり」系の良變としないで、良行四段活用と誤つての結果である。同じく「居れり」「死ねり」も良變及び奈變に「り」を加へたので誤りといふ譯であるが、「居り」は室町の末頃より四段に轉じ、「死ぬ」も口語にて四段に用ひる所から文語でも四段に用ひ、文法上許容に關する事項の一にも

「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

と定められてゐる位であるから、許容されてゐる譯である。

この點に就いてはなほ自分の研究不十分の個所もあり後考を必要とする樣に思ふから、參考資料として「現行普通文法改定案調査報告書」(明治三十九年三月國語調査委員會編纂)の中からこれに關係ある部分を拔萃して置くことゝする。

「異なり」を四段活用の如く活用すること

從來の普通文に於て、「異なり」を四段活動詞の如く用ゐるもの多し。然れども文法統一上、中古文法に從ひ、體言のこと(殊)に助動詞の「なり」(也)の附きたるものとして活用せしむるを以て正格と定むべし。

例　中古文　現行普通文

此は、前者と異にして　此は、前者と異なりて

百事、昔時と異なり。　百事、昔時と異なりたり。

我意見は、大に諸君と異なり。　我意見は、大に諸君と異なれり。

性質の異なる人　性質の異なりたる人。

習慣の互ひに異なるが爲めに、　習慣の互ひに異なれるが爲めに、

理由

この詞は、「異なり」と終止するが故に、全く「殊」と云ふ體言に「なり」(也)の指定助動詞の附きたるものなれば、之を再び良行變格として「異なれり」「異なれる」又は「たり」を加へて「異なりたり」「異なりたる」とやうに用

ゐるまじきこと言ふまでもなけれど、若其終止形に考へ及ぼさゞるときは、ともすれば、良行四段活の如く思ひ誤りて、やがて「異なれり」「異なりたり」などすること多し。こは普通の人のみならず、かの義門師も四段活と考へしものと見えて

これらみな、かの八衢なる圖の中に入るべき詞とは聞えながら、つねに異なりてかの圖の中には入がたきさまなり。（指出磯）

字を改められし時、サイフのかたにも佐布のかたにも異なりて（同）

など用ゐたることあり。されば、彼の「きたる」（來る）と云ふ語の如きは「來てある」の約まりたるものなれば、必ず良行變格なるべき道理なれども、上古より既に四段活用となりて、「きたらん」「きたり」と云ひ、又「きたれり」「きたりたり」とやうに良行變格に活用する例もあれば、前項の「居り」と共に四段活となし、「異なれり」「異なれる」などとするを正格とするも可なるが如し。されども「居り」の如きは、既に「り」の終止形「る」と變じたれど、此「異なる」に至りては、未だ「異なる」と「る」に終止することあたはず。然るときは、四段活にもあらず、良行變格にもあらざる一種畸形のものなれば、之れが爲めに、新に一の活用式を立てざる可からず。此の如く、用途繁からざる一語の爲めに、殊更に一の活用式を設くるは、文法統一上成るべく避く可き所なり。故に終止形の「異なる」となるまでは、姑らく古格に從ふの外なかる可し。是れ此項の如き規定を要する所以なり。

八、推量の助動詞

從來法の助動詞と稱せられたもの〻一である。動作を推量するに用ひる助動詞である。之に屬する助動詞は次の八語である。

らむ　めり　らし　まし　む　けむ　べし　べかり

今その活用と連續とを一括して擧げてみよう。

種類＼活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○	特殊活用
めり	○	めり	めり	める	めれ	○	良行變格型活用
らし	○	○	らし	らし	らし	○	特殊活用
まし	（ませ）	○	まし	まし	ましか	○	特殊活用
む	○	○	む	む	め	○	特殊活用
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○	特殊活用
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○	形容詞型活用
べかり	べから	べかり	べかり	べかる	べかれ	○	形容動詞型活用

らむ
めり
らし　諸動詞の終止形に連續（但し良變は連體形に連續）

まし
む　}諸動詞の未然形に連續

けむ　}諸動詞の連用形に連續

べし
べかり　}諸動詞の終止形に連續（但し良變は連體形に連續）

以下順次之を説明してみよう。

I、らむ

推量としては最も不確な推量であつて、口語の「だらう」に當る。（元來口語では「らう」でなければならないのであるが、動詞に直ちに「らう」を連ねて、「讀むらう」「行くらう」等言ふのは四國地方の方言以外には用ひないやうである。）而して現在の動作有樣を推量するのである。

鳥は塒に歸るらむ。

奥山はみ雪降るらむ。

この「らむ」には主觀的の事實を推量して、その客觀的事實としての存在を問題としないで、主觀的に心の中で推量する場合がある。

憶良等は今はまからむ、子泣くらむ、其のかの母もあを待つらむぞ。（萬葉集）

今もかも咲きにほふらむたちばなの小島のさきの山吹の花（古今集）

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを（同）

更に又この「らむ」は眼前の事實に基いて、見えないで隱れてゐる事情を推量する場合にも用ひられる。次はその例である。

霧たちてかりぞ鳴くなる片岡のあしたの原はもみぢしぬらむ（古今集）

雁の鳴いてゐるといふ眼前の事實をもとにして、片岡のあしたの原は見えないのであるが紅葉したらうと推量したのである。之が更にすゝむと事實をもとにしてその事實の起る原因を推量する樣になるのであるが、そこまで達せない以前に次の如き例を顧る必要がある。

秋の夜のあくるも知らずなく虫はわがごと物や悲しかるらむ（古今集）

久方の月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ（同）

これは虫の音を耳にし、月の照るのを實際眺めて、その背後の事實を推量してゐるのである。これがすこし進むと次の樣になる。

人の見る事やくるしき女郎花秋霧にのみ立ち隱るらむ（古今集）

昔べや今も戀しき杜鵑故郷にしも鳴きて來つらむ（古今集）

これは「人に見られることがいやなのか、そのために秋霧の中に隱れるのだらう。」「昔のことが今でも戀しいのか、それで故郷にばかり來てなくのだらう。」といふ樣に、霧の中にかくれてゐるわけ、故郷にのみ鳴いて來るわけを推量してゐるのである。その理由を想像してかうだらうと推量するのである。更に次の樣な例もある。

こゝろざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ（古今集）

わが戀し君があたりをはなれねば降る白雪も空に消ゆらむ（後撰集）

消え果てない雪を花と見たり、降る白雪が空で消えてしまふのを見たりして、その原因はどこにあるかといふことを推量して「それは心を深くつけて居つたから」「自分の戀が君のほとりを離れないから」だらうといふのである。所がこの原因が何處にあるか分らない時には「何故に」とか「どうして」とかいふ樣な副詞が上に來るのである。

きのふ今日稀しげもなき大空のなどかく獨りながめらるらむ

宿りせし花橘もかれなくになどほゝぎす聲絶えぬらむ

雪とのみふるだにあるを櫻花いかに散れとか風の吹くらむ

右は皆この原因推究を「など」「いかに」と相應じて「らむ」が果してゐるのである。眺められたり、聲がたえたり、風が吹いたりするのは何れも事實で、これを推量する必要はすこしも無いのであるが、その原因がわからないので何故にと推測してゐるのである。ところがこの「など」「いかに」といふ樣な副詞が往々にして省略せられることがある。次はその例である。

春の色いたり到らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ（古今集）

わが宿に咲けるふぢなみ立返り過ぎがてにのみ人の見るらむ（同）

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ（同）

本居宣長は「詞の玉の緒」で「かなにかよふらむ」と言つてゐるのはこれである。

2、めり

推量ではあるが不確實の程度は極めて輕く、現在の動作狀態を心の中では確にさうだと斷定してをりながら、言ひ表はし方を婉曲にしたものである。

うたてげなる翁二人おうなと行きあひて同じ處にゐぬめり（大鏡）

これは斷定をさけてかく朧氣にかすめて言つたのである。三矢博士は「此の助動詞はなりを少し和げ（想像して）たるものにて、べしのべの良變に活きたるに近し。或はむありの約かとも思はる。舊說見えありなりとあるは非なり。口語には或はだと斷定するを得べく、おもむき、樣子、氣などとも當つべし、べしよりは稍輕し。彼の古今時代に多く用ゐられたるべらなりといふ語はべしと全く同じ意味にて、めりのめはべと互に通ふ音なり。」（「高等日本文法」二七二頁―二七三頁）と言つてをられる。

偏に泰時が力とぞ申し傳ふめる（神皇正統記）

人毎にいふめれどそれもさるものにて……（徒然草）

みな斷定していふべきをやはらかに言つたのである。尤も、「と見える」「やうだ」に當る用法もあるのである。

立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ（古今集）

この御道もかしこからさめり（枕草紙）

これはその用例である。山田孝雄氏は「日本文法論」(四五〇頁)では「事實の推量を傍觀的に叙述する點は『らし』に似たり。即事物の狀態がとにかくに、自己の胸中に映ずるなり。その映ずる狀態をば、かゝる事實ならむと推定するなり。『べし』は動かすべからずと確認したるさま見え『めり』は推定の根基如何はさておきてとはず、唯、自家胸中に事實を傍觀的に推定してあらはせるなり。……俗語にあてゝは『趣デヤ』『樣子デヤ』などいふべきを以ても推定する意を見るべし。」と言つてをられる。

この語は奈良朝時代には用例全くなく、平安朝時代に盛に用ひられ、それ以後も擬古文には多く用ひたものである。

3、らし

根據ある推量で、推量の程度は可なり確實である。「らむ」を主觀的とするならば、之は客觀的の推量である。(「らむ」と「らし」との關係は「む」と「まし」に似てゐる)人によつては之を傍觀的だと言ふ人もある。第一の事實をもとにして第二の他の事實を推量するのである。

みよしのゝ山の白雪つもるらし古里さむくなりまさるなり(古今集)

み山には霰ふるらし外山なるまさきの蔓色づきにけり(神樂)

龍田川紅葉葉ながる神なびの三むろの山に時雨ふるらし(古今集)

この語は前表にもあげた通り、語形の變化はないが、その用法は三種に區別して考へられる。即ち終止形・連體形・已然形の用法があるのである。終止形の用法は前例の三つの歌みなさうである。連體形の例は次の如くである。

此の川に紅葉葉流るおく山の雪解の水ぞ今まさるらし(古今集)

「ぞ」の係助詞があるので下の「らし」は勿論連體形である。

松のねに風のしらべをまかせては立田ひめこそ秋はひくらし

この「らし」は「こそ」の結びとなつてゐるから已然形である。

ところが奈良朝期のものには「らしき」といふ活用形があつて、「こそ」に對しての結びとなつてゐるものがある。

うべしこそ見る人毎に語りつぎしぬびけらしき(萬葉集六)

いにしへも然にあれこそうつせみも妻をあらそふらしき(萬葉集一)

この「らし」は更に次の樣に形容詞に似た活用をなして現代の文語文に用ひられてをる。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らし	○	らしく	らし	らしき	(らしけれ)	○

戰爭起るらしく思はる。

戰爭起るらし。

戰爭の起るらしき模樣なり。

これは體言につゞく接尾語の「らし」(體言について志久活用の形容詞をつくるもの)の類推から、助動詞の「らし」

をもこの樣に活用させて使ひ出したものと思はれる。併し推量の助動詞とこの接尾語のついて活用せる形容詞の活用形とは嚴重に區別して置かなければならない。

なほこの推量の「らし」が語尾に「る」を持つてゐる語に連續した時、その「る」の省畧される事がある。「けるらし」が「けらし」になり、「なるらし」が「ならし」になる如きはこれである。

、まし

事實とは反對のことを假定し想像する推量である。

世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし（古今集）

鶯の谷より出づる聲なくば春くることをたれか知らまし（古今集）

櫻の花が絶えて咲かない事は無いのであるが、假りにさういふ事があつたとしたら、春は實にのどかでよからうと推量するのである。春の來ることは誰でも知つてゐるが、若し鶯が谷から出て春を告げないならば、（實は告げるのであるが）春になつたことを誰も知るまいといふのである。

梅の香の降りおける雪に紛ひせば誰かことごと分きて折らまし（古今集）

これもその例である。

見る人もなき山さとのさくら花外の散りなむ後ぞ咲かまし（古今集）

見る人もない山里の櫻花は、實際は外の花と一緒に咲くが若し他の花が、散つたあとで咲くならばよからうにの意である。これを願望の「まし」といふ人もある。願望の意もあるが、根本は事實とは反對の假定なのである。

次に「まし」の未然形に「ませ」といふ形があるといふ說がある。これは恰も「き」の未然形に「せ」があるといふ說とよく似てゐる。その例は

かねてより君來ませさんと知らませばかどにもやどにも玉しかましを

飛鳥川柵わたしせかませば流るゝ水ものどにかあらまし

で、意味は同樣事實に反する假定である。しかしこれは推量の推量といふことになるので、或はこれは「まし」の未然形ではしないで、「まくせば」の約であるといひ、或は「行かまほし」等の「ま」に佐變の「す」の未然の「せ」が連つたものだといひ、又「ま」は「む」の活用の一つでそれに佐變の「す」の未然の「せ」がついたのものとする等諸說がある。尤もこれを未然形とすると、「まし」の已然形である「ましか」に「ば」の附いた「ましかば」と何等の區別が附かないといふことになる。

親の親と思はましかば訪ひてまし我子のこにはあらぬなるべし（拾遺集雜下）

曉のなからましかば白つゆのおきてわびしきわかれせましや（後撰集）

これも祖父とは思つてゐないが、若し思はうものならと假定してゐるので、「ませば」と變りはない。これは一つの問題でなほ研究を要する點と思はれる。「ませば」も「ましかば」も共に再び「まし」を以て結ぶのが通常の樣である。

又「まし」を單なる未來の推定に用ひることもある。次の例はこれである。

あな戀し行きてや見まし。

いづれを梅とわきて折らまし。
ふりぬることもたれにいはまし。

これ等は「べし」ごとりかへても同じ意味を表はすのである。名古屋地方の方言に「行つて見まいか」等いふのがあるが、この「まい」はこの「まし」から出て未來の推定に使はれてゐるものと思はれる。

5、む

「む」は未來を表はす以外に推量をも表はすことあるは前に述べた通りである。

これを見て彼は必ず喜ばむ。
明日は雨止まむ。
悲しまざるものなからむ。

更に「む」がある事實の假定を表はすことについても前述した通りである。（時の助動詞に關する注意の條下參照）

6、けむ

過去の推量である。「む」といふ助動詞が、完了の助動詞の「つ」「ぬ」「たり」「り」の未然形に連つて、「てむ」「なむ」「たらむ」「らむ」等となると同じく、過去の助動詞「き」の未然形「け」に連つて「けむ」となつたのだといふ說がある。さうなると「き」は「け、○、き、し、しか」と活用することになる。且つ前に「き」の未然形に「せ」を認める說があるといふことを述べたが、この「け」と「せ」とは共に「き」の未然形であるかといふ問題になる。山田孝雄氏も例の「奈良朝文法史」（二一二頁―二一四頁）で、やはりこの問題に觸れてをられる。而してこの助動詞には「き」の系統と「し」の系統との二つの流があつたのではなからうか。「しか」は本來「し」なるものに「か」の加はりたるものにあらざるか。そはこの期に「まし」といへるものゝ次期に「ましか」といふ形を分出せると、著者の生地たる越中にては形容詞の已然形なる「けれ」が「こそ」に對しての終止たる時には、必「これこそ　よけれか。」といふ如き形をとれるに徵しても、この「か」は後に加はれるものなることを考ふるをうるなり。」と論じ

「き」の系統　け　き
「し」の系統　せ　し

をあげ、この二つの系統には時代の前後か、若しくは意義の直寫と傍觀との差かゞあつたものが、久しく用ひられてゐるうちに混合したものではあるまいか、と疑をかけてをられる。これも亦研究を要すべき問題であると思ふ。とにかく「けむ」の成立は何にもしろ、過去の推量を表はすのである。

いづれのおほん時にかありけむ（源氏）
あをまつと君がぬれけむあしびきの山のしづくにならましものを（萬葉）
いかなる事こそありけめ。

「大日本國語辭典」には助動として今一つの「けむ」をあげ、形容詞の語根に添ひて未來を推量するにいふ語としてある。

命のまたけむ人(古事記)

とのしくもさぶしけめやも(萬葉)

しかし、これは形容動詞の語尾に「む」の連つた「からむ」が「けむ」となつたので、前者の「けむ」とはちがふのであるから注意を要する。

又ある人はこの「けむ」を以て過去の助動詞「けり」の未然形「けら」に「む」を連ねて出來た「けらむ」の略であらうといふ人がある。これも一說であらう。

7・べし

「べし」は推量の本義の外に種々の意味を表はす助動詞である。以下列擧してみよう。

(1)推量(だらう)

明日は雨降るべし。

不景氣は明年も續くべし。

(2)可能(できる)

腰間の秋水、鐵をも斷つべし。

山高くとも登らば登るべし。

(3)義務(ずだ、ねばならぬ)

吾等には爲すべき多くの仕事あり。

國民は納稅の義務を負ふべし。

(4)當然、適當

金は山に捨つべく玉は淵に投ぐべし。

このいましめ萬事にわたるべし。

(5)許容(てもいゝ)

天下の美談といふべし。

(6)決意(しよう)

吾必ず本年は試驗に合格すべし。

いかにもして討ちとり申すべし。

(7)命令(せよ)

明日早朝出頭すべし。

奉公の誠をつくすべし。

古くはこの「べし」は現在の狀態を輕く推量するのにも使はれた。又「べし」は前にも述べた樣に良變の動詞を除いては終止形に連るのが本則であるが、ある特殊のものに限り連用形に連つたものがある。

朝なけに見べき人とし賴まねば

我に似べきはたれならなくに

次に「べし」は形容詞と非常に似た性質を持つてゐることに注意しなければならぬ。（この項、吉岡郷甫著「文語口語對照語法」二三六頁―二三八頁參照）

(1) 活用形

これは全く形容詞と同じである。

(2) べみ

形容詞の語幹に接尾語「み」がついて

「瀬をはやみ」「風をいたみ」「夢をはかなみ」

の如く上の語句に副詞の樣なつとめを與へることは、形容詞の條下で述べた通りであるが、これと同じく、「べし」の「べ」に「み」がついて「べみ」となり、上の語句を副詞の樣にする。意味は「べくあるによりて」「べくある故に」「べきによりて」となる。今日は用ひない。

秋萩を散りぬべみ手折り持ち見れども淋し君にしあらねば（萬葉十）

佐保山のはゝその紅葉散りぬべみよるさへ見よと照らす月影

(3) べらなり

形容詞が所謂「なり」のつく形容動詞となるやうに、「べし」も、語幹の「べ」に「ら」「に」がつきて「あり」と熟合して「べらなり」となる。意味は「べき樣なり」「さうなる樣子なり」で、古今集の撰定當時に多く行はれた語である。現代では用ひない。

なきとむる花しなければ鶯もはては物うくなりぬべらなり（古今集）

見渡せば松のうれ毎に住む鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる（土佐日記）

(4)「べし」の副詞形とその音便

「べし」の副詞形「べく」は形容詞と同樣、次に來る用言の意味を修飾限定する。

君とまるべく匂はなむ

車より落ちぬべうまどひたまへば云々

第二例の「べう」は「べく」の音便でこれも形容詞と同樣である。

(5) 連體形「べき」の音便

形容詞の連體形が音便で「い」となる樣に「べき」が「べい」となる。關東方言の「べい」言葉はこれより出たものであらう。

いとほしうもあるべい哉（源氏）

屋敷に叶はぬ、出てうせべい（心中宵庚申）

(6) べかり

「べし」の連用形「べく」が「動詞「あり」と熟合して「べかり」となるのも形容動詞の「かり」のつくものと全く出來方が同じである。又「べからむ」が「べけむ」となるのも形容詞の「悲しからむ」が「悲しけむ」となり、「善からむ」

が「善けむ」となるのと同樣である。

8 べかり

前述(6)の「べかり」である。活用すること次の如くである。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
べから	べかり	べかり	べかる	べかれ

この活用形の內未然形の「べから」連用形の「べかり」の外はあまり用ひられない樣である。

死出の山路も行くべかりけり。

三軍もその帥を奪ふべからず。

以上文語の推量の助動詞の概說を終ることにする。

九、希望の助動詞

希望をあらはす助動詞は文語に「たし」といふ語がある。これは形容詞の如くに活用する。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ

動詞の連用形に連る。

歸り(未然形)たくば歸るべし。

乞食頭陀の行をもしてひとへに佛道修行し(連用形)たく(終止形)候(平家物語)

勉强したし(連體形)。

ありたきことは誠しき文の道(徒然草)

行きたけ(已然形)れども寸暇なし。

人によつてはこれを助動詞に入れないで形容詞とする人があるがとらない。併し形容詞とよく似てゐるのは、その活用ばかりでなく、動詞「あり」と熟合して「たかり」となる事などもそれである。又人によつては之を接尾語と說く人もある。これは恐らく、他の語についてその事の甚だしき意を表はしたり、その語意を强めたりする一種の「たし」といふ語があるが、これからの類推ではあるまいか。

うれたくも鳴くなる鳥か。(古事記)

三笠山ぬべゆ行く道こきたくも荒れにけるかもひさにあらなくに（萬葉）

この「たし」は、一種の接尾語であつて、それ自身に活用を有し、これのつける語と共に形容詞を形成するものである。「おもたし」「平たし」「ねむたし」「めでたし」「こたちし」「うれたし」「つめたし」「しれつたし」等はかくして出來た形容詞である。

希望の「たし」は平安朝時代にその用例少く、鎌倉時代頃よりの言語だらうと言はれてゐる。

文語の希望の助動詞には「たし」の外に「まほし」といふのがある。活用は、

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ

動詞の未然形に連續する。

この「まほし」は未來の助動詞「む」の變化に形容詞の「ほし」が連續して出來た語である。人によつては「まくほし」の略であらうと說く人がある。併し、この「まく」は「む」の變化の「ま」に例の「く」といふ語が連續して出來（古くは加行延言といつたもの）たものであつて、「まほし」の原形ではないと思ふ。古くは「見まくのほしき君」の如く「まく」と「ほし」とを離しても使つてゐる。

「まほし」と「あり」とが熟合して「まほしかり」といふ形容動詞型の語をも作つてゐる。

希望の助動詞としてこの外に「なむ」といふ語を加へる人がある。しかしこれは助詞と見るべきものと思ふので助動詞には入れない。（後章助詞の條下の係助詞の項を參照せよ）

一〇、比況の助動詞

或は比說の助動詞とも稱せられるもので、事物動作有樣を比較してその類似を說明する助動詞である。文語では「如し」といふ語がこれに屬する。活用は次表の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形
如し	如く	如く	如し	如き

連續法は助詞「の」若くは「が」の下につゞけるのが本體である。

狀態舊の如くば改革覺束なし。（未然形）

雪綿の如く白し。（連用形）

あれどもなきが如し。（終止形）

彼は海鼠の如き人間なり。（連體形）

併し助詞を略して上の語に直接連續することもある。體言若くは活用言の連體形へ續くのである。

汝等如き人非人。

光陰は流るゝ如し。

「如し」の已然形は普通に使はないのであるから、確定を表はす場合には「如ければ」「如けれども」と言はずに、「なり」といふ助動詞を補つて「如くなれば」「如くなれども」と言ふ。

「如し」は又動作狀態の推量にも用ひられることがある。

形勢既に逆轉せるものゝ如し。

一一、指定の助動詞

指定の助動詞といふのは事物を指定する助動詞である。即ち二つの概念を一つにむすびつける助動詞である。甲の概念と乙の概念との一致を示す助動詞である。この助動詞を定義して「事物の解說及び斷定に用ゐる助動詞」といはれるのも、その根本はこゝにあるのである。これに屬する助動詞は文語では「なり」「たり」の二語である。

今日は天長節なり。

君、君たり、臣、臣たり。

その活用は次の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なる	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たる	たれ

その連續は

なり　動詞形容詞助動詞の連體形及び名詞に續く。

たり　體言の下にのみついて活用言には續かない。

余はいつも六時に起くるなり。（動連體形）

短きやうなれど實は長きなり。（形連體形）

注意すべきなり。（助動連體形）

將來余は學者たらん。（體言）

而してこの「なり」と「たり」とは、その意味に於て殆ど變りはないのであるが、「たり」は「なり」に比してやゝ意味を强く表はす樣に思はれるのである。この點は完了の助動詞の「つ」と「ぬ」の區別、助詞の「と」と「に」の區別のあるもの、と共通の點がある樣に思はれる。或る文法家は「たり」は「なり」よりも存在的・動作的で口語の「として居る」「となつてゐる」などに當ると言つてゐる。

語原の方から說明しようとする人は「なり」は「に、あり」の約、「たり」は「と、あり」の約であると言つてゐる。

助動詞の本質のところでも述べた通り、動詞に連つて意味を助け添へるのが助動詞であるが、その點から言へばこの指定の助動詞の如く體言に連續するのを本體としてゐる詞をこれに入れるのは、嚴格にいつて面白くないのである。けれども、「如し」（比況の助動詞）を助動詞とするのと同じく、暫らくこれを助動詞に入れて置くのである。「なり」が動詞・形容詞・助動詞の連體言に連續するといふのも、これ等の語を一つの體言と扱つてこれに連續してゐると

考へるのが、指定の助動詞の本義から考へて妥當の樣に思ふ。

「なり」には右に述べた連續のほか終止形に連る一つの用法がある。山田孝雄氏の「奈良朝文法史」によれば、

いたくさやぎてありなり。（古事記中卷）　さやげりなり。（日本書紀卷三）

いちひにゑひてみなふしてありなり。（正倉院古文書）

等の如く動詞の良變及びその型の活用をする語に「なり」の連續した例を見出す事が出來るが、王朝時代以後にはかういふ例は絶えてゐる。しかし、その他終止形から連續する例は多く存在してゐるのである。

秋の野に人まつ虫の聲すなり。（古今秋上）

みな人は花の衣になりぬなり。（古今哀傷）

千代にかはらぬこゑきこゆなり。（後撰秋下）

秋風に初雁が音ぞきこゆなる。（古今秋上）

世のうき時はみえぬ山ぢをこそ尋ぬなれ。（源氏蓬生）

用法に屬する「なり」は咏嘆の意味を表はしてゐるのであつて、單なる指定の意味にのみ用ひられてゐるのでない事に注意を要する。（この「なり」は良變の動詞に限り連體形から連る。）

次のこの「なり」の連體形に就いては考究を要する問題が二つある。その一つは次の例に表はれたる「なり」の連體形に就いてである。

信濃なる淺間の嶽、

駿河なる宇津の山邊、

武藏なる隅田川

こゝに表はれてゐる「なる」は普通にいふ指定の意味――所謂一致を表はすものとは異なつて、「にある」といふ存在の意味を表はすのである。前述の語原的說明はこゝに適用せられるのであつて、その原意に於て使用せられてゐるのである。この場合に於ては、體言に直ちに連續する前例以外に、「ぞ」「こそ」「は」「も」の如き助詞が「に」と「あり」との間に介在することもある。

そは梅にもあらず櫻にもあらず。

時は春にこそあれ。

加之、この「なり」が中止形として用ひられる時には、連用形の「なり」が使はれないで、その原形の一部である「に」が使はれるのが中古語の常である。

實朝は賴朝の子に鎌倉右大臣といふ歌人なり。

この「に」は「子なる歌人」と「右大臣といふ歌人」とが重つたがために現はれて來たものであつて、「なり」の中止形と見るのがよいと思ふ。格助詞の「に」、從つて「子に」を副格に立つた名詞等と誤解してはならないのである。現代文では、この「に」の代りに「にて」若しくは「にして」といふ語を用ひてをる。三矢重松氏の「高等日本文法」ではこの所が次の樣に說明してある。

「なり」の第二變化の中止は「に」なり。又「にて」「にして」といふ。

正成は忠臣に（にして）にて、正行は孝子なり。

これ「孝子なり」の「なり」に「あり」といふ動詞あるを以つて「に」の下に「あり」を略したるなり。「にして」の「し」は動詞なれど、いつしか其意味忘れらるゝに至れり。「にて」は「て」の上に動詞「あり」を略せる者、共にテニヲハの如く用ゐらる。

福澤は正成を凡俗の人にしてしまへり。

こは形の上よりいへば同一なれど、前例の「にして」の「し」は「あり」の強めにて自動、この例の「し」は他動なり。

此の如くにして我はつひに死せむか。

燈火明にして書を讀む。

この「し」は他動にも自動にも解せらる。かくの如く「し」の自他は區別するに困難なれど、多く「なり」の中止と見てよろし。（二三〇頁——二三一頁）

これと同樣のことは形容動詞の中止形にも現はれる。

月明かに星稀なり。

この「に」は「明かなり」の中止形であつて原形を現はしたのである。

「なり」の連體形に就いて注意すべき第二の問題は、前項の「にある」の意ではなくて「といふ」といふべき場合に用ひられる「なる」である。

顏回なるものあり。

鎭西八郎なる人。

三位なる中將。

辨慶なる者。

明治館なる學校。

これはすべてその例である。中古文にてはかくの如く「といふ」「といへる」の代りに「なる」を用ひた例は絕えてないのであるが、現行の普通文では一種の格として立てることが認められ、例の文法許容に關する事項の十六には次の如く定めてある。

「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　イハユル哺乳獸ナルモノ

顏回ナルモノアリ

これに就いて「現行普通文法改定案調査報告書」に基いてすこし述べて置かうと思ふ。

本居宣長の「玉鉾」の中には次の如く出てゐる。

今世の人の文に、たとへば京の人、大阪の人の事を「京なる某」「難波なる某」とかくは、大かたよろしからず、「なる」は「にある」といふことなれば、「なる」といひては、他國の人の今時京に居、難波にゐるやうに聞ゆればなり。さればこは「京の某」「難波の某」とかくぞよろしきを、かやうの所を、「の」といふは、をさなきやうに心

得ためるは、中々にひがこゝろえなり。但し其趣によりては、本より其所の人をも、「なる」といふまじきにもあらず、今はたゞ大かたをいふになん。

又、中島廣足の「玉霰窓廼小篠」には、

（勢語）　あるしのはらからなる、あるしまうけし給ふときゝて、
（同）　殿上にさふらひける在原なりける男の
（同）　友たちなる人
（土佐日記）　ふなきみなる人
（源氏帚木）　姉なる人
（同　東屋）　母なるもの
（同　橋姫）　右近のそうなる人
（同　浮舟）　大内記なる人
（更　科）　めのとなる人
（同）　はらからなる人
（同）　あまなる人
（宇治拾遺）　大隅守なる人
（とりかへばや）母なる人

これらの例によりてかくべし。

とあつて、右の諸例以外の「玉霰」の「の」の意味である「なる」の使用を禁じてゐるのである。

大槻文彦氏の「廣日本文典」（一二二頁）には如の如く論じてある。

此ノ「なり」ノ語原ハ「に、あり」ノ約ナルベク、意義ハ「にて、あり」ナリ。サレバ「武藏なる隅田川」「大父なる人」ナド用キルハ、論ナケレド、「顏回なる者あり」「鈴木なる者來りて」「明倫館なる學校を建てゝ」ナド用キルハ、非ナリ、斯クテハ「顏回にある者」「鈴木にてある者」「明倫館にてある學校」ナドナリテ、語ヲ成サズ、是等ハ「顏回といふ者」「鈴木といふ者」「明倫館といふ學校」トヤウニアルベシ、古訓點ニハ「顏回者」ナドトアルナリ。（「顏回者」ナドトアルハ、一齋點ナドノ言訓ナリ。）

「現行普通文法改定案調査報告書」ではそのあとを受けて次の如く論じてゐるのである。

實ニ此「なる」ヲ「といふもの」「といへるもの」ナドノ場合ニ用キルコトハ、德川氏ノ中葉以後ニアラザレバ其例ヲキ所ニシテ、唯伴蒿蹊等ノ文、後藤點一齋點ノ論語ノ訓點ナドニ、

重厚なる人東奥行脚の話に（閑田耕筆一）
京に中村某なるもの奢移に過ぎて（同四）
鹿兒島にありし時森下見流なる人の家に招かれ種々馳走の上實生といへる法師をよびて琵琶をひかせり（孀南谿西遊記一）
孔子對曰有顏回者好學（後藤點及ビ一齋點論語）

雙人有二威倉者一沮君（同上孟子）

求法ノ沙門昌住ナル者ノ撰ナリ、云々東都ノ村田春海ナル者云々楫取魚彦ナルモノ云々（桂川中良桂林漫錄）

ナド見エタリ。抑モ伴氏等ノ之ヲ用ヰタルハ、伊勢物語ノ「在原なりける男」土佐日記ノ「ふなぎみなる人」源氏ノ「大内記なる人」等ヲ思ヒ違ヘテ用ヰタルモノナルベク、後藤點ノ之ヲ用ヰタルハ、カノ「弟悌也者」、「仁也者」「中也者」等ノ也字ヲ決斷ノ意ナル「なり」ト見ルトキハ、恰モ「在原なりける男」「大内記なる人」ナドノ「なる」ト同義ナルヨリ之ヲ襲用セルモノカ、或ハコレラノ「也者」ハ古來「といふ者」「といふは」ト訓ジ來レルガ、冗長ヨリ、佛經ノ訓點ニモ往々

夫甚深ナル也者ハ摩嚧峻高ナル也者蘇迷廣大ナル也者虚空云々（祕藏寶鑰）

ナドアレバコレラニ據リタルモノニテモアランカ。兎ニ角、此用格ノ普通文ノ一格トナレル主因ハ、後藤點ニ先ヅ之ヲ用ヰ、一齊點之ヲ襲用セシニ、此二點本、最モ弘ク世ニ行ハレシニ由ルナラン。惟フニ、カノ「在原なりける男」「大内記なる人」ハ元來姓ハ在原ナル、其職ハ大内記ナルノ意ナレバ今其例ヲ擴メテ、其姓ハ森本、其名ハ見流ナルノ意トナサバ、「森本見流なる人」ト云フモ語法ニ背カズシテ、且ツ其義ノ通ゼザル患無キガ如シ。故ニ若シ、中古ニ於テ、誰人カ好ンデカク用ヰタルモノアラバ、今日誰モ怪マズシテ用ヰルコトナラン。サレバ、現今ノ如ク、既ニ「といふもの」ト云フトキハ冗長ニ聞ユルニ、「なる者」ト用ヰテモ耳立タヌ事トナレル以上ハ、修辭上ノ取捨ニ委セ、之ヲ用ヰントスルモノハ、用ヰテ何ノ害カアラン。（五五頁——五八頁）

これと同系の語に

兄なる人　**叔母なる人**

といふのがある。口語では「兄ぢや人」「叔母ぢや人」等といふいひ方もあつて、この「ぢや」は「だ」「である」といふ指定の助動詞であるから、本來の指定の意味と考へても差支はあるまいと思はれる。

なほこの外に

貧賤なり　**潔白なり**　**堂々たり**　**寥々たり**

の如き用法に立つ「なり」及び「たり」があるが、これ等は、上の語を名詞とみなし、下の「なり」「たり」を指定の助動詞と見られない事もないのであるが、これは既に形容動詞の條下でも說明した樣に、連語とはみないで、一つで形容動詞とみるがよいと思ふ。（文法家によつては良行變格活用の動詞と見る人のある事は同じく前に述べた通りである。）

良行變格活用の動詞及び形容動詞「る」の語尾ある助動詞からこの指定の助動詞の「なり」に續く時には、上の「る」が撥音便となり、又省かれたりする。

あるなり→あんなり→あなり

なるなり→なんなり→ななり

ざるなり→ざんなり→ざなり

世の中に物語といふものゝあんなるをいかで見ばやと思ひつゝ（更科）

やんごとなき事にこそあなれとて（宇津保）

入り來る音すればさななりと人々出でて見るに、（枕草子）

さらばそのゆゑどんななりな（源氏若菜）

山本ちかかなり（竹取）

くま狼ならぬはすきざなり（宇津保）

宮へわたらせたまふべかなるを（源氏若紫）

あさましき事どもをきこしめしたなれば（和泉式部日記）

一二、否定の助動詞

肯定の助動詞と共に式の助動詞の中に入れて說かれたこともあるもので、動作を否定し、打消すことを表はす助動詞である。肯定を表はすには動詞そのまゝで助動詞を必要としないことは、相に於ける常相、法に於ける直接法、時に於ける現在と同樣である。しかし、否定を表はすには文語に於ては次の助動詞を連續して使用する必要があるのである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○
ざり	さら	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ
じ	○	○	じ	じ	じ	○
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○

連續は次の通りである。

ず
ざり
じ　動詞・形容動詞ある他の助動詞の未然形に連る。

まじ　動詞の終止形に連る。但し良變は連體形に連る。

使はれ方の例は以下の樣である。

笛も吹かず、太鼓も敲かず。（終止形）

雉も鳴かずば打たるまじ。（未然形）

行くへも知らぬ戀の道かな。（連體形）

余は求めねば失はず。（已然形）

雨は止まず降れり。（連用形）

夢にも妹が見えざらなくに。（未然形）

その事に就いては毫も知らざりき。（連用形）

學ばざる者は知らず。（連體形）

一日見ざれば千秋の思あり。（已然形）

たつ鳥よあとを濁さざれ。（命令形）

妹は忘れじ、よのことごとに。（終止形）

まけじ魂。（連體形）

また來むと誰にもえこそ言ひおかじ。（已然形）

この人えまぬかれたまふまじくば。（未然形）

げにたふまじくないたまふ。（連用形）

めづらかなる事とも心もおどろくまじ。（終止形）

出で給ふまじき日にやありけむ。（連體形）

さてのみはえこそあるまじけれ。（已然形）

以下否定の助動詞に就いて注意すべき事項を列擧してみよう。

（一）「ずば」の音便

「ず」の未然形が助詞の「ば」に續いて未成立の條件を假定する時、「ずんば」と撥音便になる事がある。

行かずんばあるべからず。

知らずんば恥辱ならむ。

（二）「で」の成立

「ず」の連用形が助詞の「て」に連つて出來た「ずて」は更に約されて「で」となる。

人に知られで來る由もがな。

手折らで更に歸らざらまし。

動詞助動詞の未然形に連るは「ず」系なれば當然のことである。

（三）「ずけり」「ずけむ」

「ず」の連用形に「けり」「む」の助動詞を連ねた「ずけり」「ずけむ」の用法は古い。

なほしかずけり。（萬葉集）

もとめあはずけむ。（同）

知らずぞ人は待てど來ずけり。（同）

花の咲きて來ずけむ。（同）

（四）「ず」の一形「に」

奈良朝時代には「ず・ず・ず・ぬ・ね」の外に「に」といふ一つの形があつて連用形として用ひられてゐる。

旅にしあれば思ひやるたづきも知らに。（萬葉集）

うかゞはく知らにとみまきいりびこはや。（古事記）

いへばえにいはねばくるし。

行くへも知らに舍人はまどふ。

この用法に關する說に就いては「奈良朝文法史」（一八九頁）に次の論が見えてゐる。

「に」はこの複語尾（助動詞）の連用形なることは明なり。しかるときには、こゝに一の疑問生ず。そは他にあらず。「ず」も亦連用形の形なるに、こゝに「に」あり。この複語尾には連用形二樣あるが如きさまなり。今これにつきての意見を立てむに、こはまさしく「に、ぬ、ね」と奈行音に活きしものなるべし。或は大古には奈行四段形にあらざりしか、しかれどもこは未、斷言すべくもあらず。若果して奈行四段にて打消をあらはしたりしものとせば、「ず」は如何といふ問題生ぜむ。おもふにこの「ず」は或る期にあたりて偶然の機會より打消に用ゐられ、しかして原形、未然形、連用形を代理するに至りしにあらざるか。

（五）「なく」

これはやはり否定の助動詞の古い一つの用法である。從來これは否定の助動詞「ず」の連體形「ぬ」の延びたもの、所謂延言と稱せられてゐたものである。併しこの延言說には俄かに從ひ難いのであるが、とにかく「く」がついてゐるために否定の助動詞が體言的の意味を持つて來ることは事實である。

淺き心をわがおもはなくに
妹が見えざらなくに
いはなくのみぞ我が戀ふらくは

（六）「ずは」と「ずば」

斯くばかり戀ひつゝあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを（萬葉二）
驗なき物を思はずは一坏の濁れる酒をのむべくあるらし（萬葉三）
なか〳〵に人とあらずは酒壺になりにてしがも酒に染みなむ（同）

萬葉集あたりには多くの例がある。從來はこれを打消の助動詞「ず」に「ば」といふ助詞がついたので、「ずば」であると說いた。從つて意味も「何々でないならば」と解釋すべきであるが、さう解したのでは意味が通じないので、宣長は「詞の玉の緒」で「何々せんよりは」の意だと解釋した。而してそれが今日まで殆ど定說として用ひられて來た。なるほどさうすれば意味は合理的にとけるのであるが、文法の上から不合理である。即ち否定の形が肯定の意味に解されてしまふからである。この點に注意して疑を挾んだ學者があつた。即ち香川景樹の「萬葉集捃解」にあげた熊谷直好の說、黑澤翁滿の「言靈のしるべ」中篇下「ずは」の條、物集高世の「辭格考抄本」下「不の活辭」の條にこれに關して宣長說の反對意見が見えてゐる。即ち「ずば」は「ずは」であつて打消の「ず」に輕く「は」を添へたゞけであつて、意味は「何々せず」といふ否定の本來の意味を失はない樣に說かうとしたのである。山田孝雄氏もこれに就いては疑問を投げかけては居られるが、徹底的の解決はつけてをられない。即ち「この形の『ずば』は後世のものとやゝ異なる意あり。『詞の玉の緒』には之を『んよりは』の意なりといへり。意はこれにて通ずべしといへども、肯定と否定とは表裏の差あるにあらずや。されば、こはなほ否定の假設的條件なるに相違なし。たま〳〵其の意義に吾人の思想と稍差あるものは、古今の思想上の異同に基因するものにあらざるか。かくて又、吾人はかの『玉の緒』にあげたる例歌、二十四首の『ずば』は悉く否定の假設條件として釋するの寧適切なるを公言するな

り。卽、その思想上の徑路は、次の如くならむ。「云々の事を今、現に、云爲す。若、出來うべくば、之と正反對に、卽、之を否定して、次にいふ云々の事を云爲すべきを」といふにあり。かく釋するに於いては『んよりは』といはむよりは文法上、又意義上妥當なる解を得む。但、今日の吾人の思想とは多少運用的相違あるは論に及ばざることとす」（奈良朝文法史一八四頁――一八五頁）氏はどこまでも「ば」に拘泥せられたが故に假設的條件云々の論が出た事だと思ふ。所がこれより更に一歩を進めて、卽ち、前述の宣長反對說に新しく論據を與へたものは橋本進吉氏の「奈良朝語法研究の中から」（雜誌「國語と國文學」第九號所載、――大正十四年一月號）といふ論文である以下それの要點を摘記してみよう。

萬葉集卷二十に次の如き歌がある。

たちしなふ君が姿を和須禮受波世（わすれずは）の限にや戀ひわたりなむ

これは上總國の朝集使大掾大原眞人今城が京に向つて出發する時、郡司の妻女等が餞に詠んだ歌である。これを古義の樣に「わすれずば」とよんで「忘れなかつたならば」と解いたなら、「一生の間戀しく思ひつゞける事でせう」といふ下の語に對して全く不穩當なものとなる。又これを宣長の解釋した樣に「何々せんよりは」とよめば全然意味をなさないことになる。そこでこの原文の「和須禮受波」を檢するに、文字からみて必しも「忘れずば」とよまなければならないのではなく「忘れずは」とも讀み得るのである。否、萬葉集の文字の用法からすると「波」は淸音に用ひるのが常なのである。そこでこれを「忘れずは」とよんで、さてその意味を何と解すべきか。

「は」は何としても助詞以外とは考へられない。「ず」は奈良朝に於ても連用形か、さもなければ終止形であるが、助詞の「は」は如何なる場合にも終止形についた例が無いから、この「ず」は必ず連用形でなければならない。而して、用言又は助動詞の連用形に「は」がついた場合には、たゞ「は」の意味が附加されるだけで、連用形それ自身の意味職能は少しも變化せず、隨つて連用形をとつてゐる用言又は助動詞の他の語に對する關係は、「は」があつても無くても何等の相違を來さないのが常である。たとへば

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日やながめくらさむ（伊勢物語）

に於て「戀しくは」の「は」を省いても「戀しく」の意味及び下の語に對する關係は少しもかはらない。これから推して前述の「たちしなふ」の歌は「あなたの御姿を忘れず（又は忘れずして）一生の間戀しく思ひつゞける事でせう」の義となつて、人を送る歌としては極めて適切なものとなるのである。故に「ずば」は誤訓で「ずは」と解するのが正當である。從つて意味は「何々せんよりは」ではなくて「ず」又は「ずして」と解かなければならないのである。これは奈良朝の文獻にある「ずは」にすべてあてはまる事實なのである。

かくて宣長の解釋は誤であることは分つたが、しかも宣長の說が語學上の說明はとにかく、意義の解釋に於ては甚適切で當を得てゐるやうに見えるのは何故かといふに、これは同じやうな思想をあらはす相似た二つの表現法があるからである。

（甲）汽車で行かないで船で行くがよい。

（乙）汽車で行くより船で行くがよい。

この二つはつまり同じ事を言つたのであるが、違つた表現法を用ひたもので、言語としては同じではなく「行か

ないで」が「行くより」の意味を有するのではない。「たちしなふ」の歌は(甲)の表現法を用ひたものであるが、次の歌などは(乙)の表現法を用ひた歌である。

玉きはる命にむかひ戀ひむゆは君が御船の梶柄にもが(萬葉集八)

宣長はこの(甲)と(乙)とを混同して解いた結果、「ずば」を「んよりは」と譯したのである。(乙)の如き文では、「より」又は「ゆ」のやうな比較を示す助詞を用ひて、一を抑へて他を揚げるといふ方法によつて、比較選擇の意味を表はしてゐるのであるが、(甲)の如き文に於ては「ずして」又は「ずは」の如き打消をあらはす語を用ゐて、一を捨てて他を採るといふ方法によつてあらはしてゐるのである。それ故「ずは」はどこまでも「ず」又は「ずして」の義であつて、「よりは」又は「寧」といふ樣な比較選擇の意味は全然無い。たゞ「寧」といふ語を添へて解釋すれば、歌全體の思想に存する、一方を斥けて他を擇ぶ意趣を十分明にして、一層適切な解釋が得られるといふまでである。以上が橋本進吉氏の說の概略であるが、これを以て宣長以來曲解されてゐた「ずは」の正體が明かになつたのである。

(七)「ざり」

これは「ず」と「あり」との熟合して出來た語である。語尾變化及びその連續は前述の通りであるが、この終止形の「ざり」といふ形はその用例が昔からないと言はれてをる。

(八)「じ」

これは打消否定と共に推量及び決意を表はす。動詞の未然形に連續することは既に述べた。

必ずしも然らじ。

といへば、「必ずしもさういふ譯ではあるまい」と推量の意味が加はり、

余は他言せじ。

といへば、「私は人には決して告げることはしまい」と自己の決心の程を表はす意味があるのである。

(九)「まじ」

これも「じ」と同じく打消と共に推量及び決意を表はす助動詞である。

明日は雨降るまじ。

といへば推量の意がこもり、

聊忘却致すまじく候。

といへば、決心の意を含むのである。更に、

あるまじき行。

言ふまじき事。

及ぶまじき業。

といふ時には、「何々してはならぬこと」「何々すべからざる事」「何々しようとしても能はぬ事」といふ樣に、當然

や可能の否定即ち不當然・不可能の意味をも寓するのである。「まじ」の未然形・連用形「まじく」は音便で「まじう」となり、連體形の「まじき」は音便で「まじい」となる。「まじう」は中古にその用例があるが、「まじい」は鎌倉時代以後に出來たものだと言はれてゐる。

さて里住はえ物すまじうこそ物すめれ（宇津保）

そのものともみゆまじうしたてたる（源氏少女）

名乘ることはあるまじいぞ（平家）

又「まじ」と「あり」とが熟合して「まじかり」となる。

なほえあるまじかりければ（宇津保）

なき跡まで人のむねあくまじかりける人の御覺（源氏桐壺）

（一〇）禁止の助動詞「な」

動作を起さないやうに命令する意味の「な」といふ語がある。動詞の終止形に連續して

春を忘るな。

徒らに死ぬな。

の如く使はれる。又「そ」といふ語と相應じて

春な忘れそ。

徒らにな死にそ。

の如く、「な」と「そ」の間に動詞の連用形（加變と佐變に限り未然形）を挾んで同樣禁止の意味を表はすのである。これを助動詞に入れるか否かに就いては議論のあることであつて、或る文法家はこれを副詞に入れて說いてゐる。「そ」に應じて、或は時には「そ」を省いて下の動詞を制限する用法から見れば、如何にも副詞らしい點があるが、さりとて單に文の終りに來て禁止を現はすものをも副詞とは說き難い樣に思はれる。併しこれを助動詞に入れて考へてみるにしても、他の助動詞とはその性質を異にする點があるので、どうも穩當でない。寧ろ、これは助詞として說くのが最も當を得てゐると思はれるので、後章更めて助詞の條下で說くことにする。

以上で文語の助動詞に就いての概說を終つたので、次に口語の助動詞に就いての大體を說くことにする。

一三、口語の受身の助動詞

文語の受身の助動詞「る」「らる」に對して、口語の受身の助動詞には「れる」と「られる」との二語がある。その連續は

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ（ろ）
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ（ろ）

れる　四段活用の動詞の未然形に連る。

られる　四段活用以外の動詞の未然形に連る。

父に呼ばれる。（四未然）

母に褒められる。（下二未然）

こゝに注意すべきは、佐行變格の動詞に「られる」が連續する場合である。その場合には未然形から連續して「せられる」「しられる」となるべきであるのに、動詞の語尾の「せ」と助動詞の語頭の「ら」とが約まつて「さ」となり「される」と言ふ。これは「さ」といふ動詞の語尾に「れる」といふ助動詞がついたのではないから混同しない樣にする必要がある。文語の佐行變格の未然形「せ」が、口語では恰も「さ」となつて、四段活用の樣に見えるのである。これは全國通有のことであるが、關西地方では往々約まらないもとの形を用ひる習慣がある。次の例のやうに。

追窮せられる。

逮捕せられる。

ところが、この約された用法が文語にもあつて、

追窮されたり。

逮捕されたり。

等言ふ。正しくは、「追窮せられたり」「逮せられたり」といふべきであつて、從來は破格としてゐたのであるが、古くから用例もあり、今日では常格ともなつてゐるので、文法上許容に關する事項六では次の通り許容されてゐる。

「――セラル」トイフベキ場合ニ「――サル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　罪サル

評サル

解釋サル

一四、口語の使役の助動詞

文語に於ける使役の助動詞「す」「さす」が口語では「せる」「させる」となつてゐるが、文語の「しむ」に對する口語の助動詞は無い。「せる」「させる」の活用と連續は次の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ(ろ)
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ(ろ)

せる　四段活用の動詞の未然形に連る。

させる　四段活用以外の動詞の未然形に連る。

友達を喜ばせる。（四未然）

子供に、試驗を受けさせる。（下二未然）

使役の助動詞に於ても、前項と同樣の事が行はれてゐる。即ち、佐行變格の動詞に「させる」が連續する時には、動詞活用形未然形の「せ」と、助動詞「させる」の「さ」とが約まつて、「さ」となる。「介抱せさせる」といふべきを「介抱させる」といふのである。一見すれば恰も介抱といふ體言に「させる」といふ助動詞を連續させた樣な形と思はれるけれども、この「させる」の中には上の動詞の語尾も含まつてゐるのである。併し關西地方では往々約されない「せさせる」の形が使はれる所もある。

文語の使役の助動詞にもこれに似た約まり方が行はれてゐて、「……せさす」といふべきを「……さす」とするのである。從來は破格と言はれてゐたのであるが、中古にも次の樣な用例があるので、今日では文法上許容に關する事項五で許容されてゐる。

人に點つかるべき振舞はさせじ。

物言ひ案内させたる……

「……セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　手習サス

周旋サス

賣買サス

又口語の使役の助動詞の下に、口語の受身の助動詞が連つて、或る事物が他の事物から動作をさせられる事を現はす場合がある。

友達に酒を飲ませられる。

四動詞未然形　使役助動詞せるノ未然形　受身助動詞られるノ終止形

この場合に「飲ませ」の「せ」と「られる」の「ら」とが約せられて、「される」となる事が多い。即ち

友達に酒を飲まされる

となるのである。

又口語の上一段活用の動詞「見る」「着る」「似る」等には使役の助動詞「させる」が連續して、「見させる」「着させる」「似させる」となるのである。これと「せる」を持つた下一段活用の動詞「見せる」「着せる」「似せる」とを混同してはならない。「見せる」「着せる」「似せる」はこれだけで獨立した一つの動詞であつて、これには何も連續してゐないのである。從つて更にこれ等には、使役の助動詞「させる」を連續せしめて「見させる」「着させる」「似させる」とする事が出來るのである。

(一)甲が乙に本を見せた。（見せは見せるといふ下一段活用の他動詞の連用形。見せるといふ動作は甲の動作である。）

(二)甲が乙に本を見させた。（見は見るといふ上一段活用の他動詞の未然形。させは使役の助動詞させるの連用形。見るは乙のする動作である。）

(三)甲が乙をして丙に本を見させた。（見せは見せるといふ下一段活用の他動詞の未然形。させは使役の助動詞させるの連用形。見せるは乙の動作でその動作を甲が乙にさせたのである。）

この三者を混同しない様に使ひ分けなければならない。勿論(二)を以て(三)の場合に代用する事は前述の佐變の場合

介抱せさせる→介抱させる

の類推に依つて、差支はないのであるが、(三)を以て(二)の場合に代用したとすれば誤である。

なほ、口語の使役の助動詞は前に述べた様に、下一段活用の動詞と同じ活用をするのであるが、往々これに四段活用を交へる地方がある。卽ち使役の助動詞の連用形に「て」「た」の連る時、「讀ませた」「讀ませて」、「起きさせた」「起きさせて」と言はないで、「讀ました」「讀まして」、「起きさした」「起きさして」と言ふのである。又、九州の大部分では終止・連體の「せる」を「する」、已然形の「せれ」を「すれ」といふ。

東京	上方	九州
せる（打たせる）	す（打たす）	する（打たする）
させる（介抱させる）	さす（介抱さす）	さする（介抱さする）

一五、口語の可能の助動詞

受身の助動詞「れる」「られる」が轉用されるもので、活用も連續ももと通りである。

この本は私にも讀まれる。

朝五時からでも起きられる。

佐行變格の動詞「られる」を連續せしめる時には、受身の場合と同樣に、動詞の語尾の「せ」(未然形)が「られる」の「ら」と熟合して「される」となる。

一時間位は運動せられる→運動される。

仕合はこの席からも見物せられる。→見物される。

又、口語四段活用の動詞に、可能の助動詞が連る時には、動詞の語尾が持つア列の音(未然形)と「れる」の「れ」とが熟合して、エ列の音になつて下一段活用として活用する。これは可能の助動詞として使はれる時に限るので、受身には無いことである。

書かれる→書ける
漕がれる→漕げる
押される→押せる
打たれる→打てる
死なれる→死ねる
逢はれる→逢へる
飛ばれる→飛べる
讀まれる→讀める
釣られる→釣れる

但し「知られる」が「知れる」になる時だけは可能と受身と兩方に使はれる。

知れると困る。（受身）

探したが知れない。（可能）

文語でもこれと同じ樣なことがあつて、次は受身に使はれてゐる例である。

人知れずこそ思ひそめしか

これと反對に、口語の下一段活用の動詞に、可能の助動詞が連る時には、動詞の語尾のエ列の音（未然形）と、「られる」の「ら」とが熟合してア列になつて四段活用としてはたらくのである。

受けられる→受かる

負けられる→負かる

植ゑられる→植わる

交ぜられる→交ざる

尤もこれは下一段活用の動詞全部といふ譯ではなくて、その中のあるものに限られてゐるのである。これが文語にまで入つて來て、

新聞の讀まれざる人あり（四段）→新聞の讀めざる人あり（下一段）

等と使用する事がある。

なほ、口語で可能の表はし方に「出來る」といふ語を使ふことがあるが、これは動詞であつて助動詞ではない。地方によつてはこれを「でける」「でくる」「でる」等といひ、特に九州では「きる」――「讀みきる」といふ事がある。又、關西地方で多く使はれる「えう讀まん」「えう歩かん」の「えう」は、「え讀まず」「え歩かず」の「え」といふ副詞が、音便で變つたものであらうか。それとも「能く」といふ「よし」（形容詞の副詞形）の活用形が「よう」となつたものであらうか。古く「よ」と「え」とは相通じて用ひられた事が多い。

比吉（ひよし）――比枝（ひえ）

住吉（すみよし）――住江（すみのえ）

關西地方では今日でも「善い」ことを「えゝ」といふ。この邊に解決の鍵でもあるものか。後考を俟つ。

一六、口語の自發の助動詞

これも文語同樣受身の助動詞からの轉用である。

れる　故郷の事が思ひやられる。

られる　子供の事が案じられる。

一七、口語の敬語の助動詞

受身より可能となり、更に敬語の意味に轉じて使はれるので、活用も連續も全く受身と同樣である。

れる　あの人はよく働かれる。

られる　叔父様はいつも早く起きられる。

文語に於けるが如く、使役の助動詞の「せる」「させる」がそのまゝ尊敬を表はすやうに使はれる事は、口語に於ては少い。しかし九州地方では「す」「さす」(文語の使役の助動詞)を口語の尊敬に用ひる事がある。

行かす(お出でになる意)

見さす(御覽になる意)

中部地方では次の樣に言ふが、これも標準的のものではない。

行かつせる。

見さつせる。

行かつしやる。

見さつしやる。

この類で標準的に使はれるものは次の通りである。

仰つしやる。

入らつしやる。

「仰つしやる」は「仰せらる」(「仰す」といふ下二段活用の動詞に「らる」といふ敬語の助動詞がついたもの)が轉じたものか、或は「仰せある」(「仰す」に「あり」といふ動詞のイ形「ある」のついたもの)が轉じたものか。「行幸す」を「行幸あり」といひ、「御見參」に「あり」をつけて「御見參あり」といふのはみな敬つた言ひ方であるから、これに準じて「仰せある」と言つたものが轉じたのか。一つの問題である。次の「入らつしやる」も「入らせらる」(「入る」といふ四段の動詞に、使役の助動詞「す」及び敬語の助動詞「らる」を連ねたもの)の轉か。「入らせある」(「入る」に「す」及び「ある」を連ねたもの)の轉かいづれかであらう。前例の「行かつしやる」「見さつしやる」なども、この「せらる」「せある」の轉じて出來たものであらう。

「入らつしやる」「仰つしやる」は次の如く活用する。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
入らつしや 仰つしや	ら	いり	る	る	れ	い

親愛の意を表はすもので、更に之に似たものは

起きやる　(「起きある」の轉か)

見やる　(「見ある」の轉か)

行きやつた(「行きある」の轉か)

等がある。關西地方の言ひ方でこれに似たものは

起きはつた。

行かはる。

見やはる。
しやはる。

である。この「はる」「やはる」は何から轉じて來たもか今日ではまだ分つてゐない樣である。

以上の外、本來敬語の助動詞ではなくて、動詞を助動詞的に用ひて尊敬を表はす語は多い。以下その主なものに就いて說明して見よう。

(一)なさる

この語は文語四段活用の動詞「なす」に文語尊敬の助動詞「る」がついて出來たものが、更に口語に於て四段に活用してゐるのである。活用は

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
なさ	ら	ついり	る	る	れ	れい

連續は動詞の連用形である。上に「お」又は「ご」を附けて、相應じて尊敬を表はすのが常である。

御出でなさる。
早く御出でなさい。　早く御出でなされ。
お有りなさる。

命令形には「なさい」を省いて

お上り、御出で、御坐り、

と言つて一種の親愛の意を表はす。但し「見い」は「見よ」の轉であつて「見なさい」の略ではない。從つて尊敬は勿論親愛の意などは全くない。

御勉強なさる。
御奮闘なさる。
御覽なさる。

等は、孰れも「御勉強」「御奮闘」「御覽」は名詞であつて、下に「を」といふ助詞を必要とし、「なさる」は助動詞でなく、純粹の動詞として使はれてゐると解すべきである。「を」が略されてゐるので、稍もすると佐行變格の動詞の樣に思はれるが、若しこれが佐變の動詞ならば當然その連用形の「し」といふ語尾が現はれなければならない筈である。これがないのは上の語を名詞とし、下の「なさる」を純粹の動詞と考へたからであらう。小林氏は「お歸りなさる」も下に「を」を省いてゐると論じてゐるが、「お歸り」は純粹の良行四段の連用形であるから、下の「なさる」を助動詞と見て毫も差支はないのである。

又「早速御出被成下樣願上候」といふいひ方の解釋には二樣のとき方がある。一つは、「なさる」「下さる」は文語に於ては良行下二段活用(「なす」「下す」は四段活用であるが、これに連つた「る」は下二段型の活用であるから)である

から、「樣」といふ體言につゞくべき連體形は常然「成さるゝ」「下さるゝ」でなければならないのに、「成さる樣」「下さる樣」といふのは、口語の四段の用法（「なさる」は前述の如く口語では四段活用であるから）が混入したものであると說く解釋である。他の一つは、下二段活用が、文語ですでに四段活用に轉化して、その連體形の「成さる」「下さる」を用ひたのであると解くのである。或は後說でもあらうか。暫らく學說だけにして置かう。

(二)になる

これは助詞「に」に動詞「なる」が附いて出來た語である。

御越しになる。

御出でになる。

御勉强になる。

これは動作を直接にするといはないで、自然になりゆくといふ風のいひ方にして、敬意を寓したのである。由來直接よりも間接にいふ方が敬意を多く含むのである。

「起きられる」といふのを「御目になる」といふ。

「休まれる」といふのを「御寢になる」といふ。

「御早う御座います」といふのを「御目になりませ」といふ。

「寢る」といふのを「御寢」といふ。

（「御寢」を更に動詞にして「御よつて入らつしやる」などといふ。「る」は多く動詞の語尾に附く語だから「寢」の「る」をこれに通はせたものかと思はれる。）

關東では「れる」「られる」を用ひないで、多くは、上に「お」「ご」の語を附け、下に「なる」を使用して敬意を表はすのである。

(三)下さる

これも四段活用の動詞「下す」に尊敬の助動詞「る」を附けたものであつて、動詞の連用形に連續する。活用は

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
下さ	ら	ついり	る	る	れ	いれ

これは、動作が自分又は自分に關係のものに交涉を持つてゐる時に使はれるので、全く沒交涉のものには用ひない。「お」「ご」を上に附けて用ひることは、前の語と同樣である。

御聞き下さい。

御待ち下さるのですか。

御とまり下されば、どんなに喜ぶでせう。

（四）遊ばす

これも「遊ぶ」といふ四段活用の動詞に、敬語の助動詞「す」が附いたものであらう。四段活用をなし動詞の連用形に連る。「なさる」よりも更に強い尊敬の意を表はす。上に「お」「ご」をつける事は前と同樣である。

御出で遊ばせ。

御安心遊ばす事でせう。

これはやゝ貴族的な言葉であつて、普通の敬語より以上のものである。

（五）給ふ

命令形の「給へ」だけを學生言葉として、親愛の意と輕い尊敬の意とを併せ寓して用ひる。動詞の連用形に連ねる。

遊びに來給へ。

一寸待ち給へ。

もつと運動したまへ。

前述の諸語と異つて、上に「お」「ご」をつけないのは、さほど深い尊敬の意味を表はさないからである。

對者、第三者等に對して尊敬を表はすのでなくて、自らの謙讓を表はすために使はれる言葉がある。

申す　御願ひ申します。

致す　欠席致します。

申し上げる　御尋ね申しあげます。

つかまつる　參上仕ります。

尊敬語は必ず尊敬すべき人の動作を表はす語の下につけるのであるが、謙遜語は必ず自分の動作を表はす語の下につけるのである。右の四語は孰れも動詞であるが、これを助動詞的に使ふのである。而して自分の動作が尊敬すべき人に關係する場合に使ふのである。前例で言へば、「願ふ」「欠席する」「尋ねる」「參上する」ことが孰れも尊敬する人に關係してゐる動作なのである。

次に尊敬・謙遜と相並んで對話に用ひる鄭重語といふのがある。人によつては「謹言の助動詞」などと呼んでゐるものである。「ます」といふ語がこれである。この語は、文語では純粹の敬語の動詞で「在り、居り」の意味を表はすのであるが、口語ではこれを助動詞的に用ひて、對話用の鄭重語となつてゐるのである。或はこの語は「ます」といふ四段活用の動詞から出たのではなくて、「まゐらす」といふ下二段活用の動詞から出たのであるといふ說もある。何故ならば「ます」の未然形は「まさ」であつて、「ませ」ではない。轉化の場合と雖も未然形の樣な大切な活用形は、大抵變化させないものなのである。故にこれは「まゐらす」といふ下二段活用の根幹から「ゐら」が脫けて出來たもので、更にその連用形の「せ」を「し」に變化して四段化させたものだらうといふのである。兎に角一說の價値はあると思ふ。その活用は

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ます	ませ	まし	ます ますする	ます ますする	ますれ	ませ まし

連續は動詞の連用形である。

私は參りません。（未然形）

櫻の花が咲きました。（連用形）

花が散ります。（終止形）

出發します時は知らせます。（連體形）

參りますればさう申しませう。（假定形）

御出で下さいませ。（命令形）

「ますする」は語調を強くする時に使ふ。又嚴格な時にも使はれる。足利時代の狂言記には「ます」と「ますする」と兩方が使つてある。今日は演說の樣な時以外には一般的に使はない。「まし」は「入らつしやい」「おつしやい」「なさい」「ください」に續く場合に使ふ。

「ます」の外に「ございます」といふ語も同樣に鄭重語として使はれるが、これは「ます」よりも更に鄭重の度が强い。

「御座る」から變つて來たものであらう。活用は「ます」と同樣であるが、「ございます」には命令形がない點だけちがつてゐる。

一八、口語の時の助動詞

(一)現在時

これは動詞のまゝで助動詞を用ひないことは文語と同樣である。

(二)過去時

口語の過去の助動詞には「た」がある。動詞・形容動詞の連用形に連續する。活用とその用例は次の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
た	たら	○	た	た	たら(たれ)	○

吉野の花はもう散つたらう。（未然形）

昨日風が吹いた。（終止形）

去年花見に行つた時は眞盛だつた。（連體形）

若し行つたら繪葉書を買つて來て呉れ。（假定形）

昨日行つたれば花はなかつた。（假定形を既定に使つたもの）

この「た」は元來、完了の助動詞「たり」から出たものであるから、もとは過去の意味が無いのである。現代の口語

で失せ物を捜してゐて見つかつた時などに、

こゝに有つた、有つた。

と言ふのは現在「ある」といふのを強く言ふために「た」を使つたので過去の意味は全くない。

文語の過去の助動詞「き」「けり」は口語ではその變化も無い。稀に關東あたりで、方言的に追想をあらはす時に使はれる「け」がある。これは文語の「けり」の變形であらう。

そんなことがあつたつけ。

去年あそこへ行つて見たつけ。

上の動詞の音便によつて「た」は「だ」となることがある。

父は去年死んだのです。

(三)未來時

口語の未來を表はす助動詞は「う」と「よう」の二語である。共に活用はない。「う」は四段活用の動詞の未然形に連り、「よう」は四段活用以外の動詞の未然形に連る。

明日は雨が降らう。

次の日曜には運動をしよう。

この「う」は文語の「む」が音便で「ん」となり、更に「う」となつたものであらう。「よう」は「う」から來たものであらう。

地方によつてはこれに多少の音の變化がある。

どうしよう(上方ではこれを「どうしょう」と拗音化する)

起きよう　(岡山地方では「起きゆう」といふ)

投げよう　(上方「投ぎよう」九州「投ぎゆう」)

しよう　(九州「爲う」)

來よう　(上方「來う」九州「來う」東北「來よう」)

煮よう　(「煮らう」)

「煮よう」を「煮らう」といふのは上一段活用が四段活用に變る過渡を示すものとして注意を要する。「射よう」を「射らう」といふのも同樣である。

又、「うず」「ず」を未來に用ひる地方がある。

明日行かうず。

仕事を爲うず。

遊びに行かず。

仕事をせず。

前者は「行かんとす」より「行かんず」となり、更に「往かうず」と變化したものであらう。後者は「行かうず」「爲う

ず」のうが省略されて出來たものであらう。この外に未來の現はし方に「べい」を使ふ地方がある。

手紙を書くべい。

明日は早く起きべい。

主として關東・東北地方に使はれるもので、これは文語の推量の助動詞「べし」から變化して來たものである。

又、現在の動詞そのまゝで未來を現はす場合も多い。

明日は雪が降る。

今に大事が起る。

「う」は元來未來であるが、轉じて推量や想像の意味にも使はれるから、それ等と混同しないために、動詞そのまゝで未來を現はすものと思はれる。この場合には、上に時を限定する副詞があるから、自然に時限の關係は明瞭となるのである。

(四)完了態

1、現在完了態

「た」を用ひる。

唯今著いた。

「た」は上の動詞の音便によつて「だ」となるのは過去の時と同樣である。

丁度今風が止んだ所だ。

2、過去完了態

「た」若しくは「てしまつた」を使ふ。

目をあけた時は夢がさめてゐた。

會が果てたので皆歸つてしまつた。

「てしまつた」を「ちやつた」と言ふ所がある。

皆歸つちやつた。

現在完了と過去完了では嚴重に區別のつかない場合がある。

3、未來完了態

「う」「よう」「てしまはう」を使ふ。

米國へ御着きになる頃は病氣も治つてゐよう。

明日は仕事を片附けてしまはう。

「てしまはう」を「ちやはう」といふ所がある。

明日は仕事を片附けちやはう。

(五)進行態(繼續態)

これには純粋の助動詞がなくて、助詞「て」(文語完了の助動詞「つ」の連用形から來たもの)に、「ゐる」若くは「をる」の動詞を加へて「てゐる」「てをる」として之を助動詞的に使ふのである。

1、現在進行態

「てゐる」　雪が降つてゐる。

「てをる」　鳥が啼いてをる。

2、過去進行態

「てゐた」　花が散つてゐた。

「てをつた」　鳥が啼いてをつた。

3、未來進行態

「てゐよう」　來月の末には雪が降つてゐよう。

「てをらう」　來年の此頃は仕事を始めてをらう。

地方的の區別は次の通りである。

雪が降つてる。
鳥が飛んでる。　關東、關西地方

雪が降つとる。
鳥が飛んどる。　上方、中國、熊本地方

雪が降りよる。
鳥が飛びよる。　四國地方

雪が降つちよる。
鳥が飛んぢよる。　山口、大分、宮崎、鹿兒島地方

(六)存在態

「てある」「てゐる」「てをる」を使ふ。

1、現在存在態

「てある」　机の上に本が置いてある。

「てゐる」　花が咲いてゐる。

「てをる」　日が出てをる。

2、過去存在態

「てあつた」　柱に帽子が掛けてあつた。

「てをつた」　花が咲いてをつた。

「てゐた」　月が水に映つてゐた。

3、未來存在態

「てあらう」　來月になれば橋も架けてあらう。

「てをらう」　月末には花が咲いてをらう。

「てゐよう」　十年後には昔の東京になつてゐよう。

「てある」「てゐる」「てをる」に就いての注意を、吉岡郷甫氏「文語口語對照語法」から拔萃してみる。

「ある」「ゐる」と云ふ動詞は獨立に用ゐる時には、有情非情で別れますけれども、助動詞に準じて用ゐる時には、非情にも「ゐる」を用ゐるのであります。さうして「てある」を用ゐるのは、他動詞の客語が主語の如く用ゐられた場合に用ゐるのでありまして、例へば「洋書を置く」と云ふ文の「置く」を存在時にする時には、「置いてある」となつて自動性を帶びますから、これまでの客語が主語の位置に立つて、「洋書が置いてある」と云ふ。さう云ふ場合に「てある」を用ゐるのであります。近畿地方及び其の附近では「雨が降つてゐる」「水が流れてゐる」の如く「てゐる」と云ふ場合にも「てある」（「てございます」を含む）を用ゐるやうであります。矯正しなければなりませぬ。（同書二〇五頁參照）

口語の助動詞に關する時稱の樣式を左に圖示する。

態＼時	現在時	過去時	未來時
通常態	動詞そのまゝ	た	う よう
完了態	た	た てしまつた	う よう てしまはう
進行態	てをる てゐる	てをつた てゐた	てをらう てゐよう
存在態	てある てをる てゐる	てあつた てをつた てゐた	てあらう てをらう てゐよう

一九、口語の推量の助動詞

口語の推量の助動詞には種類が多い。以下その概略をあげてみよう。

（一）「う」

四段活用の動詞の未然形に連る。（「う」といふ推量の助動詞の發生に就いては、土井忠生氏の詳しい考察が雜誌「國語國文の研究」の第十二號、第十六號及び第二十一號に掲載されてゐる。就いて參考されたい。）

明日は晴天にならう。

（二）「よう」

四段活用以外の動詞の未然形（但し佐變の「せ」は除く）に連る。

家では皆が待つてゐよう。

(三)「だらう」「でせう」

前者は指定の助動詞「だ」の未然形「だら」に推量の助動詞「う」の連つたもの、後者は同じく指定の助動詞「です」の未然形「でせ」に推量の助動詞「う」の連つたものから來たので、共に「う」「よう」と同樣の場合に使ふが後者の方が丁寧な言ひ方である。

明日は雨も上るだらう。

やがて櫻も咲くでせう。

連續は動詞の終止形である。これと、純粹に指定の助動詞の未然形に「う」の着いた「だらう」「でせう」とは用法の區別がある。前者は動詞に直接連續するが、後者は、動詞に續く時には間に「の」といふ助詞を置き、又は體言に直接するのである。

これは歴史の本だらう。

あの人はもう歸るのでせう。

「でせう」を更に丁寧に言ふ時は「でございませう」といふ。

(四)「さうだ」「さうです」

動詞・形容詞の連用形に連る。

雨が降りさうだ。

風が吹きさうです。

動詞・形容詞の終止形に連なる用法もあるが、この時には「といふことだ」の意味であつて、純粹の推量ではないから注意を要する。

支那には戰爭があるさうだ。

紀州は大變温いさうです。

(五)「らしい」

動詞・形容詞の終止形に連る。

やがて櫻も咲くらしい。

あの人は英國人ではないらしい。

活用は

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
らしい	○	らしく	らしい	らしい	らしいけれ	○

連用形は音便で「らしう」となり、過去を表す時には「あつた」と熟合して「らしかつた」となる。又この推量の「らしい」が體言について「と見える」といふ意味を表はすことがある。これは「男らしい」「女らしい」「軍人らしい」に使はれてゐる接尾語から類推したものにちがひない。

あの人は支那人らしい。

明日は雨天らしい。

推量であつて接尾語として使はれてゐるのではない。

推量の助動詞の地方的差異は次の通りである。

「じやらう」　瀬戸内海附近

「やらう」　上方

「ずら」　遠江・三河・信濃

「ど」　九州

「べい」　千葉、茨城

「らう」　東九州、西四國

「ら」　遠江・駿河・信濃

二〇、口語の希望の助動詞

口語の希望を表はす助動詞は「たい」である。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たい	○	たく	たい	たい	たけれ	○

文語では主語が一人稱の時にのみ用ひるが口語では必ずしもさうではない。動詞の連用形に接續する。

君も行きたいだらう。（終止形）

誰でも死にたい者はなからう。（連體形）

死にたければ死ぬがよい。（已然形）

これを過去の形にするには連用形「たく」ニ「あつた」この熟合した「たかつた」とするのである。

二一、口語の比況の動助詞

文語の「如し」に相當する語が口語にはない。體言「やう」に指定の助動詞「である」「だ」若しくは「です」を附して「やうである」「やうだ」「やうです」として之を使ふ。

落花は雪のやうだ。

人生は夢のやうである。

立板に水を流すやうです。

動詞・形容詞の連體形、及び助詞「の」を隔てゝ體言に連續する。活用は次の通りである。（これには異說もあらう）

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
やうである	やうであら	やうであり やうであつ	やうである	やうな	やうであれ	○

やうで やうに	やうだつ やうで やうに	やうでし やうで やうに	やうです	やうです
	やうだ	やうだら	やうで せ	
	やうな		やうな	
	やうなら やうなれ		やうなら やうなれ	
	○		○	

これ等の語を「らしい」と同樣推量に用ひることがある。

北國はもう雪が降つたやうだ。

九州及中國では「ごと」を用ひる。これは文語の「如し」が轉じたものであらう。

花のごとある。

花のごたる。（ごとあるの約であらう）

雪のごつ白か。（雪の如く白いといふ意）

又動詞、名詞、助詞を連ねて

菊みたやうな花

菊みたいな花

ともいふ。

二二、口語の指定の助動詞

（一）「である」

助詞「で」に動詞「ある」のついたものである。

これは文法の本である。

これは多く文書に用ひられるので文書式の口語といはれてゐる。これに對して丁寧にいふ時には、「であります」「でございます」「でございます」といふのを使ふ。

これ等の語は「で」とその下の語との間に助詞を挾んで用ひる事がある。

さうでは ありません。

さうでも ありませうが。

用言を指定する時には、孰れも助詞「の」を入れて、「のである」「のであります」「のでございます」といふ。この內「であります」は軍隊では常套語になつてゐるやうであるが、その他では演說の外普通の對話にはあまり用ひない樣である。この語はもと江戸では言はなかつたもので、必ず「でございます」婦人は「でございます」と言つてゐた。明治の初に諸國の田舍侍が江戸へ來て作つた語だといふことである。

（二）「だ」

これは前の「である」が融合して出來たのだといふ說がある。「たり」から來たのかも知れないし、成立の程は分らない。活用は、

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
だ	だら	だつで	だ	○	ならなれ	○

體言へ連る時はそのまゝに續くが、用言へ連る時は間に助詞「の」を挾んで連體形に續く。

これは學校だ。

君は明日歸るのだらう。（未然形）（「歸るんだ」は音便である）

さうだつたのか。（連用形）

これは梅でこれは櫻だ。（中止形、終止形）

蟻が鯛なら芋虫は鯨だ。（假定形）

この「だ」に相當する口語の指定の助動詞は地方的に大分差がある。

これは城ぢや。（中國、四國、九州）

さうや、さうや。（京阪地方）

そや、そや。（同右）

私のぞ。（九州）

「ぢや」「や」は古い所にも見える。「史記」の講義を口語で筆記した「史記抄」に

なんとした心であるやらうぞ。

とあるし、又「狂言記」の「素襖落」にも

大儀ながら伯父や人の方へ使にいてくれ。

とある。又「史記抄」に

父母死んで三年の喪は通義ぢやぞ。

とあり、又、「閑吟集」には

大事ぢやる物。

とある。「だ」はあまり古いものには見えなくて、

くれないか是非々々花を所望だぞ（西翁十百韻）

各々の腹中にあるべい事だと思ひ申せ（雜兵物語）

などある。

「だ」の過去の形は「だつた」である。

（三）「です」

「だ」を更に丁寧に言つたものである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形

です	でせ	でし で	です	○	○ なら なれ

體言若くは用言の下に助詞「の」を連ねたものに續く。これも古いものとしては「狂言記」に見えてゐる。

遠國に隱もない大名です。

主に暇を乞はぬ法ですか。

「です」は「でござります」の轉化したものだらうといふことで、これに類する語には種々のいひ方がある。

でござります　でござりやす　でござあす（土佐）　でござあんす（越中）
でございます　でございさんす　でござえす　でござぜす
でございあす　でございわす　でがあす　でございあんす（羽前）
でございわんす　でがいます（安藝）　でといす（青森）　でげいす
でございつす　でございんす　でございす　でがんす
でがす　でげす　であんす（常陸、羽前、出雲）　でやんす（羽前）
であす（陸中）　ちやんす（日向）　ちやす（備前）　だつす（羽前）
でんす

江戸の遊女詞には「おざりいす」「さいます」「さます」「さんす」といふのがある。

「口語法別記」には「です」の由來に就いて次の如く書いてある。

「です」は隨分古くから、つかつて來た話のやうであるが、江戸では、もと藝人言葉で、輕薄な口調の「でげす」などと同じもので、明治以前は、咄家・太鼓持・女藝者・新吉原の茶屋女などに限つて用ひられて居たもので、その女が素人になつても「です言葉」が出て咎められて、困つたもので、町人でも身分のある者は、男女共に用ひなかつた。それが今のやうに遍く行はれるやうになつたのは、明治の初に田舍の武士が江戸へ出て、柳橋新橋あたりの女藝者などの言葉で聞いて、江戸の普通の言葉と思つて、眞似始めたからの事であらう。それであるから、餘り馨ばしくない語ではあるが、今では、身分のある人々まで用ひられて、もはや止められぬ程の言葉となつた。（二九七——二九八頁）

京都では「どす」「どすやらう」「どした」「どしたやらう」大阪では「だす」（輕く言ふ時は「す」の音が殆どひゞかない）「だすやらう」「だした」「だしたやらう」といふ。大槻博士の說によれば「どす」は文語の「にておはします」が約まつて、「でおます」となり、又「でおす」「どす」と約まつたもので、大阪邊の「だす」はそれから又移つたものであらう、といふことである。

「です」の過去には「でした」を用ひる。

（四）「なり」

これは文語に限る指定の助動詞であるが、そのある形は口語にも使はれてゐる。

見るなら見てもよろしい。

私ならそんな事はしない。

君なり僕なり誰か行くとしよう。

この頃は休みなのです。

明日が日曜日なればいゝのだが。

二三、口語の否定の助動詞

口語の否定の助動詞には「ぬ」(ん)と「ない」の二語がある。關東(三河以東)では「ない」を用ひ、關西(尾張以西)では「ぬ」(ん)を用ひる。この區別は嘗つて文部省の國語調査委員會の作つた「口語法調査報告書」に於ける東西方言の境界を示す事項であつた。それには口語法の分布に東西の對峙のある多くの實例を示した後、かう書いてある。

コレラノ對峙ニ基キテ假ニ全國ノ方言區域ヲ東西ニ分タントスル時ハ、大略、越中・飛驒・美濃・三河ノ東境ニ沿ヒテ其境界線ヲ引キ、此線以東ヲ東部方言トシ以西ヲ西部方言トスルコトヲ得ルガ如シ。

「ぬ」は文語の打消の助動詞の一活用形である「ぬ」と同じものであらう。「ん」はこの「ぬ」から母韻の脱落したものであらう。「ない」も「ぬ」の變化だといふ說もあるが、これは形容詞「無し」より轉用されたものかも知れない。その活用は

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ぬ	○	(す)	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	○
ない	○	なく	ない	ない	なけれ	○

すべて動詞の未然形に連る。そのため口語の未然形を否定形といふ事さへある。

絶えず雨が降る。(連用形―副詞形)

支那は騷亂が絶えぬ。(終止形)

雨の降らぬ前に歸らう。(連體形)

雨が降らねばよいが。(假定形)

あの人は物を言はなくなつた。(副詞形)

何故か理由は分らない。(終止形)

知らない事は口にするな。(連體形)

雨が降らなければよいが。(假定形)

「ない」は關東で用ひると言つたが、關東でも「ます」に連ねる時には「ん」を用ひる。又、熟語の中へ入る時にも「ん」は使はれる。

私は何も知りません。

知らん顏をしてゐる。

否定の過去、文語でいへば「なかりき」は地方によつてそのいひ方を異にする。

知らなかつた。(關東)(連用形「なく」が「あつた」と熟合したもの)

知らなんだ。(關西)

知らざつた。（瀬戸内海沿岸）

知らだつた。（九州）

否定が助詞「て」に連る時には

知らなくて（關東）

知らなくつて（同）（「知らなくて」を促音にしたもの）

知らないで（關東）

知らいで（關西）（文語「ず」の副詞形「ず」が「て」と連り「ずて」となり、更に約つて「で」となつたもの）

知らんで（關西）

口語の「ぬ」の連用形（副詞形）は助詞「に」を伴つて使はれる事が多い。

ちつとも知らずにおました。

何處くもゆかずに家におました。

この外に推量の否定「まい」がある。四段活用の動詞には終止形から連り、その他の動詞には未然形から連る。

私は行くまい。

明日は早く起きまい。

なほこの「まい」は受身・可能・使役の助動詞には未然形、敬語の「ます」には終止形から連ること、次例の如くである。

言はれまい。（受身）

起きられまい。（可能）

讀ませまい。（使役）

受けさせまい。（使役）

私は參りますまい。（敬讓）

「まい」が加變と佐變とに連る時には、種々の連續が行はれてゐる。

來まい。（正）　くまい。　くるまい。　きまい。

爲まい。（正）　爲まい。（正）　すまい。　するまい。　しよまい。

「まい」は同じ形で終止形と連體形だけに使はれるやうである。

三四、口語の助動詞補遺

大槻文彦博士の「廣日本文典」を讀むものは、必ず「廣日本文典別記」を併せ讀まなければならない。同樣に國語調査委員會編纂（大槻文彦博士案起草、委員審讀整理）の「口語法」を讀むものは、必ず同委員會編纂（大槻文彦博士擔任編纂）の「口語法別記」を讀まなければならぬ。いまその「口語法別記」に基いて、口語の助動詞に就いて注意を要する點を摘記して參考に資したいと思ふ。

（一）他動の動詞に受身の助動詞と結びついて、それが約まつて「抱かれる」が「だかる」となり、「敎へられる」が「おそ

はる」、「授けられる」が「さづかる」、「仰付けられる」が「仰付かる」、「助けられる」が「たすかる」、（史記抄、十、三七「父のたすかるまい事を知たれども云々」）「かぶせられる」「かぶさる」、「言ひつけられる」「言ひつかる」、「ゆでられる」「ゆだる」（可能の助動詞で「まけられる」「まかる」「やめられる」「やまる」「つとめられる」「つとまる」、「しらべられる」「しらばる」）となると、變じて五段活用（本講の四段活用のこと）となり、他動詞が自動詞となる。「擊たれる」の「うてる」（壓）となり、「持たれる」の「もてる」（優遇）となるも、下一段活用の自動詞となる。（「擊れ」も「擊められ」るの約まつたのであらう。）（一九九頁――二〇〇頁）

（二）受身の命令に「擊たれろ」「助けられろ」と「ろ」を用ゐるは、駿河、山梨縣、越後から東は大抵同じで、尙三河、香川縣、筑後、肥前、熊本縣、宮崎縣にもさういふ所がある。又、遠江、長野縣の西南部、富山縣、佐渡から西は九州まで、「擊たれよ」「擊たれい」「助けられよ」「助けられい」をまぜて、（京都大阪は「い」「え」である）殊に中國、四國には「い」を用ゐるが多い。

「れよ」「られよ」が「れい」「られい」となつたのは次の例で分る。

室町時代「孟子抄」重賓の醫者共を反されい。

江戸時代「雜兵物語」玉藥を一放し分下されい。（二〇六頁――二〇七頁）

（三）下一段活用の動詞の「立てる」「立てね」（他動）、「切れる」「切れぬ」などと、可能の「立てる」「立てね」（自動）「切れる」「切れぬ」（他動）などと紛れ易く、其外「かへる」（得侗）「かへる」（變）「つめる」（得摘）「つめる」（抓）、「とげる」（得研）「とげる」（遂）、又文語の「畫にかける姿」「空を飛べる鳥」「手に取れる物」なども紛れ易い。（二一四頁）

（四）使役の助動詞を名詞に用ゐるは、「人騷がせ」「人泣かせ」「人困らせ」「知らせ」「思はせぶり」「いやがらせ」「嬉しがらせ」などである。「お持たせの菓子」など云ふのは、供の者に持たせて來たといふ意味か、古い敬語の「持たせ給ひ」の名殘か。「かはせ」（爲替）などは生れつきの下一段活用の動詞の、名詞となつたのであらうか。（二一九頁）

（五）「せむ」「させむ」の「せう」「させう」となつた實例（二二三――二二四頁）

「せよ」「させよ」の「せい」「させい」となつた實例（二二四――二二七頁）

「せさせむ」の「させう」となつた實例（二二七――二二八頁）

「せさせよ」の「させよ」「させい」となつた實例（二二八頁）

（六）希望の助動詞「たい」の語根の「た」を「遊びたや」「見たや」「逢ひたさ」「起きたさ」「行きたげ」「言ひたげ」「行きたさうに」「食ひたさうに」「書きたがる」「來たがる」などと用ひることがある。（二三二頁）

（七）「たく」連用形に「ば」をつけて「行きたくば行け」「逢ひたくば呼びにやらう」などと云ふこともある。「行きたけれ

ば」「逢ひたければ」と云ふと同じである。假定形の「聞きたければこそ頼むのである」「見たければこそ來たのである」などと云ふ時は、「たいから」「たいに因て」の意味となる。(二三七頁)

(八)打消の「ず」の用法で、「言はず語らず」「飲まず食はず」「見ず知らず」「虻も取らず蜂もとらず」などは終止形に用ひるので、文語の姿の殘つてゐるのである。「食はずぎらひ」「問はずがたり」などは「落ち葉」「讀み物」の例で名詞にしたものである。(二四一頁)

(九)打消の助動詞「ず」に「ば」を附けて條件を表はすことがある。「間に合はずばよろしい」「出來ずば仕方がない」「行かずばなるまい」「知ずば言つて聞かせよう」「三度に一度は追はずばなるまい」是等も文語の姿の殘つてゐるのであつて、「合はねば」「行かねば」「知らねば」などと同じ意味である。(二四一頁)

(一〇)「知らねばこそ言つて聞かせるのである」は「知らぬから」「知らぬに因て」の意味である。

「無ければならぬ」を「なければならぬ」「なけらねばならぬ」などいふのは甚だしい間違である。形容詞に打消の助動詞の「ず」「ぬ」「ね」はつゞかないからである。(二四二頁)

(一一)前に形容詞の處で述べた「さう」が打消の助動詞につく時には、「ない」の語根の「な」から續いて「出來なさうに」「つまらなさうだ」「勝てなさうで」などとなるべきを、「出來なさう」「つまらなさう」「勝てなさう」などと言ふことがあるのは、形容詞の「無さう」の用法に釣込まれての事である。又「穢なさう」「危なさう」の「な」は「きたない」「あぶない」の語根で、「無い」の意味も、打消の意味もないのに、「きたなさう」「あぶなさう」などと言ふのは全く誤であらう。(一六二頁)

(一二)過去の助動詞「た」を「おつと待つた」「そこどいた」などと命令に用ひることがある。(二六二頁)

(一三)指定の助動詞「だ」「だつた」が用言に附く場合に、間に這入る「の」は、名詞の代りに用ひられる助詞の「の」である。「だ」は元來體言につくのであるから、用言には名詞の代りの「の」が這入つてつくのであらう。(二八六頁)

(一四)「だ」は「噂をすれば影がさすだ」「見るだの聞くだの」「長いだの短いだの」の樣に一語一句を名詞と見て言ふ時には、用言にも「の」なしで附くことがある。これは「さす」「見る」「長い」などの間に「事」「物」を略して言ふのであらう。(二八六頁)

(一五)指定の「だ」「だらう」を過去の「だ」「だらう」と間違へてはならぬ。過去には「讀んだ」「飛んだらう」で、指定には「讀むだの書くだの」「讀むだらう」「飛ぶだらう」である。(二八七頁)

(一六)「べき」を口語に使ふことがある。

遣るべき物は遣れ。
議員ともあるべきものが。
よく一致を圖るべきだ。
起きるべき時には起きろ。
受けるべきものは受けるがよい。
今頃は來るべき時である。
讀ませるべき。
かうあるべき筈である。
然るべき人に賴め。
恩に報いるべきである。
見るべき物でない。
擊たれるべき。

これは當然を表はすので、口語としては活用もなく、連體形ばかりで、且つかた苦しい物言ひばかりに用ひられる。此「べき」は動詞又は受身・可能・使役の助動詞の終止形にも附け、四段活用の動詞の外は「起きべき」「見べき」「受けべき」「擊たれべき」「讀ませべき」などこ其連用形にも附ける。唯佐變の「する」にばかりは「さうすべき筈である」「嚴しく論ずべきものではない」などと古格の終止形の「す」に附く。

「べく」は「なるべく早く來い」「然るべく賴む」など云ふのであるが、是等は、「成るべく」「然るべく」と云ふ成語の副詞と見るがよからう。（二九九——三〇一頁）

二五、動詞と助動詞の連續及び助動詞相互の連續

これは上述の各項に於て一々説明を加へて置いたのであるが、便宜のためこゝに一括して、表示することにする。

（一）動詞と助動詞との連續表

動詞の活用形 ／ 助動詞の種類	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
受身（可能、自發）（敬語）	る（四段・ナ變・ラ變） らる（右以外） レル（四段） ラレル（四段以外）	敬語：ナサル・ニナサル・下ナル・遊ばす・タマへ・申ス・致マス			
使役	す（四段・ナ變・ラ變） さす（右以外） しむ（全部） セル（四段） サセル（四段以外）				
未來	む ウ ヨウ	き（サ變ニ限ル）			

時 過去	し(カ變・サ變ニ限ル) しか(カ變・サ變ニ限ル)	し(カ變ニ限ル) しか(同右) けり(全部) タ			
時 完了	り(サ變ニ限ル)	つ ぬ たり タ(ダ) テキル テヲル テアル			り(四段ニ限ル)
推量	まし む ウ(四段ニ限ル) ヨウ(四段以外)	けむ サウダ サウデス	らむ めり らし べし べかり ダラウ デセウ ラシイ		
希望	まほし	たし タイ			
比況				ごとし ヤウデアル ヤウダ ヤウデス	
指定			なり(詠歎ヲ表ハス)	なり ダ	
否定	ず ざり じ ヌ(ン) ナイ マイ(四段以外)		まじ マイ(四段ニ限ル)		

注意、(一)すべて動詞の終止形に連續するものは良變に於ては連體形に連るのである。
(二)本表に於て片假名書にしてあるのは口語の助動詞を示す。

(二)助動詞相互の連續表(文語)

種類	助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形

受身	使役	未來	過去	完了
る らる	す さす しむ	む	き けり	つ ぬ たり り
れ られ じさり{否定} ずまし{推量} むし{未來} さす{使役}	せ させ しめ じさり{否定} ずまし{推量} むし{未來} らる{受身} さす	○	○ (けら) ず{否定}	て ぬ むまし{推量} な{未來} じずまし{推量} ら{未來} たら じずまし{否定}
れ られ けむ{推量} き・けり{過去} たぬ たり{完了}	せ させ しめ けむ{推量} けき・けり{過去} たぬ たり{完了}	○	○ けり	き けり けむ{推量} けき・けり{過去} にたり{完了} て にけり{推量} き けり{過去} りたり{完了}
る らる なまべらめらむ りじかりしししりむ なまべらめらむ りじかりしししりむ 指定 否定 推量	す さす しむ なまべらめらむ りかりしししりむ なまべらめらむ りかりしししりむ 指定 推量	む	き けり	つ ぬ たり なまべらめらむ りかりしししりむ なまべらめらむ りかりしししりむ 指定 推量
る らる なり{指定} ごとし{比況}	す さする しむる なり{指定} ごとし{比況}	む	し ける なり{指定} らし{推量} なり{指定}	つる ぬる なり{指定} ごとし{比況} たる べらめらむ なり{指定} べし{推量}
れ られ	す さすれ しむれ	め	し けれ	つれ ぬれ たれ れ
れよ られよ	せよ させよ しめよ	○	○ ○	てよ ね (たれ) (れ)

推量	希望	比況	指定
らむ めり らし まし べし べかり けむ	たし まほし	ごとし	なり
○ ○ ○ (ませ) べく べから ずむし ざり{否定} むし{未來}{使役}	たく まほしく	ごとく	なり けむ{推量} けり{過去} つ{完了}
○	たく まほしく	ごとく{なり}指定	なり けり{過去} つ{完了}
らむ めり らし まし べし べかり けむ	たし まほし	ごとし	なり
らむ める らし まし べき{なり}指定 べかる らめりし{推量} まじ{否定} なり{指定} ごとし{比況}	たき まほしき{なり}指定	ごとき{なり}指定	なる らめべらめらむ かりしりむ じなまべ りかり ごとし{比況} 指定 否定 推量
らめ めれ らし ましか べけれ べかれ けめ	たけれ まほしけれ	○	なれ
○ ○ ○ ○ ○ ○	○○	○	なれ

(三)助動詞相互の連續表(口語)

種類	定	否定	
助動詞	たり	ず	じ
未然形	たら ず(ざり) まし(む) 未來 推量 否定	ず さら(ざり) しむ(む) 使役 未來 推量	じ まじく ○
連用形	たり つ(き)(り) 完了 過去 けり(けむ) 過去 推量	ず けり(けむ) 過去 推量	じ まじく ○
終止形	たり	ず	じ まじ
連體形	たる ら(め)(べ)(まし)(なら)(ごとし) む(しむ)(じかり)(しかり)(べかり)(らめ)(なり)(ごとしり) 推量 否定 指定 比況	ぬ(なり) 指定 さる (ごとしり)(なべかり)(べらめ)(らめ) 推量	じ まじき(なり) 指定
已然形	たれ	ね	じ まじけれ
命令形	たれ	○	○ ○

過去	使役	受身
た	せる させる	れる られる
たら(う) 未來	せ させ (よう)(ぬ)(ない)(まい) 未來 否定 (られる) 受身	れ られ (よう)(ぬ)(ない)(まい) 未來 否定
○	せ させ (た)(ます)(たい)(さうだ)(さうである)(さうです) 過去 敬語 希望 推量	れ られ (た)(ます)(たい)(さうだ)(さうである)(さうです) 過去 敬語 希望 推量
た (だ)(で)(せら)(さう)(さうで)(さうである)(さうだう)(さうです)(らし)(やう)(やうで)(やうである)(やうだい)(やうです) 量推 況比	せる させる (だら)(で)(せう)(さう)(さうである)(さうです)(らし)(やう)(やうである)(やうだ)(やうです) 量推 況比	れる られる (だら)(で)(せう)(さう)(さうである)(さうです)(らし)(やう)(やうである)(やうだ)(やうです) 量推 況比
た (だ)(である)(です)(の) 指定	せる させる (だ)(である)(です)(の) 指定	れる られる (だ)(である)(です)(の) 指定
たら(たれ)	せれ させれ	れれ られれ
○	せよ させよ	れよ られよ

(量推)況比	望希	量推
やうである やうです	たい	らしい そうである そうです
やうだから やうだらう やうだせう	○	らしい そうだから そうだらう そうだせう 未来
やうだつし やうであつし 過去	たく	らしく そうであつし 過去
やうです やうである	たい やややらさうでらしである 況比 たいすると 量推 だらう	らしい そうです そうである 況比 そうですると 量推 だらう
やうな やうな	たい のの だと です 指定	らしい のの だと です 指定
やうだから やうだらう	たけれ	らしけれ そうだから そうだらう
○ ○ ○	○	○ ○ ○

了	完	未来
である	である	ようう
であるまい であるまいう 否定 未来	である でさう 否定 未来	○ ○
であるじ同=右 であつた 過去	であり であつた 過去 であつたいす 希望 量推	○ ○
であるじ同=右 である 況比 だらう	であるらしである 況比 量推 だと です 指定	ようう
である じ同=右 である じ同=右	であり であつた であれ であれ であれ	○ ○ ○
○ ○	○ ○	○ ○

指定	だ	だら（う 未來）	だっ（た 過去）	だ	○（な）	なら なれ	○
	である	であら（う 未來）	であっ（た 過去）	である	○（な）	であら であれ	○
	です	でせ（う 未來）	でし（た 過去）	です	○（な）	なら なれ	○
否定	ぬ	○	（ず）	ぬ	ぬ	ね	○
	ない	○	なく	ない（だらう、でせう、さうだ、さうである、さうです、らしい 推量；やうだ、やうである、やうです 比況）	ない（（の）だ、（の）である、（の）です 指定）	なけれ	○
	まい	○	○	まい	まい	○	○

助動詞は動詞の意味を完全にするために使はれる詞であるから、その必要に應じて必要なる詞を連續せしめるのであるが、その間には以上の如く一定の法則がある。更に意味を完全にする必要上、助動詞に助動詞を連ねることも多く、その間にも一定の連續法則がある。しかし、これは助動詞が動詞に連續する法則に準じて考へれば間違はない。又必要によつては助動詞を三個連ねることすらある。しかし、それは繁を厭つてこゝには說明しなかつた。助動詞の種類とその活用形を標準にして檢察すれば容易に判斷がつくものである。

第七章　助詞

一、助詞の意義と種類

助詞といふのは或る語句の下に添つて、その語句と他の語句との關係を示し、又は種々の意味をその語句に添へる詞である。左の例で傍線を施した語は助詞である。

君が代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで

この一つの例で以て見ても、如何に日本語では助詞が多數使用せられて、又それが文法上重要な務を果してゐるかゞ分ると思ふ。

助詞といふ名稱は、この品詞が補助的の品詞であるといふ點から名附けられたもので、現今一般的に使用されてはゐるが、必ずしも適當な名稱とは言はれない。補助的に使用されるといふ意味を以て、この品詞の價値を論ずるとすれば、往々にして誤解されることがあるから注意しなければならぬ。品詞の職能上の差を以て、その價値判斷の標準とすることは、絕對に避けなければならないことである。獨逸に August Schleicher（アウグスト シユライヘル）(1821－1868) といふ言語學者があつて、言語を次の三種に區別した。

(一)孤立語（こりつ） (Isolating language)
(二)漆着語（しつちやく） (Agglutinating language)
(三)屈折語（くつせつ） (Inflexional language)

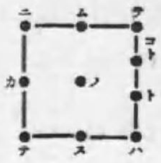
一々の說明は言語學の範圍に屬することであるから之を避けるが、第二の漆着語といふのは、觀念語と觀念語とが種々の接辭に依つて結合されて文章をなすもので、その觀念語間の關係を示す接辭は獨立的の資格を失つて居て、それだけでは用をなさないのであるが、觀念語に漆着してその意義職能を全くするのである。土耳其韃靼語族、蒙古語、滿洲語、馬來語、などはこれに屬するので、我が國語も實は之に屬するのであつて、その漆着語たる所以をこゝに言ふ助詞等が現はすのである。實に助詞は西洋語などに對して我が國語の特色を現はしてをるといつてよいのである。その意味に於て國語としては甚だ大切なる品詞なのである。

助詞を呼ぶに助辭といふ語を以てする人もある。詞を辭に代へただけである。

又、關係詞といふ人もある。これは助詞が語句の關係を示すからである。

又、英語の前置詞（preposition）に準じて後置詞（或は後詞）と呼ぶ人もある。併し、英語の前置詞に比ぶれば助詞は用法に於てはるかに廣い。前置詞は主として名詞代名詞の前に置かれるのであるが、助詞は名詞代名詞に附くばかりでなく、動詞にもつけば形容詞にもつくし、副詞にも連るのである。

更に助詞を呼ぶ廣い名稱として「てにをは」（豆爾乎波）といふ語がある。略して「てには」といふ事もある。この「てにをは」といふのは、元來、今日いふ助詞だけの名稱として用ひられたものではなく、助動詞やその他獨立しない詞を包括した廣い名稱なのである。「てにをは」といふのは、古く乎古止點と稱して、漢文を訓讀する時、後世の如く送り假名を送らないで、漢字の四隅四側、中央に點をつけて、これを目安にして讀んだのである。その點を左の下の隅から上に向つて四隅を順次によむと、「てにをは」と配されてゐるところから來た名稱なのである。



なほ乎古止點の一般的知識に就いては、吉澤義則博士著「國語國文の研究」（岩波書店發行）の中に「所藏尚書及び日本書紀古鈔本に加へられたる乎古止點に就きて」といふ論文があつて、その初めの所に「乎古止概要」と題して、名稱、時代、來由に就いての說明があるから參照されたい。（一九三頁——二一二頁）

豆爾乎波の研究に就いては、保科孝一氏著「國語學小史」（大日本圖書株式會社發行）などを見れば分ることであるが、我が國ではかなり古くから、研究が行はれてゐた樣である。順德院の「八雲御抄」に「手爾遠波の事」といふ一節があつて歌道上その肝要なことが說かれてゐるし、定家卿の著だと傳へられてゐる「手爾波大概抄」、宗祇法師の「手爾波大概抄之抄」等もある。德川時代になつてからは、富士谷成章の「脚結抄」、本居宣長の「詞の玉緒」「紐鏡」、福守部の「助辭本義一覽」、富樫廣蔭の「詞の玉橋」、その他東條義門、長野義言、萩原廣道、中島廣足等有力なる研究者が多い。かくの如く國語に於ける助詞の研究は古來多くの學者に依つて力を到されたばかりでなく、明治になつても、大槻文彥氏、岡澤鉦二郎氏、山田孝雄氏等に依つて新しい研究が漸次進んだのである。

進んで助詞の特質といふべきものを項目として左にあげてみる。

(一)全部形式語で觀念語でないこと。

(二)語尾變化を有しないこと。
(三)形が多くは短小で一音、二音が多く、三音以上は稀であること。
(四)獨立して文の頭に立ち得ないこと。
(五)他の語句の下に附着しないで使はれるといふことの無いこと。
(六)すべて固有語であつて外來語は絶對にないこと。

重複するが、山田孝雄氏は、その著「日本文法論」に於て、その性質とし次の三項を指摘した。

第一、他語との關係を示す必要よりして、形體上に變化を有するかの點より見れば、助詞にかゝることなし。

第二、そのあらはせる觀念の上より觀察すれば、助詞は單獨にては何等の觀念をもあらはし得ず、他の觀念語に附屬して始めて其の義を認むるを得るのみ。

第三、その職能によりて觀察すれば、助詞は觀念語たる體言用言副詞に附屬して其の意義を明にし、又それらの間の關係を示すに用ゐらる。

次に助詞の分類に就いて考へてみるに、明治以前は暫らく措き、明治以後に於ては大槻文彦博士の「廣日本文典」に試みられた分類が廣く行はれた。博士は、助詞の文中に於ける位置、即ち用法に從つて分類されたのである。

第一類、名詞にのみつくもの(名詞の巨爾波)

(1)が　の
(2)の　が　つ
(3)に
(4)を
(5)と　を
(6)へ
(7)より　から
(8)まで

第二類、種々の語につくもの

(9)は　ば
(10)も
(11)ぞ　なむ　なも　し
(12)こそ
(13)だに　すら
(14)さへ
(15)のみ　ばかり
(16)や　か

第三類、動詞にのみつくもの(動詞の巨爾波)

(17) ば
(18) と　とも　ど　ども
(19) に　を　か
(20) て　にて　して　にして　として
(21) で
(22) つゝ

この大槻博士の分類をもとにして次の樣に呼ぶ人もある。

第一類、體言につく助詞(助體詞)

第二類、體言用言その他種々の語につく助詞(通助詞)

第三類、用言につく助詞(助用詞)

之に對して「日本文法論」の著者山田孝雄氏は、特に助詞に對する周到なる研究の結果、主として職能即ち他に伴ひて用ひられる狀態と、その示す關係の如何との二つに基いて、之を左の六種に分類された。

- 助詞
  - 特定の關係を示すもの
    - 句成分に關するもの
      - 格助詞 (一)
      - 副助詞 (二)
    - 接續助詞 (三)
    - 句その者に關するもの
      - 述素に關するもの
        - 係助詞 (四)
        - 終助詞 (五)
  - 特定の關係を離れたるもの……間投助詞 (六)

一、格助詞、の　が　を　に　と　へ　より　から　で

二、副助詞、だに　すら　さへ　のみ　ばかり　まで　など　やら　だけ　ぐらゐ

三、接續助詞、ば　と　とも　ど　ども　が　に　を

四、係助詞、は　も　ぞ　なむ　こそ　や　か　な　なそ　さへ　でも　ほか　しか

五、格助詞、が　がな　か　かな　かし　さ　え　ぜ　い　な　とも

六、間投助詞、よ　や　し　を　な　ね　ぞ

「國語國文法要義」の著者小林好日氏はこの標準に則つて次の四種に分類してゐる。

一、定格助詞、體言の關係的意義を規定するもの。

二、修飾助詞、單語に種々の意味を添へるもの。

三、接續助詞、用言の關係的意義を規定するもの。

四、感動助詞、單語又は文に勢を添へ情味を加へることを目的とするもの。

又、「國語法概說」で安田喜代門氏は次の分類表を掲げてをられる。

- 助詞
  - 孤立助詞……感動助詞
  - 關係助詞
    - 形式助詞
      - 量的形式助詞……副助詞
      - 質的形式助詞
        - 格助詞
        - 法助詞
    - 實質助詞

その他、文章の構成に立脚して、「主語を表す助詞」「補語を表す助詞」「形容詞的修飾語を表す助詞」「體言に添うて副詞的修飾語を表す助詞」「用言に添うて副詞的修飾語を示す助詞」「語意を強める助詞」「語意・文意を表す助詞」(並列・疑問・反語・感動・呼掛・禁止・希望)と分類して居られる佐成謙太郎氏の分類もある。又吉岡郷甫氏のやうに大槻氏の分類の上に更に二類を加へた分類法もある。(第四類の助詞は、文の末の用言又は文の中の種々の語に就いて疑問を表し、文の末の用言に附いて命令又は願望を表はすもの、第五類は、文の末又は中に置いて、語調を整へ語勢を與へ、餘情を添へるに用ひられる助詞)

本講に於ては山田孝雄氏の分類法に從つて說明して行くことにする。山田氏の文法は特に助詞の研究に於て特色が著しく表はれてゐる樣に信ぜられるからである。

二、格助詞

格助詞といふのは體言又は副詞に添つて、文の成分に關して一定の關係を示し、之に依つてその資格上の區分を明にするものである。山田氏の格と稱するのは、英語などの case よりは意味がひろい。卽ち、名詞を基礎にして他の語に對する一定の關係をさす格よりは意味がひろくて、文の成分の成立に關しての一定の資格の義に解してある。而してある一定の資格を示す助詞は、他の資格を表はすことが出來ないといふ樣に、資格に關する區別が嚴然として存してゐることを忘れてはならない。

格助詞に屬する助詞の種類をあげ、各々に就いてその性質用法等を例によりつゝ以下簡單に說明しよう。

(一)が

1、體言についてその體言が他の體言を修飾することを示す。

君が代。　松が枝。　賤が伏屋。　月が瀨。　鬼が島。

所有とか所屬とかを示す「が」と謂はれたのは卽ちこの「が」である。

2、文の主語を示す。

花が咲く。
鳥が鳴く。
日が長い。
頭が痛い。

この「が」が文の主語を示す樣になつたのは比較的に新しく、中古語では、この「が」等の主語を現はす助詞をとる

ことなしに、主語となつたのである。

花咲く。

鳥鳴く。

日長し。

同じく主語を示すのであるが、次の例は、文章法上節の中にある主語を表はしたものである。

わが行く道は遠し。

君が讀めるは何の書ぞ。

風が吹く時は火の用心が肝要だ。

3、口語では一種の慣用的な用法として客語について「を」の代用をすることもある。これも極めて新しい用法である。

水が飲みたい。

本が欲しい。

芝居が見たい。

(二)の

「の」は「が」とよく似た性質及び用法を持つてゐる。即ち他の語を修飾限定すること、主語を示すことこれである。

1、體言についてその體言が他の體言を修飾限定することを示す。

花の色　松の緣　僕の本

浮草の身　花の都　(從來「の如き」と稱せられたもの)

まれの細道　つひの栖　忘れじの行末(副詞についたもの)

所屬の意味を示す「の」は、往々にしてその下の體言を省略し、或は省略された體言の代用として更に別個の「の」を加へることがある。

上のは君のにして、下のは僕のなり。

體言ノ代用

それは待りし時のなり。

代言ノ代用

これは僕の　のだ。

切手の古いのを集める。

2、主語を示す。

藪蔭道に鶯の鳴く。

しぐるゝ空に秋風の吹く。

雨の降る日は鬱陶しい。(節に用ひられた主語を示す)

私の出發した日は雨天でした。

3、動詞・形容詞・助動詞の連體形について體言の代用をすることがある。これは口語に限る。

飛行機の飛ぶのは頗る速い。（動詞についたもの）

疑はれるのが困る。（助動詞についたもの）

一番よいのを買ひます。（形容詞についたもの）

4、「文法上許容に關する事項」の九には次の樣に定めてある。

てにをはノ「ノ」ハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例　花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

「現行普通文法改定案調査報告書」ではその理由を次の如く說明してをる。

中古の物語中、此格の稀なるが爲めに、從來の文法家の禁ずるところなれど、中古以上の固有の國文、及び之を模倣せる以後のものにこそ、其例極めて少なけれ、現行普通文の一大源流たる漢文訓點には（古くは之を讀まぬ例ながら、尙ほ夙く之を訓みたるもあり）往々其例ありて、これより變化せる公用文に於ては、既に其常格となれり。それより德川時代を經て、現行普通文に及ぼして、益々汎く習用せらるゝごとき、決して他の諸格に讓らず。今中古の物語、漢文訓點、及び公用文體のものより、其一二を摘擧すれば、

立範不レ刪之典（三代格序）

何其未レ畏之甚矣（三代格十二）

山しなでらの別當になりてよろこび申すの日（春曙抄一）

一日乍レ抑レ別涙ニ罷出御所ニ之後、不審彌多、（保元物語三）

是皆馴ル京都ニ之輩也（東鑑三）

の如く、此他の用例枚擧すべからず。蓋し此のは元と漢文の之字の直譯より出でたるものゝ如く、純粹の和文には甚だ稀にして、多くは之れ無くとも事足る場合少なからず。然れども、前段云ふが如く、習用既に久しくして、今日に至りては、此有無の二格、自各別の意義を爲せること、猶ほ漢文の之字の有無により。上句を重くするこ輕くするとの差異あるが如し。而して、其輕重は「春日」と「春の日」、「冷水」と「冷き水」などに於けるが如く、其差甚だ大ならずして、之を區別するは、格別の必要なきこと、漢文にては、春日冷水にて二者を兼ねるにても知るべし。とにかく、既に二者に輕重の意あることを人々の承認する以上は、强て斥くまじきは、猶堅木と堅き木、白木綿と白い木綿の互に偏廢すべからざるが如し。是れ本項の如き規定の必要ある所以なり。（五九頁——六一頁）

5、同じ樣な趣を現はす場合に用ひられる。これも口語に限る樣である。

暑いの暑くないのつて話にならない。

宗教だの哲學だのむつかしい事ばかり論じてゐる。

何の彼のと理窟一點張だ。

（三）に

「に」は體言にも用言にもつき、種々の用法を持つて居るのであるが、上の語を補格に立たしめるか、副格に立たしめるかその孰れかゞ主なる用法である。

子父に似る。
水湯になる。
露を玉にぬく。
血になくほとゝぎす。
形狀狐に近し。
AはBに等し。
偏に風の前の塵に同じ。
掏摸に財布をすられる。
途中で雨に降られた。
荷物を牛馬に引かしむ。
妹に手紙を出させる。
花に舞ひ月に歌ふ。
故鄕に歸る。

陣頭に立つ。
明朝六時に出發する。
朝に道を聞けば夕に死すとも可なり。
影が水に映る。
鳩に豆をやる。
魚を釣りに行く。
若菜を摘みに行く。
月に叢雲花に風。
鬼に金棒。
泣き面に蜂。
重荷に小附。
煙草にマツチ、新聞に雜誌。
牡丹に唐獅子、竹に虎。
雨は降りに降る。
夜たゞ明けに明く。
聞きに聞き、語りに語る。

言ふに言はれぬ。
泣くに泣かれぬ。
行くに行かれぬ。
稀に遇ふ。
明瞭に答へた。
思ひ思ひに出かけたり。
とりどりに面白し。

文法家はこれ等に一々その用法の意義を分類して說明を加へてゐる。併しその大部分は前述の二用法であると思ふ。山田孝雄氏は「日本文法論」に於て

これも亦目標を示す。然れどもその意義は靜的なり。この故に動詞にも形容詞にも用ゐらるゝなり、これを靜的目標を示すものと稱す。

と定義を下して、次の多くの意義用法を擧げてをられる。

(一)動詞に對して動作作用の歸著出自の標的たるものを示す。
(二)一切の靜定性作用をあらはす用言に對して地點を示すこと自己移動作用の「を」に於けるが如し。但、「を」は移動的なるに「に」は其の作用がそこを目的とし、歸著點とする差あり。
(三)形容詞に對しての地位地點を示す。

(四)動作作用の時間內に存在することをあらはす。
(五)間接作用中の受身、干與の標的を示す。
(六)甲に乙が加はる如き場合には其の添加の標的たる原在體を示す。
(七)變換性作用をあらはす動詞に對して其の變換せる資格をあらはすにも用ゐらる。
(八)斷定の客者を示す。
(九)情態副詞に附屬してその修飾語的用法を確定す。
(一〇)動詞に附屬して動詞の修飾語たるものを示す場合あり。この時は連用形に附屬す。かゝる際には多くは動詞を重ねて意義を強むる意あり。

(四)を

1、動作の目的を示す。即ち他動詞の客語を示す時に使はれる。

中原に鹿を逐ふ。
青雲の志を抱く。

この場合には時として「を」を省略することがある。

奥山に紅葉ふみわけなく鹿の聲聞くときぞ秋は悲しき

右の「紅葉」と「聲」との下には「を」が省略されてゐるのである。

2、自動詞の上に「を」を伴ふ名詞の來ることもある。この場合には動作の行はれる場所、或はその動作の起る點を示すのである。つまり自動詞の表はす動作の標準を示すのである。

男子志を立てゝ鄕關を出づ。
故國を去る。
路を行く。
川を下る。
門を過ぐ。

3、古來「に」に通ふ「を」と稱せられたものがある。

大坂に遇ふや少女を路問へば（仁德紀）
たらちねの母を別れて（萬葉集二十）
逢阪にて人を別れける時（古今集）
志賀の山にて女を逢へりける（同）
久しう住みける家を住まじとて外へ移るに（貫之集）

（「廣日本文典」一七一頁參照）

しかしこれ等はいづれもよく考へてみると、みな動的目標を示してをるもので、「に」の樣に靜的目標を示してをるのではない。從つて「に」に通ふ「を」といふのは妥當ないひ方ではない。

4、「を」は古くは感動の意味を表はす語として用ひられたことが多かつた。次の「を」はみなその例である。

八重垣つくるその八重垣を。（古事記）
あなにやしえをとこをあなにやしえをとめを（古事記）
生るればつひにも死ぬるものなればこの世なるまは樂しくをあらな（萬葉集）
君があたりみつゝををらん生駒山雲なかくしそ雨は降るとも（伊勢物語）
いかでなほすこしおぼめかしくひがごと見付てをやまんと（枕草子）

（五）と

1、二つ以上の物事を並列列擧する場合

月と花とを愛す。
春と秋といづれか好き。

古い例では「と」は並列される體言の各々の下につけて省略しなかつたものであるが、漸次之を省く用例を生じて、今日では誤解さへなければ省いてもよい事になつてゐる。「文法上許容に關する事項」の十三には次の如く定められてゐる。

語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例　月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ

例の「現行普通文法改訂案調査報告」にはこの理由につき次の説明がある。

此格につきては「廣日本文典」に

與の意のとは幾處にても加ふるを則とす。然るに、二處以上なるを、常に略することあるは非なり。例へば『塩酸と硫酸の塩類を注ぐ』など記すときは、『塩酸と硫酸の塩類とを注ぐ』の意ともなり、「塩酸の塩類と硫酸の塩類とを注ぐ」の意ともなる。『甲と乙丙の差の積』なども非なり、『甲と乙丙との差の積』とかすべし。然らざれば大なる過誤生をすべし。『鈴木と井上の父を招く』などいふ文にては、双方の父を招く意か、一は子にして一は父なるか判然せず、必ず今一處とを加ふべし。『月曜及大祭日の翌日休刊』なども『月曜日と大祭日の翌日と休刊』とせねば、火曜日の休刊とも解せらるべし。

とありて、實に國文中、中古より足利の季世に至るまでには、最後のとを省ける例絶えて無く、唯歌もしくは對偶の事物を列擧せしものに一二見えたるのみ。

君とわれ妹せの山も秋くれば色かはりぬる物にてありける　（後撰集）

君と我猶白糸のいかにして憂節なくて絶えむとぞ思ふ　（蜻蛉日記）

月と日月と星日と星朝と夕　（漢和法式）

なりとなり、なれとなれ、なるとなる、なり、なる、なれ、たとるに尋云々　（連歌新式）

されども德川時代を經て今日に至り、最後のとを省くを以て殆ど通例の事となりたれど、實際に害あること極めて稀なりとす。故に本項の如く制限を加へて之を用ゐば、對偶のものを列擧する場合など、却て益すること多かるべし。（六二頁――六三頁）

2、他と共同して動作するを表はす場合。

子、母と眠る。

聖人は世と移る。

膝と談合。

これを前の並列の「と」と混同しない様にする注意が必要である。並列は對等の關係であるが、共同は主從の關係である。

（余と君とは對等關係である。＝並列）

（余と君と行かん。（余と君とは主從關係である。＝共同）

（頼朝、範頼と義經とを討つ。（範頼と義經とは對等關係）
（頼朝、範頼と義經を討つ。（頼朝と範頼と主從關係）

同等
甲、乙と丙とに逢ふ。
主語
甲、乙と丙に逢ふ。

文部省では口語の「と」は下につけないのを標準的の用ひ方としてゐるらしい。

本と鉛筆を買ひます。

事物を並列して大體をいふときには「や」を用ひる事がある。

たんぽぽや菫をつみにゆく。

「やら」も使ふ。

軍艦やら汽船やらがうかんでゐる。

「だの」も使ふ。

馬車だの人力車だの澤山ある。

3、指定を表はす場合。

氷水となる。

秀吉關白となる。

股肱とたのむ臣。

忘れては夢かとぞ思ふ。

敵押し寄せ來ると見ゆ。

陸奥といふ巨艦。

之を大化の改新といふ。

「敵艦見ゆ」との信號あり。

「と」が用言に連る時にはその用言のあらはす意味の完結したところを受けるのが正しいのである。若しそれが連體形で「と」に連つてゐる場合があつたなら、それは餘情をのこすために下を省略したものであつたのである。所が、鎌倉以後になると省略の如何にかゝはらず、連體形から「と」に連續するやうになつて、今日では「文法上許容に關する事項」の十二に次の樣に定められるに至つた。

てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　月出ヅルト見エテ

嘲弄セラルルト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

「現行普通文法改定案調査報告」には次の如く説明してある。

天爾乎波ノとニテ、上ノ句、又ハ文ヲ指ス場合ニハ、必ズシモ終止形ヲ受クルヲ要セズ。サ行變格、ラ行變格ノ動詞、形容詞及ビ助動詞ノず、じ、まじ、べし、なり、たり等ノ外ハ、總テ其句末ノ活用語ヲ連體形トスルヲ通則ト定ム。

第一例

こゝに最怪しき事こそあれ」といへば。

惡しき事とや思ひけん」といへば。

第二例

鷄の聲に催されて」とかき云々。

鷄の聲は孟嘗君がそれにや」ときこえ云々。

第三例

其利益は、實に尠少ならず」と思ふ。

敵軍は、此次の役にも、亦必ず勝つこと能はじ」と思はん。

立腹などする事の、其厭はしく思はるればなり」といへば。

彼我會戰の機、既に熟したり」と聞けり。

三千の客、僅に去れり」といふは。

尙更に、三十萬圓を贈與すべし」と聲言す。

第四例

終に、其決議を見るに至らざりし」といふ。

新たに、方針を立つる」とは信ぜられず。

よしや、世人の疑惑をして、益々深からしむる」といへども。

論語は、孔子の弟子の編める」と思へば。

近日、再び國債を起さるゝ」と聞く。

彼は、逸早くも、我が此手段に由りて、機先を制せんとする」と知りて。

數多の星霜を歷る」とは聞けど。

理由、此用格ニツキテハ、玉霰ニ

すべて、といふ詞の上の受け、定まれる格あることなるを、今の人のつゞけざまはいとみだりなり。定まれる格とは、たとへば、「花さきぬと」といひて「咲ぬると」とはいはず「郭公聞つと」といひて「聞つると」とはいはず中略これらも、古人は自らよく辨へて、をさ〳〵誤ること無りしを、近き世の人は、此別を知らず亂りにつゞくるなり。歌のみにもあらず、文にも道の記などに「某山をこゆるとて」など誰も書く、是れもこゆとてゞいふ格にこそあれ。

トアリテ、之ヲ其儘ニ解スルトキハ、第四例ハ勿論、第一例ノ係結ヨリ成レル句モ、第二例ノ其末ヲ省ケルモノモ、トモニ引キクルメテ違格ナリトスル外ナシ。サレド第一例ノ事ハ、玉の緒ニ其說アリ、第二例

ハ、其例ヲ推シテ知ラルレバカクテモアル可ケレド、第四例ニツキテ何トモ言ハレズ。コハ初心ノ爲メニ概略ヲ說カレタルモノトハイヘ、少シク龕キニ過ギタルガ如シ。サレバ之ガ爲メニ誤解ヲ來シ、上句ヲ指スとハ、必ズ終止形ニノミ附クベキモノニシテ、連體形ニ附クモノハ、悉ク失格ナリトスルモノアルニ至レリ。コノ事ニツキテハ、義門ノ「活語雜話」、「玉緒繰分」等ニモ略、論ジタルガ如ク、是等ハ連體形ノ下ニアルベキモノ」コト等ヲ省略シテ、其意ヲ言ヒ殘セルニテ、其實例「竹取」、「空穗」、「源氏」以下ニ極メテ多ク、「萬葉集」ニモ「沖つ藻の靡きし妹は紅葉のすぎて往にし」と玉章の使のいへば」ナドアリ。「玉霰」を墨守シテ之ヲ改レバ、却テ文意ヲ損ズルモノ少カラズ。今、中古物語中ヨリ著明ナル用例ヲ拔キ出デヽ、之ヲ證スルコト左ノ如シ。

鳥の子うまん間につなをつりあけさせてふとこやすかひをとらせ給はんよかるべき」とまうす　竹取物語下（契沖校本不忍文庫本）

このをさなきものはこはく侍るものにてたいめんすまじき」とまうす　同（同）

されどおのが心ならずまかりなんとする」といひて　同（同）

打なきて書ことは此國に生れぬる」とならばたげかせ給はぬほどまで　同（同）

まもる人々のいふかはかりしてまもる所にかはり一だにあらばまづいころして外にさらさんと思ひ侍る」といふ　同（同）

山のともからこぞりてゐてまうできつる」との給ふ時に　宇津穗物語俊蔭（内閣古鈔本細井本）

なにせんにかくはするぞといへばあそびにせんする」といふ　同（同）

ものゝふのこれるはおほやけのひとのとらへにくる」とおもひて　同（同）

さるけだものゝなかにひとりいりてとまりぬる」とはみえたてまつる　同（同）

おもしろきものゝねのきこゆればたづねまいりきつる」とて　同（同）

またかゝることも侍りけるとなく〳〵いへば　同（同）

むかしの心ざしはうしなはぬものから心うからましよをおほしはなれにけるとこの御すみか　同（同）

そもおやにしたがひし也いまは孝するとおもひて　同（同）

よしなくもてはやされてきよげにたぐひなくみゆるを天女をゐておろしたる」とおどろかれたまふ　同（同）

たま〳〵此道にまいりいりければかうだにわきまへられ侍る」といふ　枕草子（春曙抄、慶長活字本、萬載抄）

ながさせ給ひけるがかへりまいりたる」とて　同（同）

ちやうもんする」とたちさはぎぬかつくほどにも　同二（同）

つぢありくわらはべのほど〳〵につけてはいみじきわざしたる」とつゐにたもとをまもり　同三（同）

士はおのれをしれる人のためにしぬこいひたる」といひあはせつゝ　同（同）

いろにいでゝはえいはずある」とたかやかにうちいひうめきたるも　同（同）

いと久しくたゝく音もせねばねいりにける」とや思ふらん　同四（同）

人のもとに、さるものつゝみておくる人やはある、いさゝかもこゝろえざりける」とみるがにくければ　同(同)

これいみじうわろき事いひたる」と、よろづの人にくむなることとて　同七(同)

おほぢいきけるをさなりける」こよろこびたれば　同八(同)

かの君にかたり聞えければ、うれしくいひたる」と悅び給ひし　同(同)

いみじうかくさせ給ひし事なり、ゆめ〳〵、丸がきこえたる」となくのちにもとあれば　同十(同)

この思ひおきつるすぐせたがはゞ、うみに入りねとつねにゆゐどんしおきて侍るなる」と聞ゆれば　源氏若紫(湖月抄)

なにがし、この寺にこもり侍る」とはしろしめしながら　同(同)

木草の花ども、色〳〵にちりまじり、にしきをしける」とみゆるに　同(同)

まことにや花のあたりは立うき」とかすむる空のけしきをも見ん　同(同)

うへこそ、この寺にありしげんじの君こそおはしたなれ、などみ給はぬ」この給ふ　同(同)

御手よりもわかびてならひ給へればいとかたはらいたく侍る」と聞ゆ　同(同)

今はなき人となり給にける」とおほすかいみじきに　同(同)

宮のおむかへにおはしたる」とねをびれておほしたり　同(同)

はつかしく、人にかうおいほけものと見おとされにける」とは思ひ侍れど　(紫式部日記上)

中古文ニ於テモ右ノ如ク、「空穗」ハ俊蔭ノ一卷、「源氏」ハ若紫ノ一卷ノミニ在リテモ、上ニ擧グルガ如キ數例ヲ見出スコトヲ得タリ。サレバ、他ノ諸卷ハ言フニ及バズ、是レヨリ以下ノ日記、物語ヲ通ジテ、搜ラバ其夥シキハ推シテ知ルベシ。但シ中古ノ諸例ハ、皆前ニ云フガ如ク、連體形ノ下ニ、もの」なり」ことよ」ナドノ省カレタルモノヽミナリト雖モ、鎌倉以後ヨリ今日ニ至ルマデノモノニハ、省否ニ拘ハラズ、連體形ヲ受クルモノ漸ク多ク、

あさましき餓鬼の世をうくる」といへども　(寶物集上)

御遊も、未だをはらざるさきに、御前をまかり出でらるゝ」とて　(平家物語)

アノ殿ノ女房ハイタダキニ毛一ツモナキ」トコソ承ハレト云　(沙石集三)

人ノ道理ヲ申事有レバ涙ヲナガシ感ジ申サレケル」トカヤ　(沙石集三)

心すどさもかぎりなきに、みちのくたびれとりそへて、しづかに念佛する」とおもふ程に(本願鈔上)

船史相ト申セシ人、コシキノ中ニヲキ、ムシテ物ニ移シ、讀ミタリシ」トゾ　(神明鏡)

落葉の衣は、かさぬる」といへども(今川貞世落書露顯)

此打上ゲ後、日露戰爭の活動寫眞を興行する」との事(三十八年二月二十日、時事新報)

來る三月六日試驗の上入學せしむ」とぞ　(三十八年二月十九日日々新聞)

百二十五列車に滿載したる貨物を一船に呑了する」こはミネソタ號の腹も亦大なるかな(同二月十八日中央新聞)

同時に食堂列車に連結せしむる」となり(同二月十七日萬朝報)

當初に中止の必要なかりし」とせば（同二月十九日讀賣新聞）

ノ如キモノ少カラズ、サレドモ、サ行變格ず、ラ行變格動詞ノ語尾リ、形容詞ノ語尾ノし、助動詞ノず

じ　なり　たり　べし　ノ如キハ、今日ニ於テモ、（古來連體形ヲ受クル例ナキニアラズト雖モ）尚終止形ヲ以

テ受クルヲ常トナセルコト第三例ニ示スガ如シ。是レ即チ、本項ノ如キ規定ヲ要スル所以ナリ。

4「に」と「と」の異同關係を研究してみる事は一の問題である。例へば次の如き兩例の區別を考究してみるのである。

(1) 有りと有る。　生きとし生ける。
　降りに降る。　直走りに走る。

(2) 水、湯となる。　雀、蛤となる。
　水、湯になる。　夏、秋になる。

(3) 人生を夢と見る。
　友達を夢に見る。

(4) 人と語る。
　人に語る。

(5) 月と花。
　月に叢雲。

(6) 十時と五分。
　十時に五分。

(7) 花雪と散る。
　花風に散る。

（六）へ

1、動作の進行する目標を示す。

神戸へ行く。

アメリカへ行く。

北へ走る。

前へ進む。

2、動作の歸着する地位を示す。これは口語に限られてゐる。

トランクへ詰める。

屋根へ上げる。

部屋の隅へ寄せる。

3、「に」と「へ」との區別。

(1)この兩者は口語では殆ど區別なしに用ゐられてゐる。しかし文語では「へ」は右に述べた樣に進行の目標を示すのであるが「に」は同じく右に述べた樣に歸着する地位を示すので、これが區別の標準になる。

神戸へ行く。

神戸に行く。

この兩者の心持の差を考へてみると、前者は神戸の方向をさして行くのであつて、同じく神戸へ行きはしても、そこに歸着するか否かは問題にしないのであるが、後者は同じく神戸へ行くのであるが、必らずそこで歸着することを考へてゐるのである。

(2)又次の例を考へてみる。

深草の里に住み侍りて京へまうで來とて。　（古今集）

京にありわびてあづまへゆきけるに。　（勢語）

三河國八橋といふ所に至りぬ。　（同）

僧正遍昭がもとに奈良へまかりける時。　（古今集）

前者は方向を漠然と指してゐる。後者はある特定の場所を狹く限りて指示してゐる。今日ではこの區別は嚴重に行はれてゐない。多く混同して使はれてゐる。「へ」は元來「方」の義で「行方（ゆくへ）」「まへ」「しりへ」「いにしへ」などいふ語に表はれゐる。從つて「誰にやらう」といふべきを「誰へやらう」等といひ、「母についてゆく」を「母へついてゆく」等いふのは避くべき誤りであるといはねばならぬ。「又前へ進む」「左へ向ふ」を「前に進む」「左に向ふ」などいふは誤である。同樣に「山に登る」「舟に乘る」を「山へ登る」「舟へ乘る」といふのはよろしくない。然し「に」を方向に用ゐた例は中古にもあるのである。

東の方に行きて住む所求むとて。　（伊勢物語）

奥陸の國にすゞろに行きいたりにけり。　（同）

從つて「へ」は方向に限り、「に」は方向にも地位にも用ひられるといふべきやうである。（「廣日本文典」一七七頁――一七八頁參照）

(七)より

1、動作の起發する點を示す。

朝五時より出發す。（時間）

東京驛より發車す。（空間）

この場合に口語では「から」を用ひる。

2、中古時代ではこの「より」によつて動作の經由する場所・地位を示すことが行はれた。

あたりよりだに歩きそ　（竹取物語）

みなそこの月の上より漕ぐ舟の棹にさはるは桂なるべし　（土佐日記）

沖より舟どものうたひのゝしりて漕ぎ行く　（源氏物語）

これを古くは「を」に通ふ「に」と稱してゐたのである。しかし「を」は或る場所を範圍としてその範圍内で動作の行はれてゐる事を示すが、「より」は動作が或場所を通つて更に他へ行くことを示すので、嚴密に考へれば差異があるのである。（「日本文法論」五七三頁――五七四頁參照）

3、「によりて」の意なる動作の原由を示す。

酒は米より作る。

酸素を空氣より取る。

一旦の失敗より最後の成功を得たり。

これはよく考へれば1の起發する點を示してゐるものゝ中に入れても考へられるのである。

4、前の「によりて」が轉じたと思はれる用法が古くはある。即ち今日の口語の「で」に當る。

人づまの馬より行くに、おのづまがかちよりゆけば（萬葉集）

神の社に、舟よりゆく人（惠慶集）

「にて」の意味の「より」「から」については金澤庄三郎氏の「日本文法新論」にも說がある。

5、比較の標準を示す。

山より高く海より深し。

春より秋を好む。

紅葉二月の花よりも紅なり。

この比較を表はす「より」と「に」とを比較してみることも一つの問題である。〔禽獸より劣る〕〔禽獸に劣る〕の相違。

なほこの「より」と「よ」「ゆ」「より」との關係に就てはいろ〳〵の異同問題がある。詳しくは吉澤義則博士の著書「國語國文の研究」中の論文「萬葉集に用ゐられたる助詞ユリ、ユ、ヨリ、ヨについて」（一六五頁――一八〇頁）を參照するがよい。

この「より」は次に述べる「から」と同じ意味でその使用の沿革を尋ねてみると、「から」は上古より用ひられ、中古の頃は「より」が多く用ひられ、更に下つて室町より德川時代へかけては再び「から」が用ひられるに至つたのである。今日我々は「より」を文語、「から」を口語と考へてゐるけれども、「から」は「より」よりもその來るところは古いのである。

（八）から

1、「より」と同樣動作の起發する點を示す。

生花の稽古には明日から參ります。（時間的）

地震は丹澤山から起りました。（空間的）

ほと〻ぎす啼きて過ぎにし岡びから、秋風吹きぬよしもあらなくに（萬葉集十七）

こぞから、山どもりして侍るなり。（蜻蛉日記）

2、動作の原由を示すことも「より」に同じい。

酒は米から造る。
香水を花から取る。

3、この原由を示したのが轉じて理由を示すにも用ひられるに至つた。（これを接尾語と說いてゐる人もある。）

吹くからに秋の草木のしほるればうべ山風をあらしといふらむ　（古今集）
然るからさぞとも打ち語らはゞ　（徒然草）

今日の口語に於て關東では「だから」といふ語を用ひる。上方では「よつて」「さかい」を使ふ。即ち

そうぢやよつて。
そやよつて。
そやさかい。

等と言ふ。

4、この「から」が「もの」といふ語に續いて「ものから」となる時には全くちがつた意味になるのである。即ち「ものながら」「にはあれど」「なれども」の意味に使はれるのである。

こめやとは思ふものから蜩の鳴く夕暮は立ち待たれつゝ　（古今集）

どうしてかういふ意味になつたかに就いては更に研究の餘地がある。

（九）まで

「より」とは反對に、動作の終る點を示す語である。

伊太利まで旅行せむ。
夜の十時まで待てり。
鳴かぬなら鳴くまで待たうほとゝぎす。
起きるまで待つてゐよう。

山田孝雄氏の說ではこの「まで」を範圍の及ぶ處を示す副助詞としてある。從來は「より」と相對する用法があるので格助詞の類に入れたけれども、決して「より」とは同類でなくて副助詞であると論じて次の理由があげてある。即ち・格助詞と重ることがあり、又主格・補格に附屬する性があるからであるといふのである。

夢がたりとまで聞く。（格助詞の下につく）
うすくこき野べの綠のわか草に跡まで見ゆる雪の村消。（主格につく）
宰相までなり給ふ。（補格の下につく）

かう考へてみると從來「ばかり」に通ふ「まで」と言つてゐたものもこの副助詞とするとうまく說けるやうである。

花と見るまで雪はふりける。
物や思ふと人の問ふまで。

けれども「より」が起發を表はすに對して、これが終着の點を示すといふ點は如何に說明されるであらうか、

こゝに多少の問題があると思ふので、暫らく格助詞に入れて置いた。

(一〇)で

文語の「にて」から來たもので口語にのみ使はれる助詞である。

1、動作の行はれる場所を示す。

伏見鳥羽で戰つた。

大阪で生れた。

2、動作の行はれる時限を示す。

一月で完成する。

後で受取らう。

3、動作の所由を示す。

ペンで認める。

試驗で忙がしい。

雨で濡れた。

三、副助詞

副助詞は主として用言の上にかゝつてその意義(即ち屬性)を修飾限定するものである。前述の格助詞は體言又は用言の間の關係を資格の上から示して、一つの助詞の示すところは他の助詞で代用することが出來ないのであるが、副助詞はその資格の如何にはかゝはらないで、意義を修飾限定するのである。且つ副助詞は格助詞を助けるばかりでなく、その代理をすることもある。即ち助動詞を助ける場合には、主語・客語・補語及び修飾語を示す格助詞の下について之を助けるのが普通であるが、時としてはその上について助ける事もある。格助詞の上にあるものはその體言の用言に對する意義上の關係のみを示し、格助詞の下にあるものは體言の用言に對する資格上の意義を修飾する。「水のみを飲む」といへば、飲んだものが水に限られることを示し、「水をのみ飲む」といふ時は、水を飲むだけであつて外の動作はしないことを示すのである。微妙な區別が上下によつて表はされてゐることに注意を要する。又格助詞の代理をする時には主語・客語・補語・修飾語に直接つくのである。

雨さへ降り出でたり。(主語の下)

病氣のため散歩さへ中止す。(客語の下)

將軍、乞食とさへなる。(補語の下)

三つだけ買ふ。(修飾語の下)

世の中はねてもさめても夢ならば忘れぬさへを忘るとやせむ(格助詞「を」の上)

積雪三尺ぐらゐに達した。(格助詞「に」の上)

今日のみの命(格助詞「の」の上)

副助詞がその意味に於て大體屬性の副詞と同樣であることは、西洋語に之を譯する時は必ず副詞を以てしなければならないことで分るとは山田氏の說である。

副助詞と次にのべる係助詞とは似た所があるのであるが、係助詞は用言が述語となる方法を修飾限定するのであるが、副助詞は用言の意義を修飾限定するのであるから大に違ふのである。

又、副助詞中のあるものは、ある語句の下に附いて、その語句と結びついて一つの副詞と同じ意義と用法とを持つことがある。

三月ばかりかゝる。
取るだけ使うてしまふ。
死ぬくらゐ撲られた。

(一)だに

「だに」はその擧げ示した點を主として他を顧慮しない意味を持つてゐる。即ち全體に對する一部分、重いものに對する輕いもの、程度の高いものに對して程度の低いものを指示するのである。而して指示したものに依つて指示しないものを言外に悟らしめようとするのである。かういふ意味の下に、下にある用言の意義を修飾するつとめをその上の語に與へるのである。この語は口語に用ひない。「だに」をその用ひられ方が假定であるか確定であるかによつて分けてみることが出來る。

1、假定の文に用ひられた「だに」。

命だに心にかなふものならば何か別の悲しからまし　(古今集)
(何はともあれ命だけでも心のまゝになるものならば……)

散りぬとも香をだにのこせ梅の花戀しき時の思ひ出にせむ　(古今集)
(花は散つて了つてもせめて香だけなりと殘しておいて呉れ……)

2、確定の文に用ひられた「だに」。

かしかまし野もせにすだく蟲の音よ我だに物をいはでこそ思へ　(新撰朗詠集)
(自分でさへ、自分でもの意)

御山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜摘みけり　(古今集)
(松の雪すら、松の雪さへの意)

富士谷成章の「脚結抄」ではこの「だに」の二つの區別を

假定――「あらますだに」(豫定するだに)
確定――「くらぶるだに」(比較するだに)

と說いて居る。

「すら」を今日の口語に譯するならば、「だけでも」「でも」「なりと」「さへ」「だけなりと」等を宛てればよからう。この中「なりと」「だけなりと」は假定の場合に使はれ、「さへ」は確定に使はれる。

この「だに」に「も」が附いて「だにも」となり、更に「に」が省略されて「だも」として使はれる事がある。この時には多少詠歎的の意味を表はすのである。

なく子なす慕ひ來まして、いき陀爾母(だにも)いまだやすめず　（萬葉集）

夢にだもあふと見るこそ嬉しけれ殘りの頼み少なけれども　（和泉式部集）

(二)すら

「すら」は一事をあげて例として示し他を類推せしめる意で、前述の「だに」の確定文に用ひられた場合に似てゐる。「假定」の場合には「だに」を用ひない。「すら」も口語には用ひない。或人はこれを「だに」と比較して

「だに」――重いものを擧げて輕いものを推しはからせる語。
「すら」――輕いものを擧げて重いものを推しはからせる語。

の樣に說く人があるが、又人に依つてその輕重擧推を全く逆に說く人もあるので、必ずしもその意味に抱泥する必要は無い。

こと問はぬ木すら妹と背ありとふをたゞひとり子にあるが悲しき　（萬葉集）

鬼すらも都の中と蓑かさをぬぎてやとよひ人に見ゆらん　（躬恒集）

口語にあてれば大體「でもやはり」「でさへも」位の意味にあたる。「すら」は「だに」よりも他のものと比較する意味が強い樣である。古く「だに」「すら」は、次の「さへ」と共に本來の意義に於て區別を保つて使用されたものに相違ないが、中古時代に於て既に「すら」は「だに」の中に含まれる事になつたらしい。「だに」と「すら」の區別に就いても議論はあるが一般的の法則をあげることは困難である。唯「だに」の使用範圍が廣く、「すら」の使用範圍が狹い事だけはいへる。即ち「すら」の用ひられる所に「だに」を用ひてもいゝが、「だに」の用ひられる所に「すら」は必ずしも用ひられないのである。

(三)さへ

これは「だに」「すら」とは全く意味が異つて、一つの事物の上に更に他の事物を添加する意味を表はすのである。語源は「そへ」の轉であらうと言ふ。口語に譯すれば「までも」「おまけに」「までが」等に當る。

雨の降るに風さへ吹き出でぬ。

うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや　（古今集）

月をだにあかず思ひてねぬものを杜鵑さへ鳴きしきるかな　（古今六帖）

兄が病氣だのに弟さへ惡くなりました。

文語の「さへ」はこの一つの用法に限られてゐるが、口語では文語の「さへ」の意味の外に、更に「だに」「すら」と同じに用ひられる事がある。

文語で「天氣だによければ」といふべきを「天氣さへよかつたら」と口語で言へる。

文語で「禽獸すら然り、況んや人間に於ておや。」といふべきを口語では「鳥や獸でさへさうである……」と言へる。

山田氏はこの口語の「さへ」を副助詞とみないで、文語の「さへ」から出たのではあるが、係助詞として説いて居られる。しかしその區別(陳述に力を及ぼすといふ)ははつきりしないのではなからうかと思ふ。尤も係助詞としての特性として格助詞の下にのみついて決してその上に用ひられない。同樣副助詞の下にもついて決して上にはつかない。

あなたにさへ申上げませんか。

君だけさへ承知すればよいのだ。

「だに」「すら」「さへ」が重つて使用されてゐる例がある。

祈り來る風間と思ふをあやなくに鷗さへ　だに波と見ゆらん　(土佐日記)

物言はぬ四方のけだものすら　だにもあはれなる哉や親の子を思ふ　(金槐集)

こたみだに　さへおりすば云く　(蜻蛉日記)

(四)のみ

物事が唯一つで二つない事を示す助詞である。

小倉の山は名のみなりけり。

著のみ著のまゝ。

人知れぬ大内山の山守は木隱れてのみ月を見る哉

見てのみや人に語らむ。

いづれも制限の意味である。即ち口語でいへば「だけ」と言ふに當るのである。

「のみ」は活用言の連體形に連るのがきまりである。

新らしき春さへ近くなりゆけば降り(連用形)のみまさる年の雪かな　(拾遺集)

これは「降りまさる」といふ熟語の中へ「のみ」が割つて入つたのである。從つて「降り」は「まさる」といふ用言に連るための連用形が出てゐるのであつて、通例は次の通りである。

かくてありなば思ひの亂るゝ(連體形)のみなり。

(五)ばかり

1、「ばかり」は「はかる」といふ動詞が助詞となつたもので、程度を表はす。即ち口語でいへば「ほど」に當る意味を表はすのである。

今日ばかりよき日はあらじ。

梅の花餘所ながら見ん我妹が咎(終止形)む　ばかりの香にもこそしめ　(後撰集)

有明のつれなく見えし別れより曉ばかり憂きものはなし　(古今集壬生忠岑)

「のみ」は前述の如く制限ばかり表はすのが本體であるが、「かくばかり」「さばかり」といふのと同じ意味で副詞になる時、「かくのみ」「さのみ」といふ。この場合は程度を表はしてゐるのである。

2、「ばかり」は程度より轉じて制限も表はす樣になつた。口語の「だけ」の意。

今日ばかりは雨も降らされ。

今年ばかりは墨染に咲け。

今來むと言ひし（連體形）ばかりに長月の有明の月を待ち出づる哉　（古今集、素性法師）

雲居にもかよふ心のおくれねばわかると人に見ゆ（終止）ばかりなり　（古今集、ふかやぶ）

「ばかり」が活用言に連る時にはその連體形に連るのが本體であるが、終止に連つたのもある。これは前者に比して古い連續法といふべきである。「源氏物語」には皆終止形に連續した例が多い。

3、「ばかり」は更に數量に關して大凡（おほよそ）の意味を表はす。

敵は凡そ百萬ばかりあり。

子の刻ばかりに。

十ばかりなる男の子。

4、口語の「ばかり」は文語の「のみ」の意味に用ひられる。

一日本ばかり讀んでゐた。これば御許しを願ひます。

この頃は雨ばかり降る。

5、又、分量の大約をいふ事は口語の「ばかり」も同樣である。

三日ばかり旅行に行つて來ました。

6、又

魚が五匹ばかりつれました。

もう出來上るばかりになつてゐます。

の如く物の殆どそれに近い狀態をも表はす。口語ではこれを、「ばつかり」「ばかし」「ばつかし」といふ。東京のかた言として「ばつち」といふのがあるが、これは「ぼつちり」といふ副詞（いさゝか、些少の意）が「ぼつち」となり、「ばつち」となつたのではないかと思ふ。

（六）だけ

これは口語にのみ用ひる副助詞で次の意味を表はす。

1、制限を表はす。

私だけ後に殘ります。

今年だけは海水浴に參りません。

見るだけ見て置かう。

2、分量又は程度を表はす。

十人だけ補欠を取る。

出來るだけの事は致します。

食ふだけ稼ぐ。

學者だけに理窟をいふ。

價の高いだけの事がある。

3、副助詞としての特質は次の例で分る。

山だけ見える。（主語の下につく）

妹だけ連れて行く。（目的語の下につく）

友達だけに話す。（格助詞の上につく）

友達にだけ話す。（格助詞の下につく）

ちよとだけ拜見します。（副詞の下につく）

（七）など

「など」は從來「ども」と同類として複數を示す接尾語としたのもあつたが、山田氏はこれを副助詞の中へ入れて說いてをられる。「など」はいつも例示する意味の語で複數ではない。その證據には次の樣に「ども」と重る例があると言つてあげてある。

飯酒菓物ども**など**

いにしへゆくさきの事どもなどいひて（伊勢物語）

例をあげて示すといふ事が他に類似するものがあるといふ事をも意味するので複數と誤られたのであると說いてゐる。さらに何處までも例示であつて複數でないといふ別の證據として次の二例をあげて

おのれなどはさる事なし。

おのれどもはさる事なし。

前例が傲慢不遜の感を與へるのは、自己を例として示すからであり、後例が謹嚴謙讓の意味を與へるのは、自己を多數の中に加へたからであると說明してゐる。

次に「など」が接尾語でない證としては

京になど迎へたまひて後（源氏、蜻蛉）

京へなど迎へ參らせたまへらむ後（源氏、浮舟）

の二例をあげ、これ等は助詞「へ」及び「に」の下にある。かゝる用法に立てるものを以て接尾語とすることはどうあつても出來ないと言つてゐる。

「など」が用言に接續する時には終止形をうける。

「など」は口語にも用ひる。

（八）やら

これは口語にのみ用ひる副助詞で、疑問、不定、推量、列擧などの場合に使ふ。これは中古語では「に」や「あら む」といふ形、即ち助詞「に」「や」に「あり」といふ動詞、及び「む」といふ助動詞の連續であつた。それが平安朝の末には「やらん」となつた。

されば、その別路の何とやらむ心にかゝりておぼえしが、かゝらむ事にこそ（吉野拾遺）

これが鎌倉期には「やらう」となり、漸次に變つて「やら」の形となつたものである。

本居宣長が、この「やらん」を「詞の玉緒」で、すべてやらんといふはいやしき辭にて、歌にも文にもふるくは見えず。今の世の人これをよき詞と思ふはひが心得也」といつてゐるのは、宣長の時代には新らしい言葉と思はれた故であらう。

何やら見える。（主格の下につく。）（不定の意味を見よ）

何やらが見える。（格助詞の上につく。）

何をやら貰つた。（格助詞の下につく。）

何やらを貰つた。（格助詞の上につく。）＞（客語の下につく）

誰やらの話（のの下につく。）

何やら彼やら分らぬ。（列擧の意味）

梅やら櫻やら一度に開いた。（列擧）

獣つきづきましたが悲しう御座るやら、逢ふが嬉しう御座るやらで、（狂言記「胸突」）

（九）ぐらゐ、くらゐ

口語に用ひる副助詞で、分量程度を表はす。

本くらゐ讀めぬか。（客語の下につく）

本くらゐが讀めぬか。（格助詞の上につく）

これだけあれば東京へぐらゐ行かれる。（格助詞の下につく）

それぐらゐの事が出來ぬか。（のの上につく）

暫くぐらゐ待ちます。（副詞の下につく）

四、係　助　詞

係助詞の「係」は、從來「係結（かゝりむすび）」と稱せられたその「係（かゝり）」である。元來係結といふのはこゝにいふ係助詞と、それに應ずる述語である用言の活用形との間にある一定の約束をいふのである。即ち、上に或る詞が來れば述語たる用言は終止形を用ひ、或はその上に他の詞が來れば述語たる用言は連體形を以て之に應じ、更に他の詞が來れば已然形を以て之を結ぶといふが如きものである。この係結に就いての研究に組織を與へたのは本居宣長であつて、その著「紐鏡」「詞の玉緒」にはその詳細なる研究が載つてゐる。而して宣長は係を次の三に分けてこれを三轉の變化と言つた。

一、は・も・徒の係

二、ぞ・の・や・何の係
三、こその係

大槻博士は「廣日本文典」に於て、之を左の三種に區別した。即ち

一、尋常の結法
二、ぞ・なむ・や・かの結法
三、こその結法

である。而して更に山田孝雄氏は、助詞の中でもこの係助詞とその他の助詞との比較から研究の端を發し、「從來の誤謬を照破したるのみならず、本居宣長翁の『詞の玉緒』の眞意を百年後の今日自らによりて始めて明かにせられた」とまで言つてゐる。つまり山田氏の研究は「詞の玉緒」の所論を論理的に新しく組織したものと言つてよいのである。從來やゝもすれば格助詞・副助詞とその區別を明かにし得なかつた係助詞の特性を明かにし、その區別を確然たらしめたのである。氏はこの係助詞の特質を次の數項としてゐる。

(一)係助詞は大體副助詞と用ひ樣に用ひられるが、副助詞が下の用言の意義を修飾するに反して、これはその陳述の力を支配するのである。「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」が係となつてこれに對する結の形が一定してゐるのは勿論のこと、宣長の言つた樣に「は」「も」に對して普通の終止形を以て結ぶのも亦係結なのである。かくいふのは、「は」「も」などの助詞が陳述の勢力に大なる關係を及ぼすからなのである。これが係助詞をして格助詞・副助詞と區別せしむる特性なのである。

(二)係助詞の大部分は又時として述語の下についてそれ〴〵の意義をあらはして終止し、結びとなる事がある。この特性は山田氏の創見に係るものだといふのである。即ち「や」「か」(疑問の意)が終止に用ひられるばかりでなく、「ぞ」「は」「も」(強意)も終止に用ひられる。「な」も同樣である。更に「なむ」(希望)「こそ」も亦古くは終止に用ひられたのである。

(三)係助詞が係として用ひられる時には、格助詞・副助詞の下にのみ附いて、それ等の上につく事は決してない。又時には係助詞が重つて用ひられる事がある。これ特質の第三である。

都へぞ行く。(格助詞「へ」の下につく。「都ぞへ行く」とは言はず。)
何をか詩といふ。(格助詞「を」の下につく。「何かを詩といふ」とは言はず。)
住の江の岸による波よるさへや夢のかよひ路人目よくらむ。(副助詞「さへ」の下につく。「やさへ」とは言はない。)
花もこそ散れ。(係助詞相互の重なる例)
嵐もぞ吹く。(同)

(四)係助詞は接續助詞「ば」の上に附いて、上の句と下の句との關係を緊結することがある。この時には下の句の述語に一つの勢力を及ぼしてゐるのである。この性質は格助詞にも副助詞にも全然ないので、これも係助詞の一つの特性である。(この時には「は」「も」は續かない。)

心あてに折らばや折らむ。(古今集)
なみなみの人ならばこそあらかにもひきかなぐらめ。(源氏物語)

これは係助詞が陳述の力に關係するからである。

以上の特性を持つてゐる係助詞に屬する助詞は、次の數語である。

「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」

「は」「も」「な」

「さへ」「でも」「しか」

(一)は

「は」はある事物をとりたてゝ指示し、從つて二つ以上の事物に差別のあることを表はす助詞である。いはゞ一種の排他的の意味があつて、その次に言ひ表はされる語によつて、上の事物を他の事物と引離して他と混亂せしめない樣にするのである。これが係となる時は述語は終止形を用ひる。

柳は綠、花は紅。(體言につき對稱的に列擧す。)

言ふは易く、行ふは難し。(用言につき對稱的にいふ。)

冬は來ぬ。(「冬來ぬ」と比較せよ。)

吾は行かず。(「君は行くとも」とつゞけて考へてみよ。)

今は無し。(「昔はあり」に比べよ。)

妻には死なれ子には捨てらる。

「は」は主語を示す體言につくのが本義の樣に思はれるけれども必ずしもさうではない。主語を示す格助詞「が」と並べて考へてみるとその特質の相違が分るであらう。

{價が高い。
{價は高い。

前者は單に價の高いといふだけの意味であるが、後者は「價は高いが物はいゝ」とか、「價は高いが物は惡い」とか特に價といふものをとりたてゝ指示する意味があるのである。勿論兩者とも主語を示しては居るが、その間には右の差別のあることを注意しなければならぬ。

「は」を用言の連體形に附屬せしめて結びに用ゐることがある。この時には上の陳述の意を强くする働をなす。人によつてはこれを感動を表はすのであるとか、或は餘情を添へるのであるとか言ふ人がある。

げに面白かりけるは。　罪惡が益々殖えるは。

今日女學生言葉として用ひられる「……わ」はこの「は」から來たもので、陳述に辨別の意を表はすより轉じて、一種の感歎的の添へ詞に變りつゝある。感動と辨別とはその意味が極めて近く判定し難いところもある。

この「は」が格助詞「を」の下に來る時には濁りて「ば」となる。

世をば恨みじ。

酒をば飲まず。

この時には上の「世」「酒」といふ語を主語と誤り易い。然し、恨むもの、飲むものを考へる時には、別に主語が現は

れて來るのである。從つて「世を」「酒を」は客語である。

知らずはあるべからず。

これを音便で延濁にして

知らずんばあるべからず。

といふが、これの類推で

知らずば敎へん。

の「ば」も「は」の濁つたものだと思へば誤りである。即ち係助詞の「は」の濁つた「ば」と次に言ふ接續助詞の「ば」とを混同してはならない。

本を忘れければ甚しく困りたり。

これは接續助詞で條件を示すものである。

「願はくは」「若しくは」「恐らくは」の「は」を濁つて「願はくば」「若しくば」「恐らくば」といふのは正しくない。鎌倉時代では「若し叶はざる時は」を「若し叶はざる時んば」といひ、「今日は」を「今日た」、「久方のあめといふは」を「久方のあめといつば」と言つたが、これも正しい使ひ方ではない。

(二)も

前の「は」が多くの事物の中から或る事物をとりたてゝ指示したに反し、「も」は或る事物が他の事物と同樣であることを示すのである。ある事物のことを言ふのであるが、同樣の事物が他にもある事を示すのである。つまり二つ以上の事物の一致を示すのである。差別を示すのではない。これが係になる時には述語は終止形で結ぶ。

雨も降り風も吹く。

沈香も焚かず屁もひらず。

山よりも高く海よりも深し。

虻もとらず蜂もとらず。

この「も」は輕い感歎の意を表はすことがある。

千圓もかゝつた。

二月の花よりも紅なり。

さる事は思ひもよらざりき。

飲みも飲んだ。

秋も秋、今宵も今宵、月も月、處も處、見る君も君　(後拾遺集秋上、讀人しらず)

又「も」を用言の終止形に附屬せしめて結びとして用ひることがある。この時には感動を表はす。

あまの小舟のつなでかなしも。

妹を求めむ山路知らずも。

三笠の山に出でし月かも。

この終止の「も」は奈良朝時代では盛んに用ひられたが、今日は全く用ひない。口語では係としてのみ「も」を使ふ。

（三）ぞ

語原より言ふと「それ」といふ指示の代名詞と同語原である。常に或る言葉の下へつくので上の詞にひかされて「ぞ」と濁つたものであらうか。時としてこれが濁らずに使はれることもある。次の例はそれである。

誰そがれ時。

誰そ。

從つて一事物をとりだして強く指示する意味を持つてゐる。これが係となる時には活用言は連體形で結ぶ。

うねび山はひるは雲と居、夕されば風吹かんとぞ木の葉さやげる。（古事記）

花ぞ昔の香に匂ひける。（古今集、貫之）

有る時はありのすさびにかたらはでなくてぞ人は戀しかりける。（古今六帖）

文中の何處へでも強く指示しようとするところへ置いてよいのである。

又「ぞ」は文の終りについて結びとなり、その事を斷言する意味を表はす。指定の助動詞の「なり」「たり」と同樣の働きをするのである。この場合體言につくか、用言ならば連體形につくのが規則である。

此は彼が書きたるぞ。

名にし負ふ壺の碑ぞ。

更に文の終りについて疑問を表はし兼て結びとなる。

行くは誰が子ぞ。

これは何の本ぞ。

何日出發し給ふぞ。

この疑問を表はす場合は必ず上に何か疑問に關する語のあるのが常である。

「ぞ」が結句を指定する「と」の下に來る時には、多くの下の語が省略されるのが常である。

遂にみまかりけりとぞ。

感じあへりとぞ。

現代の口語にては、この「ぞ」は係助詞の性質を失つて間投助詞の性質を有するに至つてゐる。

なか〳〵面白いぞ。

何ぞの種にならう。

誰ぞにやらう。

何ぞあるか。

富士谷成章の「脚結抄」には「ぞ」と「こそ」との區別を論じて、例へば石と玉とを混じて人の持つてゐるのを、「それぞ玉よ」と指して教へるのが「ぞ」で、玉を選り出して我手にとつて、「これこそ玉なれ」と教へるのが「こそ」である、と言つて居る。「ぞ」は廣く、「こそ」は狹い。前者は緩く、後者は強い。

（四）なむ

「ぞ」に似てゐるが、「ぞ」よりも語勢が緩かで、婉曲である。これが係となる時には活用言の連體形で結ぶ。

柿の本の人丸なむ歌のひじりなりける。（古今集序）

雨なむ降りける。

又用言の未然形について文の結びとなる事がある。この時には希望の意味は表はす。（この時には普通一人稱の希望を表はさないのが常である。）併し現今では「もろともに勉めなむ」などと一人稱にも使はれてゐる。

今一度の御幸待たなむ。

山の端にげて入れずもあらなむ。

春たてば消ゆる氷の残りなく、君が心は我にとけなむ。（古今集）

この「なむ」は普通助動詞として、係助詞のそれとは區別して考へてゐるのが常であるが、他の係助詞が文の結びとなると同樣と考へて山田氏はこれを係助詞に入れてゐるのである。次の三種の「なむ」を區別する必要がある。

完了の「なむ」（未來ノ助動詞）　用言の連用形につく。

係の（強める）「なむ」　結の（希望の）「なむ」　用言の未然形につく。

この「なむ」が係として用ひられてしかも文の終りに來る事があるが、これは下の結びの語が省略されたと見るべきである。

（五）や

1、疑又は問を表はす文語の助詞である。文の中間にあるとき、下の詞に疑を持たせてゐるのである。係になつた時には結びには連體形を以てする事は「ぞ」「なむ」に同じい。

春やとき花やおそきと聞わかむ鶯だにも鳴かずもある哉（古今集、藤原言直）

「春の來るのが早いのであるか、花の咲くのが遲いのであるか」といふ意味で、「とき」「おそき」に疑の意味を持たせて居るのである。

夜やくらき道や惑へるほとゝぎすわが宿をしも過ぎがてに鳴く（古今集）

「夜の暗きためであるか、道を間違へたためであるか」と「くらき」「惑へる」に疑の意をかけてゐるのである。

2、谷風にとくるこほりのひま毎に打出づる波や春の初花（古今集、源當純）

春霞たてるやいづこみよし野のよし野の山に雪はふりつゝ（古今集、よみ人知らず）

山吹の花色衣主や誰とへど答へずくちなしにして（古今集、素性法師）

右の場合の「や」はいづれも係として用ひられたのではあるが、下には體言のみがあつて結びが無い。是は體言の

一言かくなむ（申す）

昔の男は髪を結ひけりとなむ（いふ。）

かねてより思ひかけし事になむ（ある。）

下に用言(あれば連體形となつて現るべき)が略されたと見るべきである。「波や」「主や」の「や」は體言に連つてゐるが、「たてるや」の「や」は完了の助動詞「り」の連體形に連つてゐる。これはこの連體形「る」の下に體言が略されてゐると見るべきである。即ち「たてる所や」といふべきを「たてるや」と言つたのである。且つ「や」の下には「いづこ」「誰」といふ樣な疑問の代名詞が來てゐるので、是を以てしても疑問の意味が下にある事が分るのである。

3、更に「や」には文の終止になつて疑問を表はす用法がある。この時には疑問は勿論上の語にもたせるのである。

我が思ふ人はありやなしやと　(伊勢物語)

さることあるべしや。

春霞立てりや。

右の場合に「や」は活用する語の終止形を受けるのが中古語の正則であるが、今日では連體形を受ける事が多くなつた。「文法上許容に關する事項」の第十には次の如く定めてある。

疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例　有ルヤ

面白キヤ

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

例の「現行普通文法改定案調査報告」ではその理由を次の如く說明してゐる。

上ニ係リノ詞ナクシテ、連體形ニ附キタル疑問ノ「や」

中古文ニ於テハ、問ノ「や」ハ、必ズ終止形ニ附キテ、連體形ニ附カザルヲ例トスレドモ、現行普通文ニ於テハ、連體形ニ附クヲ以テ正格ト定ムベシ。

但シ「か」ト併用スルコト前項ニ同ジ

例

	中古文	普通文
四段活 往	ゆくや	ゆくや
四段活 推	おすや	おすや
一段活 着	きるや	きるや
一段活 見	みるや	みるや
上二段活 盡	つくるや	つくるや
上二段活 落	おつるや	おつるや
下二段活 得	うるや	うるや
下二段活 經	ふるや	ふるや
下二段活 建	たつるや	たつるや
サ行變格 爲	するや	するや

ナ行變格	死	しぬや	しぬるや
ラ行變格	有	ありや	あるや
	立	たてりや	たてるや
助動詞	道	みちなりや	みちなるや
	見	みえたりや	みえたるや
	殺	ころさるや	ころさるゝや
	得	えさすや	えさするや
	聞	きかしむや	きかしむるや
	取	とるべしや	とるべきや
形容詞	無	なしや	なきや
	正	たゞしや	たゞしきや

理由　此連體形ニ疑問ノやヲ附スルコトハ、鎌倉ノ中頃以上ノモノニハ絶エテ無カリシガ如シ。然ルニ、其頃ヨリ後ノ物ニ、

二品仰日使者申詞相違哉（東鑑十）

わづかにひまみゆる心地するを、あけにけるやと思ひて（調度歌合）

寂光院の北坊にて見侍る、みさせ給ひしや、いまたし（頼阿高野日記）

今まで、庭をもふみたまはぬ事もあるやと、はぢしめらるれは（相國寺塔供養記）

宸筆にあらさる御八講をこなはるできやいなやのこと（延慶御八講記）

管仲知レ禮乎（文明寛點論語義疏）

又けふは、老のよそめにもみえ侍るやとて（室町殿伊勢參宮記）

佛果の障は、因位の智を以て斷するやとゝふ（藤原基綱しらかさねの記）

是れ以て當宮の御神德にあらざるや（謠曲御裳濯）

ナド見エタリ。サテ其起原ハ如何トイフニ、終止形の疑問ノやト、何ノ係リアル末ノ歎ノやガ互ニ紛レテ、終ニ上ニ何等ノ係リナクトモ、疑問ノ意ト聞ユル如クナレルコト、「猶な、とがめそ」ナドガ後ニハなナクテモ只「行きそ」「とがめそ」ト云フノミニテ、禁止ノ意ト聞ユルコトヽナレルガ如クナラン。シカラズバ、動詞中最多ナル四段活語ニテハ、終止連體同一ナルヨリ、之ヲ他ノ活語ニ類推セシニヨルモノナラン。ソハイヅレニストモ、皆言語ノ意義轉化ノ理法ニ協ヘル者ナレバ、中古文ニ於テハ失格ナリト言フヲ得ベシト雖モ、既ニ一般疑問ノ意ト會得シテ過マラザルニ至レル後ニ於テハ、決シテ語法ニ違背セルモノト云フ可ラズ。殊ニ此格ノ行ハルヽガ爲ニ、疑問法ノ語尾ハ終止連體兩樣ナリシモノヲ、連體ノ一段ニ節約スルコトヲ得ルガ上ニ、疑問ノ有無ニヨリテ、やかヲ遣ヒ分クル不便ヲ避クルコトヲ得ベシ。又「聞くことを得や」「こゝに來や」「彼の事を爲や」ナド云フコトノ行ハレザルコト既ニ久シク、「家を建つや」「水を滿つや」「木を植うや」ナド云フヨリモ「家を建つるや」「水を滿つるや」「木を植うるや」ト云フ方耳ダヽヌ世トナレル今日ニ於テハ、本項ノ如ク改定スベキハ正當ノ事ナリト云フベシ。

4、更に「や」は動詞・助動詞の已然形につく事がある。

明けばまた越ゆべき山の峯なれや空ゆく月の末の白雲　（新古今集）

もゝしきの大宮人は暇あれや櫻かざして今日もくらしつ　（新古今集）

これは係に用ひられた「や」ではなく疑問に多少感歎の意を加へて上の文を結んだ形の「や」である。然し次の「や」は係となつた「や」であるから結びが連體形である。

百敷の大宮人は暇あれや梅をかざしてこゝにつどへる　（萬葉集十一）

うき草のうへは茂れる淵なれや深きこゝろを知る人もなき　（古今集）

5、文の末又は文の中に置かれて反語を表はす「や」がある。（即ち表面の形は疑問で裏面が斷定の意味を表はすのである。

古今勇士の意氣甚だ相似たらずや。

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは　（古今集）

この場合にも活用する語の已然形を受ける「や」の用法がある。

妹が袖わかれてひさになりぬれど一日も妹を忘れて思へや　（萬葉集）

反語を表はす「や」は下に「は」を伴つて「やは」となつて用ひられる事が多い。

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ　（古今集）

吹く風をなきて恨みよ鶯は我れやは花に手だにふれつる　（古今集）

6、「や」は次に述べる「か」と共に疑問を表はす助詞であるが、上に疑問の意味を持つてゐる語がある時には、文の末でも中でも概ね「か」を用ひて「や」を置かないのが中古の語法である。

いづくにあるか。

いかでか知らむ。

誰をかも知る人にせむ。

ところが今日では上に疑問の語があつても「や」を用ひる事が多數行はれてゐる。文法上許容に關する事項の十四には次の樣に定めてある。

上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例　誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

若し「誰問ひたるや」等といふ時には（一）上に疑問の語あるに「や」を以て結びとし（二）活用言の終止形を受くべきに「たる」と連體形を受け、合せて二項の許容案にふれたことになる。

「現今普通文法改定案調査報告」ではその理由に就いて次の如き説明をのせてゐる。

中古文ニ於テハ、疑問ノやヲ、疑ノ詞ノ下ニ用ヰルコト無シト雖モ、現行普通文ニ於テハ、之ヲ以テ正格ト定